

319

160

Ⓜ

堀江復譯

克肖なる神父 埃及マカリイ全書

明治三十八年十二月

正教會編輯局

020278-000-3

319-160

埃及マカリイ全書(克肖なる神父)

堀江 復(薩瓦) / 訳

M39

ABI-0084



克省なる神父 埃及マカリイ全書目録



克省なる埃及マカリイの傳

第一講話

福音者イエスキリが録せる現象の譬解……………三十一

第二講話

罪の國の事及び神は獨り我等より罪を除きて我等を惡王の奴隸たるより救ひ得る事……………四十四

第三講話

兄弟は正直と和平とにより互に誠實を以て生存して内部の思念と戦ふべし……………四十九

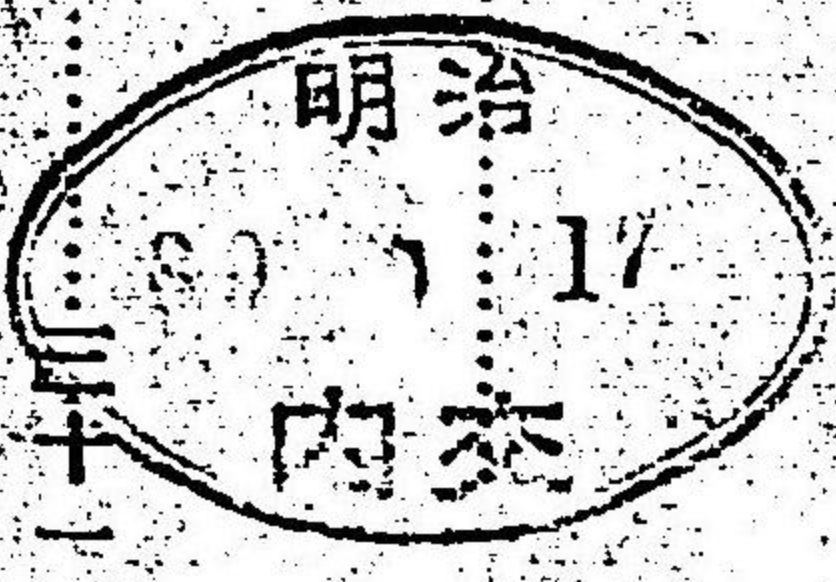
第四講話

「ハリステアニン」たる者は神と天使等より天の頌讚をうけんとせば謹慎と勤勉とを以て此世を進行せざるべからず……………五十四

第五講話

「ハリステアニン」と此世の人々との間の差異は大なり一は世の神を己れに有し心に於ても智に於ても地上の械繫に縛らるれど一は天父の愛を希ひ獨り彼を以て其悉くの願望の所歸と爲す……………七十七

目次



目次

第六講話 神に悦ばれんと欲する者は平安沈黙溫柔及び睿智を以て祈禱を行ふべし、高聲に祈禱して衆人の誘惑とならざらん爲なり。此の講話には二問題を籠む、即寶座と榮冠は物質的製造なるか、イスラエリの十二位とは如何なるものなるかとの二問題はなり。百〇一

第七講話 ハリストス人に寛容なる事。此講話にも若干の問答を含む。百〇七
第八講話 「ハリストスアニンは祈禱を行ふ時如何なるべきか、完全の程度即ハリストスアニンは完全なる程度に達し得べきか。百十二

第九講話 神の約束と預言とは種々の試練と誘惑の時に應驗する事及び獨一の神に服従する者は悪者の誘惑より救はるゝ事。百十七
第十講話 神の恩寵の賜は謙遜と熱心とを以て守られて増殖すべく、高慢と怠惰とにより失はるべし。百二十六

第十一講話 聖神の力は人心に於て火に似たる事、また心に生ずる思念を區別するが爲に必要を有する者の事、モイセイが樹頭に釘してハリストスの象となせる死蛇の事。此講話には二の問答を含む。一はハリストスと惡なるサマナの問答にして、一は罪人とサマナの問答なり。百三十

第十二講話 アダムが神誠を犯し、以前の情況及び其後彼は自己の形像をも天に屬する形像をもうしなひし事。此講話には最も有益なる問答若干を含有す。百四十二

第十三講話 神はハリストスアニンよりいかなる結果を要求するか。百五十六
第十四講話 思と智とを神にさぐる者は心の目を照されんと望し、神が此の如き者等を聖徳と大なる清潔とにより機密に進ましめて、これに其恩寵を分與し給はんことの望みにより、此を爲す事、又或る天の幸福をうけんを願ふ所の我等は何を爲さんを要する事、終に使徒及び預言者等は窓に入る太陽の光線に似た事、且此講話はサマナの地と天使の地の如何なるものなるかを教ふ、即二者は觸るゝ能はざるもの、又見るべからざるものなることを教ふるなり。百五十七

第十五講話 此講話にはいかにせば靈魂が成聖と無玷と清潔とを以て其祈郎の前に即イエスハリストスの前に居るべきかといふに關する詳細なる教旨を包含す、また或る最教訓となるべき若干の問題を含有す、例へば復活に於て盡くの肢體は起るかといふに關する問題、及び他の多くの問題、即

目次

目次

悪の事恩寵の事自由なる任意の事及び人間の價値に關する問題是なり。

第十六講話 神に屬する人々も原罪より流るゝ試惑と患難とに屬する事。……………百六十三

第十七講話 「ハリステアニン」の靈神的傳言と光榮の事ハリステアスなくんば救はれて永生に與かる者となる能はざる事……………二百〇三

第十八講話 「ハリステアニン」の實の事即種々なる方法をもて「ハリステアニ

ン」を完全に達せしむるハリステアスの事及び聖神の事……………二百二十五

第十九講話 大に進歩して成長せんと欲する「ハリステアニン」は己を凡の善に強ふべし、その在るところの罪より救はれて聖神に満てられんためなり。……………二百三十三

第二十講話 内部の人の眞醫たるハリステアスは獨り靈魂を愈し、恩寵の衣を以てこれを飾るを得るなり……………二百四十一

第二十一講話 「ハリステアニン」には二様の戦あり即内部と外部の戦ありて、外部なる者は世の鬪散より己を遠ざくるにあり、されど内部の戦は凶惡の

諸神を以て暗に入れらるゝ意念と心中に於て戦ふにあり……………二百四十六

第二十二講話 此の生命を去る者の二様の状態……………二百五十

第二十三講話 高價なる王の眞珠は王種より生れたる者のみ戴くを得る如く、天の眞珠も神の子にのみ戴かしむるを得べし……………二百五十一

第二十四講話 「ハリステアニン」の状態は賣買と醱酵に似たるあり、商買は地上の利益を集むる如く、「ハリステアニン」も此世に散亂したる思念を集めん、また醱酵はすべての混合物を酸氣あるものとする如く、罪なる醱酵もアマム

の全族に透る、然れどもハリステアスは天に屬する恩寵の醱酵を篤信なる靈魂に入るゝなり……………二百五十四

第二十五講話 此講話はハリステアスを以て固められんずんば一人も悪者の誘に勝ち得べからざるを教へ、神聖なる光榮を願ふ者の爲すべき所を示す、またアマムの破滅により肉慾の奴隸に陥りし我等は洗禮の機密を以て救はるべきを教へ、終に涙と神聖なる火の力の大きなを示す……………二百五十九

第二十六講話 不死なる靈魂の價値、貴重能力及び作用の事、彼がサマナに試みられ、誘惑より救はるゝ事、此講話には最教訓となるべき若干の問答を添

目次

五

目次

へたり。……………二百六十七

第二十七講話 此講話は「ハリステア」なる人の價値と位置とにつきて説
 始めたる詳細の論説を終ふるなり、此講話は自由なる望に關して多くの最
 有益なることを教へてこれに神聖なる智慧をみちみてる若干の問題を添
 ふ……………二百八十六

第二十八講話 此講話に於ては靈魂の不幸を説きわらはしてこれを哭す即
 罪の故に主が靈魂に居らざることとなり、また婦の生む所の者の中彼より
 大なるものあらずといはれたる授洗イオアンの事を言ふ……………二百〇五

第二十九講話 神は人間に恩寵の分配を成すに二様の方法を以てして、義な
 る審判において結果を促す……………二百十

第三十講話 靈魂は神の國に入らんに聖神によりて生れざるべからずし
 て、其状態は如何なるか……………二百十六

第三十一講話 信者は己の智を變化し悉くの思を神に集中せんを要す、神に
 對するすべての勤は實にこれにあり……………二百二十四

第三十二講話 「ハリステア」の光榮は今其靈魂にあり、されど復活の時

には恩寵の量に準じ外にあらはれて身體を表揚せん……………二百二十九

第三十三講話 不斷熱心に神に祈るべし……………二百三十八

第三十四講話 復活に於て「ハリステア」の身體が靈魂と共に照されて受
 くる所の光榮の事……………二百四十一

第三十五講話 舊「ホタ」と新「ホタ」の事……………二百四十四

第三十六講話 靈魂と身體と二様の復活及び復活せし者の光榮の異なる
 事……………二百四十六

第三十七講話 樂園の事及び神律法の事……………二百四十八

第三十八講話 眞の「ハリステア」と眞の「ハリステア」の如何なるかを
 試み知らんには我等に多くの注意と瞭解とを要す……………二百五十七

第三十九講話 神が我等に神聖なる書を與へたるは何の爲か……………二百六十一

第四十講話 すべての徳行も又すべての悪行も互に關連すること環の鎖に
 於ける如くして、一は他に係る事……………二百六十二

第四十一講話 恩寵にも又悪習にも漸々生長する靈魂の奥底は甚だ深し……………二百六十七

目次

目次

第四十二講話 人を完全なみちびき或はこれを害ふ者は外部に属するものに
 ならずして内部に属するものなり即或は恩寵の神なり或は凶惡の神なり
 ………………三百六十九

第四十三講話 「ハリステアニン」たる人の進歩と其進歩のすべての力とは心
 に關係するを種々に描寫す……………三百七十二

第四十四講話 心の慾と病とを療するハリステスは「ハリステアニン」たる人
 に如何なる變化革新を成し給ふか……………三百七十九

第四十五講話 人を醫すを得るは或る藝術にあらず又此世の富にも非ずし
 て、たゞハリステスの來ること是なり此講話に於ては人と神との最大關係
 を示す……………三百八十七

第四十六講話 神の言と世の言と神の子と此世の子との間の差別……………三百九十三

第四十七講話 法下にありし事の譬解……………三百九十八

第四十八講話 神における完全なる信仰……………四百〇九

第四十九講話 人もし他の世の福樂に與かるを得ずんば此世の快樂を辭す
 る充分の理由あらず……………四百十四

説教

第五十講話 神はその諸聖人に於て奇跡を行ふ……………四百十八

克肖なる我等が父埃及マカリイの書翰……………四百廿三

第一説教 心を守る事……………四百五十九

第二説教 靈神上の完全……………四百八十

第三説教 祈禱の事……………四百九十三

第四説教 忍耐と細心……………五百〇七

第五説教 智を高尙にする事……………五百三十三

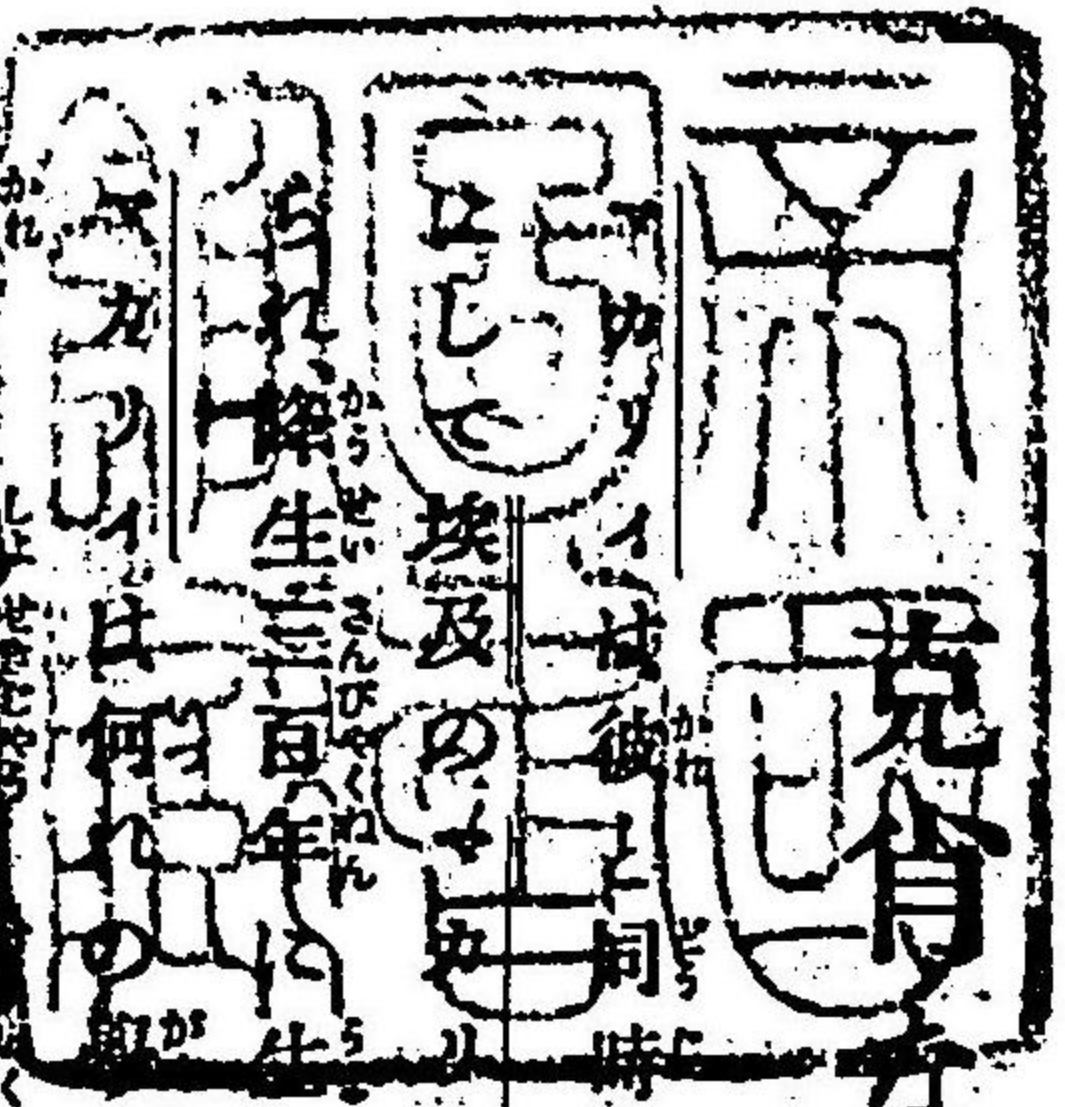
第六説教 愛の事……………五百五十三

第七説教 智の自由の事……………五百八十五

目次終

目次

克育なる埃及マカリイの傳



彼は世の傳説の脱を記載し(講話十四の七)アリストナリ、ブリットン、ソクワトを知り(四十
 二の二)文法家、修辭家、詩人、辯學者の事を知る(四十五の二)又第十五講話には學校に於て
 克育なる埃及マカリイの傳
 なる他のアレキサンドリヤの苦行者マカリイとは同名異人
 といはれ、埃及のマカリイと名づけられ、其聖徳と賢明との爲に大マカリイと名づけ
 られ、餘生三百年に生れたり。彼は少年の時を父母の家に送り、父の群を牧したりき。
 マカリイは何れの學校に教育をうけしや詳ならず、然れども其書する所によるに、
 彼には書籍上の教育もなくんばあらざりしこと明なり。さりながらその道徳上の
 教育は夙に始まりしこと疑なし。彼が最幼稚なる年に於て行爲の方正を心掛けし
 ことは、彼の自から語りし如く、弱年に於ける一の事件はこれを證す。一日彼の同輩
 等無花果を取らんが爲に他の園に行きけるが、却走する時、其一を落したるを、マカ
 リイ拾ふて食盡しぬ。それ此の過失は彼の深き心頭に重く掛りて、永く記憶にと
 まりしかば、マカリイの自からいひし如く、終生彼は此事を涙なくして憶出すこと
 あたはざりしといふ。

* 彼は世の傳説の脱を記載し(講話十四の七)アリストナリ、ブリットン、ソクワトを知り(四十
 二の二)文法家、修辭家、詩人、辯學者の事を知る(四十五の二)又第十五講話には學校に於て
 克育なる埃及マカリイの傳

克肖なる埃及マカリイの傳

教くる教訓の順序は講讀、羅句語文法、法學なるを示す(四十四)然より又は藝術より信れる許多の比喩は明に彼が博物學及び社會生活の状態を熟識するを證す(傳へて我等に至れる彼の書に依るに希臘語を知れるは既に彼が教育あることの證據と爲すに足るなり。

苦行の生活に向ふ強大なる趨勢は、第四世紀の初に當り、大アントニイの師表によりて埃及に起り、信者の多數の群を野に誘引しけるが、特別奥妙の途を以て被選者を其預定したる途にみちびける神の恩寵の作用は、マカリイをしてすべて地に屬する處をすて、その靈魂の救を専ら慮るに己を捧げしめたり。

マカリイは世を棄てんと決心しけるが、俄に野に移ることをなさず、荒野の苦行の難きを忍耐し得るや否や、自から己を試みんと欲して、先づ村里に近き所の小庵に移りぬ。大アントニイも其苦行の生活を此の如く始め、またアントニイの先に敬虔なる生活の多くの熱心者も、此の如く苦行したりき。

祈禱と聖詠を唱ふと思を神に擧ぐるとはマカリイが小庵に於ける首なる業なりき。生計を求めんが爲に彼は篋を編り、一の知己あり、彼に來りて其細工物を取り、これを賣りて得たる所の金にて彼に食を給せり。マカリイの徳行の生活と敬虔賢

明なる教訓とは一般の注意を彼に向はしめたりき、されば近きにある一村の住者等來り、彼の意に反し、彼を以て己の教師とはなしぬ。しかれどもマカリイは獨居を愛したるにより、他の更に遠隔なる地方に逃れしが、以前の知己は彼を其處に尋ね得て、すべての入用を彼に給したり。

マカリイは此處に於ても其心に甚だ願へる静寂を破られずして樂むこと久しからざりき。教訓を求むる者等は早くも彼に集ひ來りぬ。然のみならず、こゝに試惑に遭遇しけるが、彼はたゞ聖神の力を以て堅めらるゝ人のみ堪へ得る所のものを忍耐するを得たりき。近きにある所の村に一處女あり、懷妊し、マカリイを産て其罪の原因者となしぬ。マカリイは村の住民等よりうけたる汚辱と打撃とを溫柔に忍耐して不平を訴へざりき。剩へ彼は處女に養料を送るべき義務をさへ負はされければ、これが爲に甚しき勞働を以て己を疲らせり。しかれども神の攝理は奇跡を以て聖なる苦行者の無罪なるをあらはせり。不幸なる子を産むべき期已に至りけるに、處女は恐ろしき苦悶にかゝり、分娩する能はずして、終にマカリイの無罪なるを衆人の前に告白し、其罪の眞の原因者を名いふに及べり。故なくして遁世者に凌辱をかうひらしめたるが爲に悔恨して自から懊惱せる村民等は、赦免を願はんがため

克肖なる埃及マカリイの傳

克肖なる埃及マカリイの傳

に彼の許に集ひ來りしが、これをきいてマカリイは最遠隔なる野に隠れたり、即ち入トの野に隠れたり。

硝石に富める湖ニトリイの湖を距る遠からざるツワイの野には今に至る迄四の修道院の存するあり。其一は聖マカリイの修道院と名づけ他の三はアブマカル(即ち父マカリイの修道院)といひ、マカリイの野の諸方はすべて修道院ならざるはなかりき。壇垣及び屋宇の遺址はひかし此處に多くの修道院のありしを證す。これ埃及のマカリイが避けし所なること疑なし。ニトリイ山と其背後にある野とは既に修士等の殖民する所となりて、此處は小庵の野となりぬ。修士の居住の爲にこゝに基をなし、は大アントニイの祝福により克肖なるアムモニイといふ人なりき。

スキトの野は更にケルリヤの野より遠く一晝夜の行程にあり。空漠たる砂石の野にして、彼處には水を飲むが爲に僅に足る程なる泉の稀にありのみなり。こゝには通路あるなく、星の運行によりて途の方向を知るのみなりき。

さりながらマカリイが此處に移りし後幾ばくもなく、敬虔の熱心者は多くこゝにあつたりて此の苦行者の誘導に己を托せり。其の高き苦行により、又其の完全に向ふ不斷の進行によるに、彼等は人よりも寧ろ天使に肖たりき。埃及の野に居る修道士

の隊は數十千の多きに至れり、しかれどもスキトの修道士は生活の完全と其賢明とにより衆人の間に稱讃せられたり。スキトの野の恐ろしき程はこゝに住む爲に勇氣は更に要用なりしが、マカリイはたゞかくの如きの勇氣ある者のみを己にうけたり。ソクヲト書していへり、埃及のマカリイは自己の敬虔なるにかゝはらず、來る所の者に對して甚だ嚴なりきと。

マカリイがスキトの野に移住したるは三十歳の時なりしが、其の苦行の生活の初年に於て最早人々は彼を呼んで若老といひけり。マカリイの許に集まりし兄弟等長老を有せざりしにより、埃及の主教はマカリイが年四十に至りて既に奇蹟と預言の賜を有したる時彼を按手して長老となせり。兄弟の數を増くはるや、マカリイは彼等のために四の聖堂を建て、彼等おのゝ特殊の長老を有したりき。すべて遁世者等は互に相別れて特殊の庵に居れり。マカリイは亦自から別に深き野に居りて、おのれにたゞ二人の門徒を有せり。一は來者に接し、他はマカリイの側にある特殊の庵に居れり。マカリイは自己の庵より長さ半スタマヤ(希臘尺度の名、六百〇六尺八寸一分ある地下の行路を穿ちて、其終端に小なる洞窟ありき。來者あり彼を安んせざらしむるや、彼は此行路によりて己の洞窟に逃げたり、然るに誰も其の何

克肖なる埃及マカリイの傳

くに去りしを知らざりき。此の隠道のことを知れる門徒の一人はいへり、マカリイは洞窟に行きながら祈禱二十四を讀了り、歸途もまた同様なりきと。大マカリイの生活に關する報知の我等に達せしものは多からざるなり、而して此の多からざる報知も亦たいされ、にて我等をして彼の内部の生活を僅に識るを得しむるのみなり。ハリストスの中に隠れたる彼の生活は我等のためにも隠れて存せり。彼の内部の生活を識らんが爲に、最好き泉となるべきものは彼の書なり。彼は深き智慧をみちみてる自著の書に於て、神的生活の奧義を述ぶるも、理論によるにあらずして、實驗による即ち自から經驗したる所のものを傳ふるなり。故に我等は彼が内部の人の生活をあらはせる章段に於て、彼自己の生活の真相を看破するを得べし。これらはマカリイの神的完全の階段に漸々昇進したるを、眞實にあらはすが爲に、不充分なること論を俟たず、しかれども、もし我等は彼の内部の生活の真相を少しなりともこれにより察知するを得ば、我等の爲に足れり。マカリイ言ふ人は、道徳に對する預始或は傾きを天然に有して、神はこれを尋ね給ふ、されば人の先づこれを理解すると、既に理解すれば意志を以て愛し、且預始することを命するなり(講話三十)。アメリの犯罪の時より心の意念は神を愛するより離れ

て、此世に散亂し、地に屬する物質的意念と混淆せり(講話二十)。ゆるに靈魂は罪によりて散らばりたる意念を集めて、これを鎮靜すること、恰も好走戯兒の如くし、これを其身體の家にみちびき入れて、不斷に禁食と愛とを以て主を待たしむべし。もし我等は懈らず、邪なる思に自から牧地をあたへずして、思を主に向はしめつゝ、意志を以て智を誘引するならば、主も其意旨を以て我等に來りて、實に我等を己に集中し給はんこと疑なし、何となれば、神に悦ばるゝと勤むるとは、意念にかゝればなり。汝が己の智を神を尋ぬるに集中する程、神は其の自己の善心と仁慈とを以て汝に來りて、汝を慰安せん。彼は立ちて、汝の智と思と意の發動とを檢し、いかに神を尋ぬるか、汝の全靈よりするか、緩慢を以てせざるか、等閑を以てせざるかを監視せん。而して汝の神を尋ぬるに勉勵するを認むる時は、汝にあらはれて其助をあたへ、汝を其敵より救ひて、汝のために勝利を備へ給はん(講話三十一)。人は地に屬するものを偏愛するより脱せざらん間は、其心中に他の戰と他の秘密なる抵抗と他の惡なる諸神よりする意念の争のありと、又他の苦行の臨んで、其前に在るとを知るゝたはざるなり。たい地に屬する物を偏愛するより脱して、神に附く者は、獨り内部に起る所の情慾の戰と内部の争と惡なる意念とを認識するを得べし(講話三十一)。智よりも下く、

思よりも深く我等が靈魂の知るべからざる曲處に我が靈魂の首なる部分を殺傷する蛇の潜み居るあり。此の蛇を殺し充分の潔さに達せんことはたゞ一のイエスマハリストスに頼りて能くすべし(智の高向にする)。靈魂は俄に清潔に達するを得ず前以て患難を試み卑辱と困迫とを歴來らざるべからず(三の三)。もし人は苦なくして善に進歩することを得ばハリストス教は石頭は誘惑の石とならざるべく信も不信もあるあらずして、苦行も戦闘を爲すの機會もあらざるべし。神の言を聞く者は悔悟の心を生ぜん而して其後神の照覽により人を益せんが爲に恩寵が人より遠ざかるにより始めて人は練習して戦を學ばん(講義廿七の)。患難と不幸とを喜んでうけんこと要用なり、けだしこれ神が我等と共にするを證すればなり。世に不幸に逢ふて汝は始めて反省せん、曰く「我れ世にありて不幸なりいで世を離れて神に事へん」と此の意思に到り達して汝は誠命をさかん、曰く「汝の所有を賣れ」マトフイ十九の二十七肉體の親與を避けて神に事ふべしと。其時汝は世にありて己の不幸の爲め又此の不幸によりハリストスの誠命に従順なる者となるが爲に感謝するを始めん。世より遠ざかりて神を尋ねるを始むるや己が天性とも從前の品性とも祖先傳來の慣習とも戦はざるべからず。しかれども此の慣習と戦ふ時汝は汝に抵

抗して汝の智と戦ふの意念を發見すべくして此意念は汝を引きて汝が逃れ避けんと欲する有形界中に汝を彷彿せしめん。其時に意念は意念と對抗し智と對抗し、靈は靈と對抗し、神は神と對抗し、起ちて戦ひ争ふを始むるなり(講義三十二)。靈魂が罪の生活より遠ざかり世の風習を忘れんとするや、魔鬼は患難と誘惑と見えざる戦とを以て靈魂を窘逐せん。是に於てか靈魂を罪惡の埃及より引出したる者に對する靈魂の愛は顯然としてあらはれん。靈魂は敵の力の襲ふて己を殺さんとするを悟るべく、亦その己の目前に慘怛たる苦みと患難と絶望との海を見んしかれども靈魂は準備したる敵を見て後に退かんことも前に進まんことも能はざるべし、何となれば死を畏るゝ畏れと四方を圍繞する種々の恐るべき患難とは死を其目前に見せしむればなり。神は靈魂が死を畏るゝ畏れの爲に落膽すると敵のこれを呑まんとするを見る時は、徐々と靈魂に行爲して、靈魂が果して信に堅きか、神に愛を有するかを試みて、これに小なる助をあたへん。けだし生命にみちびく道の此の如くなること、即ち患難と困迫と多くの試練と最苦しき誘惑とを以てすることとは、神を以て定められたるなり。されば靈魂はもし尙此世に於て死を目前に有して限りなき患難の中に此進行を成すならば其時は最早強き手と高き臂と聖神の

照明とを以て暗黒の力を破るべく、恐るべき場所を超ゆべく、暗黒の海と喰盡さるる所無き火とを渡らん(講話四十七の十二、十三)。或者等は世より遠ざかり、福音經にいふ如く、此世を棄て、大なる忍耐により祈禱、禁食、勉勵及び其他の徳行に大に進歩を爲すといへども、神が恩寵と慰安と精神の喜とを直ちにわたへずして、其賜を遷延し、且はこれを止むるは、これ自由の意志を試みんが爲にして、願ふ者にわたへ、叩く者に生命の門を啓かんことを約したまひし神を果して信誠眞實なるものと思ふや否やを見んが爲なり、凡の徳行は神の賜にあらざるなし己の力を以て罪を根絶するとは能はざるべく、人の力に及ばざるものとす。これと戦ひ、抵抗して傷をかうむらしめ、或はこれをうくることはこれ汝の力にありしかれども、根絶することは神の所爲なり(講話三、四)。豪雄なる人の聖堂に建増するは爲したるによるにあらずして、望を起したるによるに、けだし人を救ふは人の自己の行にあらずして力をわたへし者なり(講話三十、七の九)。汝が自から行爲して本来汝に屬するものは、たとへ美好にして神に喜ばるゝといへども、不潔なり。例へば汝は神を愛す、然れども不完全なり、汝の祈禱は心の飛躍とも又種々なる雜念とも自然に相合するなり。これに反して神は神と眞とを以て行はるゝ、潔き祈禱を汝に賜はん。聖神は自から人の荏弱に助け、主は心の

地に天の種を入れて、之を耕す。道徳上の腐敗は天性に存するありといへども、たゞ其の己の爲に牧地を看づくる處に於てのみ勢力を有するなり。柔なる麥の莖は莖に荒さるべし、しかれども夏が來ると共に植物の枯るときは、莖は少しも麥を害せざらん。恩寵に於てもかくの如し、神の賜と恩寵の人に増殖して、人が主に於て富むときは、悪習は人に少しは存すといへども、人を害するあたはざるべし(講話廿六の二)。「ハリステアニンはもし敵に襲はるゝならば、神性に於て避所を有す、されば彼等は能力と慰安とを衣せられて、戦は少しも彼等を驚かさざるべし。潔き心を有するは容易き事にあらず、良心と心を潔うしておのれに悪を全く根絶せんとせば、人の爲に戦と勞とは多く要用なり。或者に恩寵あれども心はなほ不潔なることあり。これにより陥りし者は陥りぬ、彼等は恩寵と共に己に烟と罪の存するあるを信せざりき(講話廿六の十、四、廿四、廿五)。或者は神の恩寵の盛に作用するにあたり己を防守して、自己の肢體を既に聖にせられたりと思ひ、ハリステス教には最早肉慾の居るべき餘地あるなく、謙遜清潔なる心を自から求め得らるべく、内部の人は最早神聖なる天に屬するものに飛躍すべしと自から決定するに至る。さりながらかくの如き人が完全の域に達したりと思ひ己を安然なる港に入りたる者と爲して疑はざる時に、彼に

對し波起りて、彼は再び己が海中にありて、たゞ水と天と死の近づかんとする處に引去られたるを見ん。さりながら此の如き者は或る恩寵を再び賜はること、全海の深きより一小點滴をうけたる如くして、此により毎時毎日行はるゝ奇蹟を見ん。何故こはかくの如く或は又然らざるか、智はいよゝゝ困まん。けだし善の嫉妬者たる「サマナ」が徳行に大に進歩する者に惡を勧め入れて、これを覆さん力をふるに由るなり（講話三十）。

かくの如く聖マカリイは其講話に於て神の種々なる状態を描寫して、神的戰鬥をあらはす、これ彼の自から實驗せしものなること論を俟たず、彼は人力に超越すと思はるゝ程の苦行を以て己を徳行に固めたり、嚴重なる修道士等はスキトの野に在りて飽食せず、甘美を求めざりしも、如此にはあらざりき。しかれどもマカリイは其の天然の要求を満たすを生命を支ゆるが爲に必用なる丈に止めて、それより多くせざりき。或時門徒のエワグリーといふ者渴に苦みて、水を飲まんことの許を願ひしに、マカリイはいへり、「日蔭に居るを以て満足せよ、多くの者は此安慰をさへうばはるゝなり。余は食ひ且飲み且寝るに生命を支ゆるだけより多くせざることに已に二十年なり」と。聖マカリイは食を嘗むること一週間にたい一回なりき。しかれども

彼が身體の枯瘦は禁食と節制の結果にして併て亦神を畏るゝの結果なりき。或る神父等マカリイに問へり、「汝は或は食ひ或は禁食するも汝の身體は常に枯瘦す、これ何故なるか。」マカリイ答ふ、「然ゆる薪を掻廻す所の火棍は不斷火の爲に食まるゝなり、人もこれと同じ、もし人は神を畏るゝ心を以て其智を淨ひるならば、此の神を畏るゝ心は其體を食まん。」たゞ、彼は通世者等と食を借にしたることありしが、こゝに彼に葡萄酒を薦めけるに、彼は辭せざりき。しかれども其後一杯の葡萄酒の爲に彼は終日水を飲まざりき。其門徒これを認めて、彼に復た葡萄酒を饗せざらんことを兄弟に願へり、何となれば彼に慰をあたへんと欲して、新なる疲勞を來すの機會を興ふればなり。

マカリイは腹と舌とを制し己の庵に止まりて、罪の爲に泣くを以て修道士の第一の本分となせり。「兄弟あり、マカリイに問へり、「いかにして我は救はるべきか。」老人答ていふ、「人々を逃れ、庵中に坐して己の罪の爲に泣くべし、しかれども殊に舌と腹とを制せよ。」マカリイ一日スキトに於て集會を散じたる時、兄弟に告げていへり、「兄弟よ逃れよ」と。兄弟あり、曰く我等野よりいづくにか逃るべき、マカリイ指を口に置きていへり、「これを逃れよ」と。其後己の庵に入りて自から戸を閉しぬ。

マカリイは自由なる貧と無所求とを以て修道士の爲に最高尙の事となせり。或時に三の書籍を所有せる父、フニオドルフルメイスキイ來りて、マカリイに問へり、視よ我に三書あり、我自からもこれによりて益を得、兄弟もこれを用ひて建徳を得るなり、いかにせば我が爲に更に有益なるべき、自己の益の爲、又兄弟の益のため、これを己に留むべきか、或はこれを賣却して得る所のものを貧者に頒つべきかと。老人答ふ、前者は善し、しかれども無所求は極めて善し。マカリイは己の庵に於て二回賊に遇ひけるが、たゞにこれを遮止せざるのみならず、恰も其黨與の如く、自から彼等を助けて、物品を其庵より持ち去らしめたりき。

マカリイは神的全に大に進歩すると共に謙遜の情を己に固めんことを最も深く慮れり。彼は己を他人より區別することをいかにしても欲せざりき。兄弟あり、彼を聖にして大なる老人として訪來るときは、彼はこれと何も言はざりき。しかれどももし誰か詰責を以て彼に向ふれば、たとへ不當の者なりとも、かくの如き者を樂んでうけたり誘惑者が自からマカリイに驕傲の心を起さしめんと盡力したるは、無益に歸して終にその謙遜の高さを認めざることをあたはざりき。彼は神の役者にいへり、マカリイよ、凡そ汝が爲す所のものは我も亦これを爲す、汝は禁食すれど

も、我は全く食はず、汝は徹醒すれども、我は全く寝ねず、たとへ一事を以て汝は我に勝つ、即ち謙遜なり。

マカリイの謙遜なる精神は道徳上の完全につきて自から謙りて、他を己の上に立つる機会を常に見出せり。我は未だ修道士に非ず、たゞ修道士を見たり」とはこれぞマカリイがニトリイの兄弟を教訓するに於ていひし言なる、其後彼は野に居る兩人の修道士の事を兄弟に話説して左の如くいへり、彼等はすべての人類より遠ざかりて居り、野獸の繞る所となりて、無言者と同じ食物を以て自からやしなへり、思を神に舉ぐることを只管練習しつゝ、互の愛を以て相與に四十年を送りぬ。マカリイ此二士に問ひけるは、修道士とならん、我は何を爲すべきか。彼等答ていふ、もし凡そ世に屬するものを棄つること、我等の如くするあたはずんば、己の庵に行きて己の罪を哭せよと。マカリイは此の苦行者のことを想起し、反復していへり、我はいまだ修道士にあらず、たゞ修道士を見たり」と。他日神の照管はマカリイを謙遜に固めんが爲に、二の婦人を彼に指示せり、彼等は其良人と共に世に市に居りしかど、道徳上の完全に於てはマカリイより更に高尚なりき。老人は躊躇せず、野より市に來りて此の二婦人にいかなる生活を爲すを種々尋問しけるが、マカリイの願により

て彼等語ること左の如くなりき、彼等は二人の兄弟に嫁してより既に十五年を経しが其間互の愛と和合とを以て生活し常に良人の意を遂成せり、修道院に入らんと望を有したりしかど、良人のこれに同意なきにより、世に留まらんと決心せり、しかれども己の心を微醒して一の空言をも發せざらんことの約束を相共に定めたりとぞ。マカリイは野に居ること彼等が世に居る如くなるを賜はらんことを謙遜にして神に請願せり。

聖マカリイは修道士の生活を學ばんが爲に行きて修道士の父なるアントニイを訪へり。アントニイ先づ彼の忍耐を試みんとして彼を其住所に入るをゆるさざりしが、其後彼のために戸を開き、款接していへり。余は久しく汝を見んことを願へり、愛を以て彼をうけて慰藉したりとぞ。彼等は棕櫚の葉を以て籃を編み、靈魂の救の談話にて日夕を送れり。克肖者マカリイは人々の前に於る謙遜の神に對する謙遜に基づくを認めて、凡そ恩寵をうけたる人に於る最も天性自然の情となせり。彼は其講話の一に於ていへり「恩寵をうけたる人は己を以て悉くの罪人よりも更に卑しきものと爲す而してかゝる意思は人に植付きて天性自然なる意思の如くなるべし、されば彼は神を認識するにいよく深く入る程は、いよく己を無智な

るべしと思ひ、いよく學ぶ程は、殊に己を何も知らざる者と認むるなり。恩寵は靈魂に此を造生すること或る天性自然なるもの、如くなるべし」(講話十六)。

彼は又他の講話に於ていへり「眞に神を愛しハリストスを愛する靈魂は、主に對する飽かざる志望により、千百の義なる行をなすといへども己を以て何も未だ爲さざるものと思ふ。禁食と微醒とを以て己の體を疲らすといへども、徳行の爲に勞するをいまだ始めずとの感情に止まる。主に對する限りなく飽かざる愛により種々なる靈神上の恩賜或は啓示及び天の奧義に達するを賜はるといへども、自から己に於ては何も未だ得ずと思ふなり。反つて日々に飢ゑ且渴き、信と愛とを以て祈禱を務めて恩寵の奧義をうくると凡の徳行に己を建つるとに飽くあたはざるべし」(講話十)。

恩寵の賜の盛なる時に於ける此謙遜の情を、マカリイは美なる比喩を以て説明すること次の如し、曰く「もし主は其寶を以て或る貧者に托するならば、うけて守る者は、此寶を以て自己の所有と思はず、何處にも己の貧しきを自から認めて、他人の寶を費すを敢てせざるべし、何となれば彼は常に自から思へらく此寶はたい我に屬せざるのみならず、更に有力なる王を以て我に托せられたるものにして、王は欲する時はこれを我より取らんと、神の恩寵を有する者も己をかくの如く思ふ

べし。もし彼等は高慢して、其心に自負するならば、主は其恩寵の賜を彼等よりうばうて、彼等は主より恩寵をうくる以前の如くして存せん(一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五)。

マカリイの謙遜は他の弱きを寛容するに於て特別にあらはれたり。スキトの老人等の證に依るにいへり、彼は恰も地上の神の如し、何となれば神の世を覆ふ如く、マカリイも罪をおほひ、これを見て見ざる如く、聞かざる如くなるによる。或時彼は重罪を犯す兄弟を見ていへり、もし彼の神造物主は火を以て燬くを能くするも、罪を忍耐し給ふならば、我は何人にして彼を罪するを得んやと。マカリイいふ、ハリスティアニンは顯然たる淫行者をも、罪人をも、放蕩なる人々をも、誰をも罪すべからず、乃ち純直なる心と清き目とを以て衆人を見るべし。心の清きとは罪人若くは劣弱者を見て、これに同情を有し、憐憫なる者となるにあり(五、六、七、八、九、十)。

マカリイは兄弟に互に相愛するを第一に勸めて、溫柔を以てこれを治めたり、而して彼等に接するには總て特別の正直を以て卓越せり(第三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十)。いへり、何故汝は己をかくの如く行ふか。マカリイ答ふ、われ吾が主に十二年事へたるは、主が此恩寵を我に賜はん爲なり、然るを汝等は我にこれを棄てんことを勸むるか。マカリイは各人に勤めんことを心掛けたり、或時彼は一の遺世者に至り、其

病めるを見て問へり、何物か食はんを欲せざるか。病者はいへり、バステリを欲すと。老人は病者に其願ふ所のものを送らん爲に躊躇せずしてアレキサンドリヤに下り行したりとぞ。

マカリイは兄弟を規責するを愛にて融和せんことを盡力せり。彼はいへり、もし汝は何人かを譴責して怒を發するならば、これ私情を飽かしむるなり。かくの如くならば、他を救はずして自己に害を招かん。彼が智と愛と溫柔と寛容とを以て迷ふ者を眞實の途に向はしめたるは、他人の嚴重を以てしたるよりも更に速なりき。スキトに二人の兄弟あり、罪に陥りしに、市のマカリイ彼等を破門せり。埃及のマカリイ此事を聞知するやいへり、兄弟破門されたるに非ずして、マカリイ破門されたるなりと。破門の爲に此言をうけて、市のマカリイは去りて湖上に遠ざかりけるが、彼處の天然は悔者を淨めんが爲に最便利の地なるをあらはせり。大マカリイ來りて彼に就き、彼が盡く蚊に咬はれたるを認めて、いへり、汝兄弟を破門したるに、視よ、彼等は村に退去せり、我汝を破門したるに、汝の此處に逃れたるは、恰も處女が其奥室に逃れたる如し、さりながら我陥りし兄弟を招きて、彼等を審問したるに、彼等はいへり、毫も如此の事あらざりしと。兄弟よ、魔鬼は汝を笑はざるか。汝自から省みよ。汝は

自から何も見ざりき己の罪の赦を願ふべしと。マカリイ答ていへり、もし欲せば、我に「エビテミヤ」を課せよ、老人いへり、行きて三週間禁食して、一週間にたゞ一回食をうくべし。

一の兄弟あり誘惑にかゝりけるをその誘惑したる者より直ちに聞知して、マカリイ自から此兄弟の庵に來り訪ひけるが、彼は己が不潔なる意念を告白するを耻づるのみならず、意念は我を誘はすとさへいひけるを、マカリイ謙遜を以て彼に實を吐かしめたり。マカリイいへり、視よ、我れ苦戰すること幾年なるか、しかるに淫慾の神は我老人をも安んせしめず、其時兄弟は告げていへり、父よ、信せよ、我をも亦同く安んせしめずと。老人は彼を誘はんとする他の意念をいひ、かくの如くして彼を承伏せしめたり。遂に教訓をさづけて彼を置きけるが、其時より此兄弟は他の人々に勝れて奮闘したりとぞ。

マカリイはニトリイ山の途上に於て一偶像の祭司に遇ひ、溫柔を以てハリヌストスに歸せしめたりき。これより先マカリイの門徒此祭司に遇ひ、彼を呼んで魔鬼といひたるが爲に撃たれて半死半生に至りぬ。さりながらマカリイが彼と遇ふて、慇懃に彼と接するや、これに驚かされたる祭司はいへり、我汝は神の人なるを知る、其足

を掴まへていへらく、我を修道士となさいらん間は、汝を放さずと、而して彼は神父により兄弟の數にうけられ、彼によりて他の多くの異教人も、ハリヌマアノンとなり。マカリイ此事件を指示していへり、悪言は善者をも悪者となし、善言は悪者をも善者と爲す。

マカリイの賢明と聖徳のことをきいて、多くの人は教訓をうけんが爲に遠方より來りて、彼に就けり。マカリイの教訓は溫柔を以て卓越し、深き實驗的の智慧に満たされたり。其の教訓の目的は教訓せらるる者に己を省みると、思を神に擧ぐると、祈禱と謙遜とを勧め入るゝにありき。これを畧言すれば、彼が自から高尚に領有したる道徳を勧め入るゝにありき。修道士とならんことを願ひし少年あり、一日問ふていへり、如何にせば余は救はるべきかと。マカリイ先づ彼を墓につかはして、死者を晋らしめ、其後稱讚せしめたり。少年のこれを實行するや、マカリイ彼に問ふていへり、死者はいかに答へしか。答ふ彼等は稱讚にも罵詈にも默然として答へざりき。老入いへり、もし救はれんことを欲せば、汝もかくの如く死すべし。死者と同じく人々よりの侮辱も人間の名譽も思ふなかれ。もし汝の爲に毀は譽の如く、貧は富の如く、缺乏は有餘の如くならば、汝は死せじと。又マカリイは教訓を願ひし他の門徒に告

て曰く誰をも罪するなかれ、誰をも辱しむるなかれ、此を守るべし、然らば救はれん。マカリイいへり我等もし人々の我になしたる惡を記憶して忘れずんば、神を念ふ記憶は我等に弱らん、しかれども魔鬼より蒙らせらるゝ惡を記憶して忘れずんば、彼の箭より免れて安然ならん。

いかやうに祈禱すべきかとマカリイに問ひけるに、彼答へていへり、汝等全き心より左の如くしばし、反復するならば可なり、曰く主よ、汝の欲する如く、又知る如く、我を矜めよ、もし誘惑に遇ふあらば主よ助け給へと。

マカリイ人に善を爲す天然の方法の不充分なりと認められたる處に於ては、奇蹟を行ふの賜に向へり。かくの如く彼は或時死者を復活せしめたるは、靈魂の不死を異端者に證せんが爲なりき。他時又彼は死者を復活せしめたり、これその罪せらるゝ者は果して死者の死の原因者たるや否やを知らんが爲にして、これにより不當に罪せられたる者を救ひ、死者は墓中より明白なる聲を以て彼を無罪と認めたり。又一日マカリイは七人の兄弟と共に刈取の爲に出で、刈りけるが、一婦あり、彼等が後にありて、穂を拾ひつゝ、絶えず涕泣するを認めたり。マカリイは實に其の己を雇ふたる田主より、此婦人の夫が或人より貨物を請取り、これを何處に置きしを

つけずして頓死したることを聞知せり。マカリイ該死者に問ひけるに、貨物を隠しある處をつげたりしかば、此により寡婦と其子とを奴隷より救ひ出せり。總じてマカリイは甚だ多く奇蹟を行へり。ソクラトといへらくマカリイが病者を多く愈し、多くの者を惡神より免れしめたるは、これを書さん爲に全書を要すべしと。

アリイ教徒の主たる時に在りてマカリイはアリイ教徒等とも已むを得ず、戦はざるべからざりき。埃及の遁世者等はニケヤの信經の熱心なる保護者なりき。アレキサンドリヤの帝位に即きたるアリイ教徒ルナイは大アプナシイの死後、三百七十三年、其後任に充てられたる主教ペトルを遠ざけ、殘忍酷虐を以て埃及の遁世者等をアリイ教をうくるに強ひたりしも、効なかりければ、此の遁世者の父なる兩マカリイを流罪に發遣することに決定し、夜間密に彼等を捕へて、一のハリストスアモンもあらざる埃及の一孤島に引去りぬ。さうながら主は此處に於ても其寵人を表揚し給へり、彼等祈禱を以て此島の祭司の女を愈しけるが、愈されし女の父と島の住民等は皆ハリストス教に歸し、洗禮をうけ、偶像を毀ち、祠堂を獻じてハリストス教の殿堂となせり。此事アレキサンドリヤにきこえければ、ルナイは民の動亂を恐れ、て兩マカリイを野に歸すべきを命せり。

マカリイは此の地上の旅行者とし、世の爲に死せる者として己の救のこと、己が誘導に托されたる兄弟等の救のことを不斷に慮りて、スキトの野に六十年を送れり。彼は地上の業務よりも神との談話に時を送り、心神大悦の情況にありしこと、屢々なりき。此の恩寵をかうむれる靈魂の特別なる状態をあらはせる貴重なる描寫は彼の書に於て守られたり。其の活ける描寫はマカリイが自から實驗したる所をあらはすを示す。(此の如き状態の記事は第十八章七節以下に見ゆ)彼は比喩を用ひていへり、成年者は嬰兒を欲する處に負去らん、かくの如く恩寵も心の深さに作用し、其靈魂を負ふて、天上完全の世界に永遠の安息に昇せんと(緒語十六)。その死する少く以前、の事なりき。マカリイはニトリイ山の通世者等の願により、彼等を訪問せり。此訪問は兄弟の爲に貴重なりき。されば彼等は教訓をあたへられんことを願ひしに、マカリイ其願を容れて言へること左の如し、兄弟よ泣かん、我等の涙の我等が體を焼かんとする處に去るに先だちて、我等が目は涙を流すべしと。是に於てみなく泣き、其面を伏していひけるは、父よ、我等の爲に祈り給へと。マカリイは涙を流すを愛せり。彼いひけるは、汝が天のイエルサリムの奇異なる福樂なる形状を見るを賜はるは、他にあらず。たゞ日夜涙を流して左の如くいひし者に倣ふにあり、曰く、毎夜我が榻を濡ひ、我が涙にて

私の樽を濡す。聖詠六の七、大なる憂愁と中心の困迫とにより流す所の涙は是れ即ち天の餅によりてあたへらるゝ靈魂の食なりと。(緒語廿五)
 聖マカリイは享年九十、降生三百九十年に於て福樂の生命に逝けり。

聖マカリイの著書

マカリイが神的智慧の貴重なる遺編として我等に存せしは希臘語を以て書されたる講話五十篇なり。マカリイの講話の重なる目的は大要靈魂が神と親密なる合一を爲すは人の目的にして最上の幸福なりといふにあり。彼は信者の靈魂を此合一に招致す。彼は其講話に於て此の合一は人の創造の時に於る最初の目的なるをあらはし、人を神より遠ざけたる原罪の滅亡的結果を證し、併せてイエス Kristusによりて人と神の一致の回復せられたるを説明す。又此の合一にみらびくの途を示し、損傷せられたる人の天性と悪神の詭計とによりて人に反對する妨礙を示す。彼は此より生じ來れる内部の戦の困難をあらはして、我等が天性を聖にせん爲及び我等が意志を堅めんために神聖なる恩寵を必要とする感情を起さしむるなり。彼は神と合一する靈魂に作用する恩寵の奥密なる働を活寫す。彼は其講話を祈禱を以て中止することしばしばこれありき。彼は其講話に於て、ハリストスの光に照されざる智識の爲には隠れて見えざれど、恩寵をうけたる靈魂の爲には明亮にして且は高尚なる神的生命の奥義をあらはして、たゞ其の己の實驗を以て試み

たるものを言ふゆゑに事の深遠なると奥妙なるとに拘はらず、老練なる師の教訓は明白にして瞭解し易きなり。其の高尚なるが爲に理解し難きものは、マカリイによりて常に平易なる比喩と形容とを以て易く曉り得らるゝなり。

聖マカリイの講話の内容は其の太だ古きを示す。此講話の著者は第二十七講話第十五條によるに表信者等と同時に著者なることあきらかなり。然のみならず、彼は物質は始を有せずして神と同等の力なりといへる異端者等の説に注目するあり。かくの如き異端者は四世紀以前にもあり、又四世紀中にもこれありき。シリヤの克育者イサアスは聖マカリイに論及して大なる聰明を以て著述せし人なりといひ、彼の書より引用したる處を見るに現にマカリイの講話より取れるなり。第九世紀の始にママルツスキイは自著なる修道士の歴史といふ書中にエキペトマカリイの書より引用す。アンテオヒヤの總主教イオアン(第十一世紀)は「修道院の事」といふ自著中に一般の使用の爲に教會の嘉納する所となれる教會牧者及び在野神父等の救靈の事に關する著書を數へて、ラキトの苦行者聖マカリイの書をも其中に加へたり。且凡そ希臘の原本にしてアラビヤ及びシリヤの翻譯にかゝれるマカリイの講話は第九世紀或は第八世紀の抄本によれば埃及のマカリイに屬す。

五十篇の講話の外世に知られたるものは、埃及マカリイの苦行的説教七篇にして、其内容は講話と同様なり。

已に久しく世に知られたるマカリイの講話と説教の外マカリイの二の書翰も近頃フロツスによりて出版せられたり、一は希臘語にして、他はラテンの譯なり、後者は久しく抄本によりて世に知られたるものなり。ゲンナチイは「教會の作者の事」といふ書中に此事を記載す。彼いふ、埃及のマカリイはその教訓する所の修道士に書をつかはしていへり、人はたゞ己を認識し、あらゆる勞苦を甘んじて任ひ勇氣にして情慾と戦ひ、神の助を呼んで、元始の潔きに達するに進向する時は、眞の勳を成すことを得べしと。けだし此書翰はシリヤの聖イサアクにも知られしならん。彼は書していへり、「諸聖人は如何なる高き階段にあり、いくばく大なる誘惑にかゝるか。汝はもし欲するならば、マカリイの一書翰によりて知ることを得べし。此書翰は内容左の如し、即ち父マカリイは其の最愛する諸子に書して、神が或は誘惑を以て或は恩寵の代保を以て、如何に救済の道而建て給ふかを明かに教ふ、即ち神の睿智が諸聖人を畢生德行に習はし給ふは、罪に對する戦を以てするに外ならずして、これ彼等何れの時にも其眼を高く擧げて神に向はんがためなり、又不斷眼を神に向けて

神に對する聖なる愛に成長せんが爲なり。何となれば彼等は情慾と墜墮に至らんを畏るゝの畏れとに壓せられ、不斷神に趨り就きて、神に對する信と望と愛とに大に進歩するによる。」

教會の使用となれる若干の祈禱文も亦埃及の聖マカリイに屬す。眠に就く前に獻ぐる祈禱文の中彼の名を題するものは第一祝文「永遠の神、萬物の王」及び第四祝文「大恩を賜ふ常生の王、寛仁にして人を愛する主よ、我何を以て爾に獻げ何を以て爾に報いん」云々是なり。又朝の祈禱文の中彼の名を題するものは第一祝文「神よ我罪人を淨め給へ我未だ善を爾の前に爲さざればなり」云々第二祝文「救世主よ、我寤め興きて夜半の歌を爾に奉り」云々第三祝文「人を愛する主よ、我覺め起きて爾に趨り附き、」及び第四祝文「主よ、爾は多くの慈と廣き恵とを以て我爾の僕に」云々是なり。グレナヤの抄本に依れば守護天使に獻ぐる朝の第九祝文「聖なる天使、我が廢てられし靈に附き添ふ者よ」云々も亦埃及のマカリイに屬するなり。

二、預言者が大に驚きて見たる所のものは眞實にして疑なし然れども此現象はこれと異なるものを示し奥妙神聖にして諸族の爲に實に神祕なりしも後來ハリストスの来るによりて現出したる奥秘を前表せるなり預言者は靈魂が主をうけて主の光榮の寶座とせらるゝ奥秘を直觀せりけだし聖神が預備して己の坐位となし及び居住となしこれに其光を受くるを賜ふて言ひ盡されざる光榮の美を以て照されたる靈魂は全く光となり全く面となり全く目とならんされば彼には靈界の光の目を以て満たされざる一の部分もあらず即彼には何の暗所もあらずして全く残る所なく光とせられ神とせられ悉く目に満たされて何等の後方或は背面もあらずして何處にも面を以てあらはるゝなり何となれば光即ハリストスの光榮の得も言はれざる美は彼に降りてかれに坐し給ふによるたとへば彼は太陽の如くなるべし太陽は何處にも自己同一にして一の後部も或は缺たる部分もなく一様の部分より成りて残らずみな光を以て輝きて全く光ならん或はまた火の如く即火の光の如くなるべし彼は全く自己同一にして前後大小をおのれに有せざらんかくの如くハリストスの面より發する光榮の得も言はれざる美を以て全く照され聖神と全く親與するを爲して神の住所となり寶座となるを賜はりし靈魂も全く目となり全く光となり全く面となり全く榮となり全く神となることハハリストスの準備し齊整して靈界の美を以て飾りし如くなるべくしてハリストスに提携し誘導し且扶持してこれを高く舉げんゆゑに言へり人の手はヘルビムの下にありといエゼキヤ一の七。ハリストスは自から靈魂に戴かれて靈魂を誘導せん。

三、車を疾く奔らす四の生物は靈魂の全備たる想像力の状態をあらはせり鷹は禽鳥の王にして獅子は野獸の王たり牛は溫柔なる動物の王にして人は萬物の王たりかくの如く靈魂にもこれに王たる想像力のあるあり即自由と良心と才智と愛の力はなりこれらを以て靈車は駕御せられて神はこれらに安坐し給ふしかれども又他の説明方によればこれ即諸聖者の天にある教會を指すといふそれ彼處に預言者は生物に論及して其高さは非常なりといひ彼等は獨り目なりといひ彼等の目の數或は高さを會得するあたはずといふ何となればこれが爲の智識をあたへられさればなりたとへば天にある星は何人も見て驚嘆する所なれども其數を

算知するは一人も能するなけんかくの如く諸聖者の天にある教會に入り彼に於て樂むことは凡の苦行せんと欲する者等にわたへらるしかれども諸聖者の數を

知りてこれを會得することとは、これ獨り神に屬するなり、獨自なる生物の事にその實座に坐する者或は實座となり、目及び光となりたる各自の靈魂に坐する者は、これに坐して、靈體を御し、自ら知る如く、これを指導して、進行、疾馳せん、それ靈物の進行したるは、自ら行かん、と欲する處に進行したるに非ずして、これに坐して、これを指導する者の知り、且欲する處に進行せり、かくの如く、此處に於ても、主は自ら己の神を以て途を示して、御し、且導かん、かくの如く、なれば、靈魂は欲するあるや、己が意のままに自ら天に昇るに非ずして、神は靈魂を指導し、身體をすて、思を天に向はしむべく、又神が欲するときは、靈魂は再び肉體に思念の中を來往せん、然れども神の旨によれば、地の極に移るべくして、神はこれに天啓の奧義を示し、給はん、實に極妙至善、獨一眞實の執筆者なる哉、かくの如く、もし靈魂は今日預め、頓揚せられ、て神と親與するを得ば、身體も復活に於てその享くべき分を賜はらん。

四、しかれども、義人等の靈魂が天の光とせらるゝ、此事に關しては、主は自ら使徒等につけて、左の如くの給へり、曰く、「爾等は世の光なり」と、マテウイ五の十四、主は自ら彼等を光となして、彼等により、世の照されんことを命じて、いへり、曰く、「人燈を燃して、これを斗の下に置かず、乃燈臺の上に懸、然らば、凡そ家にある者に照る、是の

如く、爾等の光は人々の前に照るべし」と、同上十五、十六、これ即我よりうけたる賜を隠さずして、凡の願ふ者に傳へよとなり、またいへり、「身の燈は目なり、故にもし爾の目淨からば、爾の全身明ならん、もし爾の目悪からば、爾の全身暗からん、故にもし爾の中の光は暗たらば、則暗は如何にぞや」と、マテウイ六の二十二、二十三、これ目は身の爲に光なり、故に目若し健なるときは、全身照されん、されど物あり、目に落ちて、目がくらまざるゝときは、全身暗黒にあらん、かくの如く、使徒等は全世界の爲に立て、目とせられ、又光とせられたり、これにより、主は彼等に誠命して、いへり、「もし汝等世の爲に光となり、堅く立ちて、迷はされずば、世の全體照されん、しかれども、もし汝等、即世の光なる者、暗くなるときは、暗即世は、いかにぞや」と、ゆゑに使徒等は、光となりて、信せし者の爲に、光を以て勤め、自ら照されたる神の天上の光を以て、彼等の心を照したりき。

五、しかれども、彼等が鹽となりしや、凡そ信する者の靈魂を溶解して、聖神の鹽を以てこれに鹽せり、けだし、主は人々の靈魂を地と名づけ、使徒等に告げて、「汝等は地の鹽なり」といへり、マテウイ五の十三、何となれば、使徒等は神の天上の鹽を以て、人々の靈魂を溶解して、腐敗せざるものとなし、大なる惡臭に感染せざるものとなし

て、彼等に勤められたればなり。肉は鹽なくんば腐敗し大なる惡臭にみちみたされて堪へべからざる臭氣の故に人皆これを選げん。されば蛆は腐敗したる肉に蚊行きて、かして自ら食を求め、彼を食ふて、彼に巢を作らん。しかれどももし鹽を撒るならば、肉に培養せられたる蛆は滅されて盡き、厭ふべき惡臭は消えん。けだし鹽は蛆を滅し、惡臭を絶つに適當なればなり。かくの如く聖神にて鹽せられず、天鹽、即神の能力をうけざるすべての靈魂も腐敗して、惡念の大なる惡臭にみちみてる。故に神の顔は如此の靈魂に居る暗と慾との無益なる思の恐るべき臭穢を避けん。惡なるべき蛆、即惡神と暗黒の力とは彼に益なき養はれて、巢をつくり、彼處に匍匐し、彼を食ふて敗壞せしむるなり。けだしいふあり「我が腐腐れて且臭し」(聖詠三十七の六)。しかれどももし靈魂は神に趨り就き、篤く信じて生命の鹽たる善にして人を愛する神をおのれに願ひ得るや、降る所の天鹽は靈魂に於て恐るべき蛆を盡し、有害なる惡臭を滅し、其能力の作用を以て靈魂を清めん。さてかくの如く眞實なる鹽が靈魂を健全無疵なるものとなすときは、彼は再び舉用せられて、天の主宰につかふるを得ん。ゆゑに律法にも此義を示して、神はすべての犠牲に鹽するを命じたまへり

〔利未記二の十三〕

六、ゆゑに先づ第一に司祭が性を屠りて性の死すること、其後性の精に割きて鹽漬にせらるること、終に火上に置かること、は共に肝要なり。けだし司祭が先づ羊を屠りて死に付せずんば、彼は鹽を施されずして、豊祭に於て主宰に供へられざるべし。かくの如く我等が靈魂も眞實の司祭長たるハリストスに就き、彼により屠られて、其偽智の爲又は其生活する惡生命の爲、即罪の爲に死せざるべからざるなり。而して犠牲の生命を棄つる如く、情慾の惡も生命を棄てんことを要す。靈魂が身體より出づるときは、身體は死して、其生活する生命を以て生存せず。聽かず、又行かざらん。かくの如く天の司祭長たるハリストスが其能力の恩寵を以て世の爲の生命を靈魂に於て屠殺するときは、靈魂は其生活する惡生命の爲に死して、最早聽かざるべく、言はざるべく、罪の暗黒に生活せざるべし。何となれば生命ともいふべき情慾の惡は恩寵によりて靈魂より出で去ればなり。ゆゑに使徒は呼んでいへり「世は我の爲に釘せられたり、我世に於ても亦然り」(ガラタイヤ六の十四)。けだし靈魂は世と罪の暗黒に生活して、ハリストスを以て殺されず、惡習の靈魂を猶己に有し、即ち罪なる情慾の暗黒の働を己に有して、これを以て養はるゝ間は、ハリストスの體に屬せず。光の體に屬せずして、暗の體なり。されば今も猶暗の一方に居らん。これ

に反して光の靈魂即聖神の能力を己に有するものは光の一方に居るなり。
 七、さりながら人あり言はん、靈魂は暗の産するものに非るに何故これを暗の體と名づくるかと、此事につきては慎重の注意をなして正しく理會すべし。たとへば汝が用ひて身に被むる衣服の如し、彼は他人これを備へて汝これを衣ん、家もこれに同じ別人が造營建築して汝これに住まん、かくの如くアダムも神の誠命を犯して惡なる蛇にしたがひ己を賣りて魔鬼の所有物となせり、ゆゑに靈魂即神が己の像に依りて備へたる此の美なる造物を惡者は衣たり、ゆゑに使徒もいへり「首領權柄に脱衣せしめて」十字架を以て彼等に勝てりと「コロサイ」の十五、けだし主の來りしは彼等を逐ふて己の家たり又殿たる人を己に取戻さんがためなり。これによりて靈魂は罪なる暗黒の彼に居る間は、惡なる暗黒の體と名づけらる。何となれば罪なる身と死の體との事を書して「罪なる身の滅されん爲なり」といひ「ロマ六の六」又「誰か我を此の死の體より救はん」といへり「ロマ七の二十四」これと相反して神を篤く信じて罪より救はれ、暗黒なる生命の爲に死して聖神の光を己にうけて、生命となし、これを以て更生したる靈魂は、同じく亦最早かしてに於て其生命を送らん、

何となれば神性の光を以て彼處に止めらるればなり。けだし靈魂は神の本性より生ぜしにあらす、又惡なる暗の本性より生ぜしにも非ず、かへつて美麗をみちみてる大にして且奇異なる智慧ある造物にして、神の至美なる育たり、又像たるも犯罪の結果によりて暗黒なる情慾の惡は彼に入りぬ。

八、終りに靈魂は亦その願により體合一致する所の者に屬すべし。故に彼は或は神の光を己に有して、其中に生活し、諸の德行を以て飾られて、安息の光をうくべく、或は罪の暗黒を己に有して、定罪に服せん、けだし神と共に永遠の安息と光とに生活せんを願ふ靈魂は、前文に述べたる如く、眞實なる司祭長、ハリストスに就きて世の爲及び惡なる暗黒の以前の生活の爲に居るをうけ死して、神聖なる養育の爲に他の生活に移らんこと肝要なり。たとへばもし誰か市に死せば、彼處に居る者等の聲も談話も鬧噪もさかざるべくして、死するや否や其市の聲音も叫喚もあらざる處に移されん、かくの如く靈魂ももし住んで年月を送れる有害なる情慾の市に居る處うけて死するや、最早暗黒の談話の聲は聞くあらざるべく、暗黒の鬼の空しさ、談論及び擾亂の語聲と叫喚とは最早鳴渡らざるべく、仁慈と平安とをみちみてる市と、神聖なる光の市に移され、かしてに生活して、聞くべく、かしての市民となりて談論

説話すべく、かしてに於て神に適當なる神の行を成さん。
 九、ゆゑに我等も神の力を以て暗黒の惡世の爲に居をうけて死せんが爲また罪の神の我等に根絶せられんが爲靈魂は天の神を己にうけて、彼を衣罪の暗よりハリストスの光に移りて、世々生命に安息せんが爲に祈禱せん。たとへば競争場裡に車の疾馳するが如し、乗越したる者は他を牽制して、其前進を攪し且妨げて勝を占めん、かくの如く人にも眞實の思と罪の思の疾馳するあらんにもし罪の思に先んせらるゝあらば、彼は靈魂を牽制し神に近づきて罪に勝を奏するを攪し且妨げん。しかれども主の自ら乗りて靈魂を御する處に於ては主は巧みに且堅固に轡を御し、盤輪をみちびきて、天に屬する神聖なる思の狀態に向はしめつゝ、常に勝を奏するなり。彼は罪と戦ふをなさず、全能全權なる者として常に自ら勝を決するなり、ゆゑにヘルビムの馳するは、自ら行かんとして欲する處に馳するに非ずして、彼等に乗りて彼等を御する者がみちびく所の方面に向つて馳す、彼が欲する處には彼等も進行して、彼は自ら彼等を奔馳せしむるなり、けだし言ふあり、人の手は彼等の下にありと、聖なる諸靈はこれを御するハリストスの神にみちびかれて、彼が欲する方に馳せん。ゆゑに彼が欲するときは、天上の思に馳するも、又欲するときは、體にも馳せ

ん。彼の欲する處に於て彼につかへんとす。それ鳥は羽翼を以て足と爲す、かくの如く天に屬する神の光も靈魂の適當なる思の羽翼をうけて、これを其知る處にみちびき且御せんとす。

十、故に此事をさかば、汝の靈魂が實際にこれを得有したるや否や、自ら己に注意すべし。けだしこれ單に口にいふ言にはあらずして、眞に靈中におこなはるゝ事實なればなり。ゆゑにもし汝はかくの如き靈界の幸福を受けずして、猶貧しくば、不斷に憂ひ悲み且傷むべし。天國の爲に猶死せるもの、又傷はれたるものとして、常に主を呼び、信仰を以て願ふべし。汝にも此の眞生活を賜はらんためなり。神は此身體を造りて、これが爲に生活と飲と食と衣と履とを其本性より借らしめず、却て身體は固より裸體につくりて、生命の爲に缺くべからざるすべてのものを外より借らんことを定めたまへり。されば身體の外に存するものなくんば、即食なく、飲なく、衣服なくんば、身體は生活するあたはざるべし。もし身體は外より何も借るあらず、其性中にあるものを以て限らるゝならば、敗壞して亡びん。されば神の像により造られて、神の光をおのれに有たざる靈魂もかくの如く、攝理して恵を垂れ給へり。靈魂の眞生活を成すとしめんが爲に、神はかくの如く攝理して恵を垂れ給へり。靈魂の眞生活を成すこと

ろの靈界の食と、靈界の飲と、天の衣服とを自己の本性より取らずして、神の性より、神自己の神より、神自己の光よりうけん。

十一、それ身體は生活を身體其物よりうけずして、身體の外にあるものよりうく、即地よりうくべくして、身體の外に存するものなくんば、生存するあたはざらんこととは、前文にいひし如し、かくの如くも、靈魂も今日猶彼の生命ある者の地に更生せず、彼處に神的にやしなはれず、主の前に大に進歩し、神的に成長せずして、神性は亦これに天の美麗の言盡されざる衣服を衣することあらずんば、靈魂は此の食物なしに自ら生存して樂み且安んずるあたはざるなり。けだし神の性は生命の餅をも有す、いはゆる「我は生命の餅なり」イオアン六の三十五といふものは是なり、又「活ける水」イオアン四の十と「人の心を樂ましむる酒」聖詠百三十七と「歡の膏」聖詠四十の八と、天の神の種々様々なる食物と、光を發する天の衣服の神を以て賜はるものとを有するなり、靈魂の天の生活はこれに存す、身體は己の天性に阻止せらるゝならば、禍なり、何となれば敗壞して死すればなり、靈魂も神聖なる神と親與するあらずして、たゞ己の天性に阻止せられ、たゞ己の行に依頼するならば、禍なり、何となれば神聖なる永遠の生命をうけずして、死すればなり、それ病者の身體は最早食を

うくるあたはざるときは、凡て彼と親しき朋友親戚及び病者の爲に愛せらるゝ者は、彼に望を絶ちて、彼の爲に涕泣せん、かくの如く神と聖なる天使等も神の天食を嘗めずして、不朽に生活せざるべき靈魂を認めて、涕泣に値するものと爲すなり、我再び言はん、これ單に口にいふ言にわらずして、神的な生活の事實なり、適當信誠なる靈魂の中におこなはるゝ眞事實なり。

十二、さればもし汝は神の寶座となりて、天の御者が汝に乗り、汝の靈魂は全く神的の目となり、全く光とならば、もし汝は彼の神的の食を以て飽かしめられ、活水を飲ませらるゝならば、もし得もいはれざる光の衣服を衣するならば、もし汝の内部の人は此のすべてを實驗上疑なく試みるならば、視よ、汝は實に永遠の生命を以て活きて、汝の靈魂は今も主と共に安息せん、視よ、汝は眞實の生命を以て活きんが爲に、實にこれを求めて、主より受けたるなり、しかれども、しかくの如きを、一も己に認識せずんば、泣くべく、憂ふべく、嘆息すべし、何となれば、今に至るまで、汝は永遠なる靈界の富を未だ求め得ず、今に至る迄、眞實の生命を未だ受けざればなり、是故に日夜主に祈りて、己の極貧の爲に傷み悲しむべし、何となれば、恐るべき罪の極貧に居ればなり、さればもし誰か己の極貧の爲に憂ふる此憂愁と雖も得るあらば、幸なり

もし我等は飽食せる者の如く、怠慢に時を送らずんば、幸なり愛ひて尋ね退かずして主に願ふ者は救と天の富とを速に受けんこと不義なる裁判官と寡婦との喩を結びて主のいひ給ひし如くなるべし、曰く神は「日夜彼に顧ぶ者に援け給はん我汝等に語ぐ速に彼等を援けん」ルカ十八の七八、彼に光榮と權柄は世々にアミン。

第二 講話

暗國即罪の國の事、及び神は獨り我等より罪を除きて、我等を惡王の奴隸たるより救ひ得る事。

一、惡王——暗國は最初に人を捕へ、暗の權を以て靈魂に衣せしこと、人に衣せる如くなりき、これ人を王となして、すべて王たる衣服を彼にあたへんが爲にして頭より足に至る迄人は王に屬するものを悉く身に着用せんが爲なり。かくの如く惡王は靈魂の實體にすべて罪を衣せて、すべてこれを汚し、すべてを己の國に捕へ、其の一肢も思慮も才智も身體も其權より自由なるものとして存せしめず、これに暗の衣服をかうむらしめたり。たとへば身體に於て苦しむは其の一部分に非ず、又は其

の一肢體にも非ずして、全體すべて苦みにかゝる如く、靈魂も惡習と罪の病の爲にすべて苦しめり。惡者は人の此の緊要の部分と此の緊要の肢體たる靈魂にすべて其惡を着せたり、即罪を着せたり、さればかくの如くして、身體も苦をうけて敗壞するものとなれり。

二、使徒はいへり「舊き人を脱ぐべし」コロサイ三の九と、かく言ふ時は是れ完全の人を想像して、其目は目に相應し、其頭は頭に相應し、其耳は耳に、其手は手に相應して、其足は足に相應する者を示すなり。けだし惡者は靈魂も身體も全人を汚してこれを己に引誘し、人に衣するに汚穢不潔にして神に敵し、神の法に順はざる舊き人を以てする、即罪を以てするは、これ人の欲する如く見ずして、惡しく見、惡しく聞き、其足は惡行に急ぎ、手は不法を作し、心は惡事を思はしめんがためなり。故に我等は舊き人を己より脱がんことを神に祈らん、何となれば獨り神は我等より罪を除くを得ればなり。われらを捕へて其國に拘留する者は我等より強し、されど神は我等を此の奴隸たるより救はんとの約束をあたへたまへり。たとへば太陽が光り輝きて微風吹き渡らん、太陽にも其體と其性とあり、風にも其性と其體とあれども、し獨一の神が風を止めて復た吹かざらしめずんば、誰も風を太陽より分離して區

別することあたはざるべし。かくの如く罪も靈魂と混せりしかれども罪にも靈魂にも各々其の特別の性あるなり。

三、ゆゑにもし神は靈魂にも又身體にも居る所の此の惡なる風を熄ましめず、且これを止めずんば靈魂を罪より分離して區別することあたはざるべし。又たとへば人あり、飛ぶ鳥を見て自ら飛ばんと欲すれども、羽翼を有たずして飛ぶあたはざるべし、かくの如く人にも潔き者となり、非難すべからざる者となり、汚れざる者となり、惡習を己に有せず常に神と共に居らんと欲するの望ありしかれども人に其力はあらざるなり。人は神聖なる空氣に、聖神の自由に高く飛ばんを願ふしかれども羽翼をうけざらん間は、あたはざるべし。ゆゑに聖神の鳩の翼を我等に與へ給はんことを神に祈らん、我等神に飛び去りて安きを得んがためなり、(聖詠五十四の七) 且惡なる風即靈魂と身體の諸部に居る所の罪を我が靈魂と身體とより離してこれを我等に斷絶せんが爲なり。けだし神は獨り此をなすことを得べし。言ふあり「視よや世の罪を負ふ神の羔羊イオアン一の廿九。彼は獨り彼を信する人々に此憐みを施して、彼等を罪より救ひ給へり、此の言ひ盡されざる救を常に待ち且望みて不斷にこれを探ぬる者に彼はこれを遂げしむるなり。

四、たとへば暗黒なる深夜に烈風吹き荒みて、あらゆる植物と種子とを動亂震撼せしむることあらん、かくの如く人も暗黒の夜なる魔鬼の權に落ち、夜間暗中に在りて、恐るべく吹き荒める罪の風に動搖震撼せられん、されば人のすべての性は靈魂も思慮も才智も擾亂の中にありて、身體のあらゆる部分は震撼せん。靈魂と身體の一部一肢も自由を得るあらずして、我等に居る罪の爲に苦まざること能はざるべし。これと同じく光の日と聖神の神聖なる風のあるありて、彼は神聖なる光の日中に居る靈魂を吹き、これを快活ならしめて、靈魂の全體に透徹し、諸の思念と、凡ての實質と、身體の諸部を涼らし、神聖なる得もいはれざる安息を以て安んせしめん。使徒はこれをあらはして、次の如くいへり、曰く「夜の子、暗の子にあらずして汝等は光の子、晝の子なり」(コリント五の七) さればかしこに於ては誘惑の中にありて、舊き人は完全なる人を己より脱して、暗國の衣を脱し、即誹謗不信無忌憚虚誇驕傲貪利肉慾の衣を脱すべく、同じく亦他の暗國の衣なる不潔汚穢なる弊衣を脱せん、かくの如く此處に於ては地に屬する舊き人を己より脱し、イイヌスが暗國の衣を脱せしめたる彼等は再び新しき天に屬するの人なるイイヌスが暗國の衣を脱して、彼等は亦再び目に相應して其目を有し、耳に相應して其耳を有し、頭に相

應じて其頭を有し、全人潔きものとなりて、天の狀を己に被ひるを致さん。

五、ゆゑに主が彼等に著せるに得もいはれざる光國の衣を以てし、信望愛喜悦平安憐憫仁慈の衣を以てし、同じく亦凡そ其他の神聖にして快活なる光と生命と得もいはれざる安息の衣とを以てするは、これ神は愛たり喜たり和平たり仁慈たり、憐憫たる如く、新しき人も恩寵によりてかくの如き者とならんが爲なり。それ暗國と罪とは復活の日に至る迄は靈魂にかくるゝありて、罪人の身體も今日靈魂に隠るゝ所の暗にて蔽はれん、かくの如く光の國と天の狀即ちイエス・ハリストスも今は奥密に諸聖人の靈魂を照して靈魂に主たらんしかれども、こは人々の目には秘密に見えざるものとして存し、復活の日に至る迄はたい一の心靈の目を以てのみハリストスは實に見らるべくして、身體も今猶人の靈魂に居る所の主の光を以ておほはれ、且頌揚せられん、これ彼の時は身體も今日猶ハリストスの國を己に受け、これに安んじて永遠の光を以て照さるゝ所の靈魂と共に王たらんがためなり。光榮は彼の洪恩と仁心とに歸す。彼は其諸僕をわはれみ、これを照らして、これを暗國より救ひ、これに其光と其國とをあたへ給はん。彼に光榮と權柄は世々に歸す。 Amen.

第三 講話

兄弟は正直と愛と和平とにより、互に誠實を以て生存して、内部の思念と戦ふべし。

一、兄弟は互に大なる愛を守らんことを要す。彼等は祈禱せんか、或は聖書を讀まんか、或は何の工作にか従事せんも、互に愛を基となすべし、かくの如くならば、彼等が自由なる任意は神の恵みをうくるを得ん。それ或者は祈禱し、或者は讀み、或者は工作せんに、互に實意と正直とに居るあらば、彼等は皆此を爲して益あらん。けだし如何にしるされしかを見よ。汝の旨は天におこなはるゝ如く、地にも行はれん。二、一ツエ、六の十、天使等は天に於て平和と愛とにより生存して、たがひに大なる一致に居り、かしこには高慢或は猜忌のあるあらずして、互の愛と誠實とのみなる如く、兄弟等も互にかくの如くにして居らんことを要するなり。それ三十人にして一事を爲したらんには、彼等終日終夜此を爲しつゝ、くることあたはざるべし。却て彼等の中或者は祈禱に六時間を送り、好んで讀むべく、或者は熱心に役事すべく、又他の者

は何の工作にか従事すべし。

二、故に兄弟よし何か爲す所あらば互の愛と喜びとに居らんこと肝要なり。工作する者は祈禱する者を左の如くいふべし「わが兄弟の願する實は共同のものなりゆゑに我もこれを願す」と。また祈禱する者は讀經する者を次の如くいふべし「彼が讀經に於て益する者は我が爲にも益にならん」と。また工作する者は更に左の如くいふべし「わが盡す勤勞には共同の益あり」と。たとへば身の肢は多けれど彼等一體を成して互に相助け肢々おの／＼自己の職分を盡すが如し然のみならず目は全身の爲に監視すべく手もすべての肢體の爲に働くべく足も身體の諸部を自ら載せて行くべくして他の肢は又外の肢と艱苦を共にせん兄弟も互に如此なるべし。されば祈禱する者は工作する者を非難して彼は祈禱せずといふこと無るべし。工作する者も祈禱する者を非難して「彼は祈禱をついぐれど我は工作す」といふことなかるべし。又役事する者も他を非難せざるべし。反ておの／＼何をなすとも神の榮のため爲すべし。讀經する者は祈禱する者を愛と喜びとを以て視て左の如く思ふべし「彼は我が爲にも祈禱す」と。しかして祈禱する者は工作する者を次の如く思ふべし「彼が爲す所の事は共同の益の爲になす」と。

三、かくの如くなれば大なる一致と平和と同心とは衆人に平和の同盟を互に保たしむるを得べし。されば神の恩恵をおのれに誘引して互に實意と正直とに居るを得ん。されどもすべての中に於て最重要なるは時に隨ひて祈禱を務むるにあること明なり。しかのみならず求むる所の目的は唯一なるべし。即實と生命とを靈魂に有する。即主を心に有すること是なり。誰か工作せんか。或は祈禱せんか。或は讀經せんか。彼の暫時に移らざる所得を有すべし。即聖神を有すべし。或人いへり。主は人々より一の顯然なる結果を促すのみにして隱然なるものは神自らこれを成し給ふと。しかれども實際はかくの如くならず。これと相反して誰か外部の人に依り己を防守する程はいよ／＼思念と角逐して奮闘せんことを要す。何となれば主は汝の自ら己を怒り己の智と戦を作し。惡なる思念に同意せずしてこれを以て樂まざらんことを汝より要求すればなり。

四、さりながら罪と我等に居る所の惡を根絶せんことはこれたゞ神の力を以てのみ成就せらるべし。けだし自己の力を以て罪を根絶せんことは人にあたへられず。且は能はざればなり。罪とたゞかひ抵抗して傷を負はせ或はこれを受くるはこれ汝の力にあり。しかれども根絶するは神に屬す。もし汝は自らこれを爲すを能く

せば、何の要ありて主は來り給はんや。たとへば目は光なくして視る。わたしはざらん。或は舌なくして言ひ、或は耳なくして聞き、或は足なくして行き、或は手なくして工作すること。はわたしはざらん、かくの如く、イエススなくんば救はるゝことも、天國に入ることも、わたしはざるなり。されども、汝は左の如く言ふならば、「見らるゝ、如く我は放蕩者に非ず、姦淫者に非ず、貪利者に非ず、ゆゑに義人なり」といふならば、これ汝は最早一切を成全せりと思ふて誘はるゝなり。人の自ら防禦すべき罪の部分ばかり来るか。汝はこれらと竊に思念の中に於て角逐奮闘せざるべからざるに非ずや。汝の家に賊あらば、彼はやがて汝を打倒さん。然らば、汝をして安然ならしめざるのみならず、汝自ら彼を突撃して、かれに傷を被ひらしめ、或は傷を受けん、かくの如く、靈魂も抵抗敵對防禦せざるべからざるなり。

五、汝の自由なる任意は敵抗して、勞苦と憂愁とに居りつゝ、終に勝つを始めん。任意は倒れて又起き、罪は新にかれを貶せん。十次二十次戦に勝ち、靈魂を貶せん。しかれども、靈魂も亦漸々或一事に於て罪に勝たん。ゆゑにもし、靈魂が堅く立ちて何事に於ても弱らざらんときは、優勢を取り、決戦して、罪に勝つを始めん。しかれども

もし此の時に注意して己を省みるならば、「成全の人となり成長の量に達して」「エフェソ四の十三充分死に克つに至る迄は、罪は猶全く人に勝たん。けだし録して言ふあり、「最後に滅さるゝ敵は死なり」「コリンフ前五の廿六かくて人々は罪を負かして、其勝利者とならん。しかれども前文にいひし如く、もし誰か「我は放蕩者に非ず、姦淫者に非ず、貪利者に非ず、我が爲にこれを以て足れり」と言ふ者あらば、これ斯の如き場合に於て、彼は三の部分と戦へども、他の二十と戦はず。即罪が同じく靈魂と戦はんとする二十とはたゞかはすして、反つて彼等に勝たるゝなり。ゆゑにすべてに於て戦ひ、且格闘せんことを要す。何となれば我等がしばしば言ひし如く、智は角力者にして、罪と競争し、思ひに抵抗せんが爲に同等の力を有すればなり。

六、されどももし、反對の力は更に強うして、悪習は人に全く王たりといふならば、これサタナに従ひしが爲に人間を罰する神を罪して、不當となすなり。サタナの有力にして、或る強制の力を以て、已に従はしむるときは、汝の意にサタナは靈魂より更に上にして、更に有力なりとなさん。しかれども終に我が言をさくべし。たとへば青年と童子と戦ふて、童子が負かされんに、其負けたるが爲に童子を非難するならば、これ大なる不當ならん。ゆゑに余は斷定す、智は角力者にして、かつ同等の力ある

角力者なりとゆゑに彼と戦ふ所の靈魂は救援と防禦とを求め、これを得て救を受
けん、けだし戦と苦行とは同等の力あるによりて爲し得らるればなり、我等父と子
と聖神を世々に讃揚す。アミン。

第四 講話

「ハリステアニン」たる者は神と天使等より、天の頌讃を
うけんとせば、謹慎と勤勉とを以て此世を進行せざる
べからず。

一、「ハリステアニン」の生活を大に着實にみちびきて、完全に至らしめんと欲する
者は、先づ靈魂の常識の爲め、及び理性の爲に極力慮らざるべからず、これ我等善と
惡とを正確に區別する才能を求め得て、純潔なる本性にこれと相應せざる者の入
來る所以を、竟に辨識し、正しく且錯らさずして生活せんが爲なり、また理性を益用す
ること目の如くして、惡習の暗示と親まず、これと同意せずして、これにより神靈な
る賜をうけて主に適應するものとならんが爲なり、されど我等は見ゆるものより

例證を取らん、何となれば身體と靈魂と、身體に屬する者と靈魂に屬する者と、見ゆ
る者と隠れて見えざる者との間に類似の點あればなり。

二、身は目を以て嚮導者となす、されば目は見て、全身を緊要なる途にみちびかん。
然るに人あり、樹木叢蒼として、荆棘叢生し、泥濘深うして、かしこに火の途を塞ぎて
劍の刺込まれたるあれば、こゝには懸崖と水の満々たるある其場所を行くと想ふ
べし。もし旅客にして機智あり、注意深くして、恐れざる者たらんときは、目を嚮導者
となし、大なる注意を以て此の困難なる場所を通過し、手を以ても足を以てもその
裏衣を百方保ち全うし、樹間又は荆棘の中において破られず、泥に汚されず、劍に刺
されざるを致さん、且目は全身の爲に光となりて、これに途を示し、これをして懸崖
に打碎かれ、或は水に溺るゝをまぬかれしめ、或はいかなる困難の場所にも害をう
くるを免れしめん。かくの如く機智ある敏捷なる旅客は、目の指示にしたがひて直
行し、全く用心して其裏衣を掲ぐ、されば自己も傷はれずして守られ、衣る所の裏衣
も焼かれず、壞られずして守られん。されど怠惰等閑不注意、緩慢不精なる旅人が同
所を通過するならば、百方力めて衣を掲げんと、の堅き決心の足らざるにより、其裏
衣はこゝかしこに翻りて、小枝や荆棘の爲に破られ、或は火に焼かれ、或は刺込まれ

たる劔に截割かれ或は泥に汚されん一言にてこれを言へば美にして新らしき裏衣は己が不注意と不精と緩慢との爲に暫時にして壞られん且や旅客は目の指示に充分當然なる注意を爲すあらずんば自身も溝に陥り或は水に溺れん

三、靈魂もこれと同様なり彼は身體の衣を己に着ること美なる裏衣を着る如くしすべて靈魂と身體とに方向を示すべき理性をおのれに有しつゝ樹木森々として荆棘叢生せる生命の逕路を辿り泥と火と懸崖との間を經行するときは清醒と勇氣と勤勉と注意とを以て到る處に己を保ち且守らんことを要するなりしかれども身の裏衣をして此世の樹木森々として荆棘叢生せる途に於て何の處にか憂愁と繁忙と世の醜散との爲に破られ又は忿火の爲に燒かるゝを免れしめんとせばこれを衣る靈魂は目を背けてあしきを視ざるべく耳を背けて風評を聴かざるべく舌を無益なる談話より手と足とをあしき業事より止むべし何となれば靈魂には身の諸肢を背けてあしき觀玩と悪しくして愧づべきものをさくと不適當なる言説と世の惡事とに入らざらしむべき自由を與へられたればなり

四、靈魂は自らも其思を此世に轉廻せざらしめんが爲に心を防ぎ守りて惡なる轉廻より遠ざかるべしさてかくの如く苦闘して全く勉勵し如何なる場合にも大

なる注意を以て身の諸肢を惡よりとめて最美はしき身の裏衣を破られず燒かれず汚されずして守るべししかれども彼は自らも智を好むと思慮と意志の分別とにより力に應じて己を操持し世のもろくの欲望より遠ざかる程は殊に主の力を以て保護せらるべくしてこれが爲に前文にわざと惡より己を眞實に護るが爲に主より助をうけんけだし主は人が勇氣にして浮世の快樂より物質上の醜散及び心配より此世の械繫より及び無益なる思の轉廻より遠ざかるを見るときはかくの如き者に其恩寵の助を與へて惡なる現世を殊勝に進行する此靈魂を錯まらずして守らしめんそれ此の如くならば靈魂は世の悉くの欲望より遠ざかりて自己をも身の裏衣をも出來る丈殊勝に保護し神の助を得つゝ此の娑婆に於るの進行を殊勝に遂成したるが爲に神よりも天使等よりも天の頌讚を賜はらん五、しかれどももし誰か不精と不注意とによりて不謹慎に此生涯を送り自己の自由にしたがひて世のもろくの欲望より遠ざからず悉くの願望を以て獨一の主を尋ねずんば其身の裏衣は此世の荆棘と樹木とに破られ欲望の火に燒かれ逸樂の泥を以て汚されんゆゑに靈魂は審判の日に勇氣を有たざる者としてあらはれん何となればその衣物を汚されず守るあたはずして此世の誘惑の間にこれ

を敗壞せしめられたればなり。これが爲に彼は天國より翻けられん。けだし自己の自由にしたがひて己を世に委し、世の快樂に惑はされ、或は物體的快樂の中を轉々して迷ふ所の者に神は何をか爲し給ふべき。物質上の快樂と舊染の習慣とより遠ざかり力を盡して思を主に常に向はしめ自ら己を棄て、獨一の主をたづぬる者に神は其助をあたへ給はん。此世の狭谷に於ていつれの場合にも羅網を用心し、恐懼戰慄を以て己の救を成し、「ライオン」二の十二悉くの注意を以て此世の羅網と色慾とを廻避し、主の助を尋ね、主の憐みにより、恩寵を以て救はれんを希望する者を神は守り給はん。

六、 視よ智なる五人の童女は自ら徹醒し、自己の天性の爲に非常なるものに急ぎて、其心の器に膏を取れり。即上よりあたへらるゝ神の恩寵を取りて、新郎と共に天の室に入るを得たり。しかるに自己の天性と共に止まりたる他の愚なる童女は徹醒せず、猶肉體に居る間に「救の膏」聖詠四十四の八を己の器に取るに盡力せず、却て怠慢不精不注意無知により、或は己の義に自負するにより、さながら睡眠に耽りたるがごとくなりしゆゑにこれが爲に天國の室に入るをゆるされず、天の新郎を喜ばすことあたはざりき。彼等は世の械聚と地上の或る愛とに支へられ、其のすべて

の愛と服従とを天の新郎にさへげずして、己れに膏を携へざりき。然れども天性の爲に非常なるもの、即神の聖賜を尋ねたる靈魂はそのすべての愛を以て主に結び付けられ、主と共に行き、すべてより離れ遠ざかりて、祈禱と思とを主に向はしむゆゑにこれが爲に彼等は天の恩寵の膏をうくるを賜はりぬ。されば此後彼等はすべてに於て神的新郎を全く喜ばしめ、錯まらずして其進行を續くるを得ん。しかるに己が天性に止まりたる靈魂は思を以て地に跛行し、地の爲に慮りて、其智は地に住所を有す。彼等は自ら己を新郎に屬すと思ひ、肉に屬する稱義を以て飾らる。しかれども歡の膏をうけずして、上より神を以て更生せざりき。

七、 聰明なる靈魂の五感はもし上より恩寵と神の聖賜とを己に受くるならば、實に上より恩寵の智慧を己にうけたる智なる童女とならん。しかれどももし彼等はたゞ一の天性と共に止まるならば、愚者となり、世の諸子としてあらはれん。何となればかれらは或る推考により、又皮想により、自ら己を以て新郎の新婦たる如く思ふといへども、世の精神を脱せざればなり。主に全く附きたる靈魂は思を以て彼に居り、彼に祈禱をさへげ、彼と共に行き、主の愛を懇願せん。かくの如くこれと相反して世の爲の愛に耽り、其住所を地に有せんと欲する靈魂は、かしこに行き思を以

てかしてに止まり其智はかしこに居らん。故に其靈魂は神の善なる智慧に變化せざることを我が天性の爲に或る非常なるものに變化せざるが如くなるべし。天性の爲に非常なるものとは是即われら主と共に天國の室に入りて永遠の救を捉ふるを得んが爲に我等の組織に入りて天性と合一するに缺くべからざる天の恩寵をいふなり。

八、初人の悖逆の結果によりて我等は天性の爲に奇怪なるものを己にうけたり。即有害なる諸怨を受けたり。然るに習慣により、長久の間を以てこれを我が有となしたるにより、變じて己の爲に天性の如くなれり。されば再び我等が天性の爲に非常なるものを以て、即神の天上の賜を以て、此奇怪なるものを我等より逐ふて、我等を原始の潔淨に復興せしめんこと肝要なり。ゆゑにもし今日大なる祈願と請求とを以て、信と祈禱とを以て、世に遠ざかるにより、彼の天に屬する神の愛をうけず、また惡習に汚されたる我等が天性は愛に、即主に附かずして、彼の神の愛を以て聖にせられず、主の誠命にしたがひ、全く着實に生活して、終に至る迄錯まらざるものとなりて存せずんば、天國を捉ふるあたはざるなり。

九、余は己の力に應じ精微にして意味深長なる或る言を述べんと欲す。ゆゑに聴

明を以て聴くべし。無限にして近づくべからず且は造られざる神は其無限にして測るべからざる仁慈により、己を肉身となし給へり。いはい近づくべからざる己の榮光を自ら抑損せし如くなるは、これ其の見ゆる造物即もろくの聖なる靈魂及び天使等と合致するを得て、彼等も神性の生命に與かるものとなるを得んためなり。さりながら悉くの造物は天使も靈魂も魔鬼も其の己の天性によれば即體なり。

是れ絶對的に理會せずして、相對的に解すべし。イオアンダマヌキン(二書三章正教の精確なる説明を見よ)「天使は無形體なる實在なり。然れども我等と比して天使は無形體非物質なるものと名づけらる。けだし獨一無比なる神に比するときは、萬物は粗大物質的なるものと認めらるゝなり。たい

一の神性は嚴正の意味に於て非物質なり。且は無形體なり。何となればたとへ彼等は幾微なるものと雖其本體に於ては、其特質によるも、又其状態によるも、其天性の幾微なるに應じて幾微なる體なり。然りとはいへども此の我等が身體は其實在に於て粗大なり。かくの如く靈魂も幾微なるものなれど、見る目と聞く耳とを被ひり、同じく亦言ふ舌と手とを被ひれり。一言にてこれをいへば、靈魂は凡の體と肢とを被ひりて、身體と融合し、これによりて凡の生活官能は完備せら

るゝなり。

十、かくの如く無限にして測るべからざる神は其の仁慈により、おのれを抑損し、此肢體をかうひりて、近づくべからざる光榮を自ら隠したまへり。彼は寛容と人を愛するにより、變化して己を肉身となし入りて合一して、聖なる神の悦ぶ所となる信誠なる靈魂を受け、パウルのいふ如く彼と一神となること、(コリント前六の十七)たとへば靈魂が靈魂と實在が實在と合一する如くなれるは、これ神に適當して其悦ぶ所と木れる靈魂が革新して生活し、不死の生命を感ずるを得て、不朽の光榮に與かるものとならん爲なり。げだし神は此の有形なる造物をも無より有となし、或る大なる異種多様と許多の參差たるものになしたまひしが、其有とせられざる間は、造物はあらざりき。されど欲するあるや、粗にして硬なる實體を無より容易に造り給へり。例へば山と木との如き是なり。汝は彼等の性のいかに硬固なるを見ん。其後中間なるもの、即水を造りて、水より鳥の生るゝを命じ給へり。而して更に最微なるもの、即火と風とを造りて、幾微なるにより肉眼にて見えざるものをもさへ造り給へり。

十一、さりながら神の多種多様なる睿智の無限にして思議すべからざる意匠は、

神の意によりて現實となれる粗き精しき柔なる諸體を無よりつくり給ひし如く、いかに欲し何を欲するも自由なる常在者は、殊に自ら言ふ可らざる仁慈と悟るべからざる善意とにより、肉身となりて己を變化し抑損し聖なる適當なる且信實なる靈魂に己を擬して、彼等が容易きに從ふは、これ其の見るべからざる者が彼等の爲に見ゆるものとなり、觸るゝあたはざる者が靈魂の幾微の性質に應じて觸るゝを得べきものとならん爲なり。又其の靈魂が彼の仁慈と甘美とを感じて、言ふ可らざる樂の光を實驗して樂しまん爲なり。又欲するときは、彼は我等に輸入せるもろくの不良なる靈魂の病を癒き盡す火とならん。けだしいふあり「我等の神は煙き盡す火なり」エウレイ十二の二十九。然れども又欲するときは、得もいはれざる且は説明し得ざる慰とならん。靈魂が神性の平和を以て安んせんためなり。且欲するときは喜となり、平安となりて、靈魂をあたゝめ且護らん。

十二、しかれどももし靈界造物の喜びと樂とに充てんが爲に己を造物の一に擬せんと欲するならば、例へば光の城なるイエルサリムに、或は山なる天のシオンに擬せんと欲するならば、すべて其意の欲する如くなるべし。録していへる如し、汝等の「就きし所はシオンの山及び活くる神の城、天のイエルサリムなり」エウレイ十二

の廿二彼に適當する信誠なる靈魂の爲に變化し給へる彼のためには何を欲するもすべて難きこととならして容易に爲し得るなり、たゞ人は彼に納れられて其の悦ぶ所とならんことを勉むべし、さらば天の福と名状すべからざる樂と神性の無限の富とを實に試みて適切にこれを見ん、實に「目未だ見ず耳未ださかず人の心に未だ入らざる」コリント前二の九ものを見るべく、適當なる靈魂の慰安となり喜びとなり、樂となり、永遠の生命となり給ひし主の神を見ん、けだし主は食の爲、又飲の爲に己を肉身となし給ひしこと、福音經にしるされし如し、曰く「此の餅を食ふ者は世々に活さん」イオアン六の五十二、これ靈魂を得もいはれず安んせしめて、靈界の樂みを彼に充たさんが爲なり、けだし「我は生命の餅なり」とイオアン六の三十五、しかれどもこれと同様天の流れを飲ましめんが爲にも己を肉身となし給ひしこと、録していへる如し「我が彼にあたへんとする水は其中に於て永遠の生命に湧く水の泉とならん」イオアン四の十四、また「いへり」皆おなじく屬神の飲を飲めり「コリント前十の四」。

十三、かくの如くなれば彼は自ら善んするあり、又は有益なるあるや、聖なる列祖におのゝ現れ、或はアウラムに、或はイサアクに、或はイアコフに、或はノイに現

れ、又聖なる各預言者にはメニエル、ザワイド、ソロモン、イサイヤに現れ、或はイリヤに、或はモイセイに現れたまへり、故に余思ふにモイセイが四十日禁食の全時に當り、山上に在りし間は彼の靈食に就き、これを以て自から慰め且樂みたりしならん、此に由りて觀るに自ら善んするあるや、各聖人に現れたまひしは、彼等を慰安し且救ひて、神を識るの認識に至らしめんためなり、けだし何を欲するも、彼の爲には全く容易なり、されば其の欲する如く己を抑損して己を肉身となし、且變化して彼を愛する者の爲に瞭然として見ゆる者となり、大なる得もいはれざる愛により、近づぐべからざる光榮の中に在て、各人の力に應じ、これに適當なる者となりて現れん、しかれども大なる願望と期待とを以て、信と愛とを以て、上より彼の能力をおのれに受け、天に屬する神の愛をうけて、不死なる生命の天の火を既に己に有する靈魂は實に世のもろくの愛より脱し、惡習のすべての穢業より免れて、自由を得ん。

十四、火中に置かれたる鐵、或は鉛、或は金、或は銀は變じて、軟なる物體となり、硬き性質をうしなひて、火中にある間は、火の温暖の力により、鎔解して、天然の硬質を變せん、かくの如く靈魂も世を棄て、獨一の主を愛し、中心より大に尋求むると共に、勞と苦行とにより、望と信とを以て、不斷に主を待ちて、彼の天に屬する神性の火と

神の愛とおのれにうくるならば最早其時は世の悉くの愛より實に解脱し情慾のすべての害よりまぬかれ一切を自ら抛棄しその天然の性質とその有罪なる硬質を變じて獨一なる天の新郎を己に受け彼に對する熱ゆるが如くなる言ふ可らざる愛を以て自ら安んじてすべてを贖物と爲さんとす。

十五、されば爾に告げん爾は其目前に最愛の兄弟を有するあらんにもし彼等は此の天の新郎に於るの愛を阻止するならば靈魂は彼等を嫌はん何故なれば生命とその安息とは天の王と與にする奥密なる言ふ可らざる親與にあればなりけだし肉體上の親與に於ける愛さへも父母兄弟と離れしめてすべて彼等に關するものは心に於て他人的とならんゆゑにもし人は彼等を受するならば他人の如く愛してそのすべての愛情は其配偶者にあらんけだし言ふあり是故に人は其父母を離れ其妻に著きて二の者一體とならん「エフェス五の三十二」此によりて觀るに肉體の愛さへも悉くの愛より離れしむること此の如くならばいはんや彼の大に願欲する天の聖神と與にする親與を實にたまはりし者は世に對する悉くの愛より離れてすべては彼等の爲に贖物の如くならん何となれば彼等は天の願の勝つ所となりてこれと密なる關係をなせばなりかしこには願望ありかしこには彼等の思

慮ありかしこには彼等生活しかしこには彼等の思往來して神聖なる天の愛と靈界の望とに勝たれたる彼等の智はかしこに常に留存するなり。

十六、至愛なる兄弟よ是後幸福はかくの如く吾人の前にあり許約はかくの如く主を以て知らざるゝならば我等はすべての妨礙を己より絶ち此世の如何なる愛よりも遠ざかりて彼の惟一の幸福を求め且願ふことに己を貢獻せん得もいはれざる神の愛を受くるを得んためなり福なる「パウロ」は此愛を求むるに迷なるべきを我等に勸めて曰く「愛を求めよ」コリント前十四の二また彼等剛愎の後に於て至上者の右の手を以て變化をうけ神聖なる神の愛に感刺せられて溫柔と心神の安さにと到り達せんためなり何となればすべて反對なる者より己を奪ふて全く主に歸するや主は大なる仁心を以て我等を恤み給へばなり然のみならずもし我等は大なる無智により生命より遠ざかり眞實に悔ゆるを欲せずして自分にも多くの妨を置くといへどももし改心し主に就きて我が内部の人を光らすや我等に恒忍なる主は大なる善心をあらはし給はん審判の日に於て我面の耻を被むるを免れん爲なり。

十七、しかれども道德の苦行の嚴しきにより確言すれば反對者が納るゝ所の暗

示と勧誘とにより、此を爲すことの我等に難きが如く思はるゝならば、視よ、主は憐れを垂れ、我等の改心を待ちて、更に寛忍し給ふなり、さればもし罪を犯すならば、我等の悔改を期してこれを忍耐し、もし陥るならば、我等を新に受くるを耻ぢ給はざることを、預言者のいひし如くならん、曰く、「人もし仆るれば起きかへるにわらずや、もし離るれば歸り来るにわらずや、」イエレミヤ八の四、我等はたゞ善なる意思を求め得て、徹醒し、主の助を尋ねて速に且正しく彼に歸せん、而して彼は我等を教はんと欲す、何となればわれらの力に従ひ己の意志を彼に向はしむる熱ゆるが如くなる、進向と任意よりする善なる信仰と熱心とを待ちて、すべての非常なる進歩と彼は自ら我等に生せしめんとすればなり、ゆゑに至愛者よ、我等は神の子として、悉くの偏見、怠慢及び懶惰を脱して、彼の跡に従ひ行くに勇氣ある者となり、準備したるものとならんことを盡力し、惡習の爲に誘ひ去られて日々これを遷延することゝならざらん、けだし我等が肉體より出で去るは何れの時なるを我等知らざればなり、ハリステアアーンの爲に約束は大にして、言ふ可らざるなり、其大なるは凡そ天地の光榮も、壯嚴も、其他の裝飾も、異種多様も、富も、美麗も、有形上の樂みも、信仰及び一の靈魂の富に對すれば比較にもならざらんとす。

十八、さらば斯程なる主の獎勵と約束の中にありて、我等はまつたく主に就き、福音經に言ふ如く己の生命をさへ棄て、他のすべてをさへぐるのみならず、自ら己を主にさへ、他の何物をも愛さずして、彼獨りを最愛するを如何ぞ願はざるべけんや、視よ、此のすべては我等に賜はりぬ、さらば尙は何等の榮やあるべき、列祖及び預言者等の時より以來、我等に於る主の照看はいくばくなりしや、約束はいくばく知らざれしや、獎勵はいくばくなりしや、最初より我等に對する主の慈善は如何なりしや、然るに彼は終に自ら來りて、我等に對する得もいはれざる仁慈を證するに十字架に釘せられしを以てしたるは、我等改心せし者を生命にみちびき入れんが爲なり、しかれども我等は己の嗜好と世の爲の愛と、惡なる偏見及び習慣とを未だ絶たず、これによりて小信なる者或は不信なる者とさへあらはるゝなり、しかれども、視よ、此のすべてに對しても、主は見えずして我等を護り且安んせしめ、我等が罪の爲に我等を世の惡習と誘惑とに終に沈ましめず、大なる仁慈と寛忍とにより、我等が亡ぶるをゆるし給はず、何れの時か反歸し來らんと尙は注目して、我等に憐愍なる者として存し給ふなり。

十九、さりながら余は恐る、すべてを棄んじて生活し、偏見を以てみちびかるゝ我

等に使徒の言が漸次に應驗し來らんことを曰く抑爾は神の仁慈寛容恒忍の豐厚なるを藐して其仁慈が爾を悔改に導くを知らざるか」ローマ二の四さればもし神の恒忍と仁慈と寛容の中にありて罪の數を更に増加し、その怠慢と藐視とを以て最大なる定罪を己の爲に準備するならば使徒の左の言は我等に應驗せん、曰く然れども爾は剛愎と悔なき心とに循ひて己の爲に神の怒の日及び其裁判の顯現の日に怒を積む同上五、けだしもし我等は救を捉ふるを得るがために懺悔せんを願ひ、神に全く歸するに盡力するならば神の仁慈は大にして思議すべからず、人間に對する神の恒忍は言盡し難からんとす。

二十、しかれどももし爾は神の恒忍と神の大なる仁慈とを認識せんを欲せば神の默示に成れる書によりてこれを學ぶを得べし、イスマイリ人を觀よ、列祖は彼等の中より出で許約は彼等の爲に定められ、彼等よりハリストスは肉體によりて出で、禮儀と許約とは彼等に屬したりしにローマ九の四五、いかにして彼等は多く罪を犯したるか、幾回迷路に入りたるか、しかるに神は彼等を終に棄てたまはず、難を以て彼等の剛愎をやばらげんと欲し、彼等の益とならんが爲に、暫時の間彼等を罰に付し、かれらを眷み且獎勵して、かれらに預言者をつかはし、彼等が罪を犯して神

を愛ひしめたる時にも、彼等に對して恒忍なること幾時なりしや、改心する者を喜んで、うけ再び迷路に入りしときもこれを棄てず、預言者等を以て呼んで改心せしめ、彼等が神に背きて又神に歸せしことしばしなりしといへども、何れの時にも深き慈悲をもつて迎へ、手を自己の主宰に舉げて大なる罪に陥るに未だ至らず、列祖と聖なる諸預言者との傳により己の爲に贖罪主となし、救世主となし、王及び預言者となして彼を待ちし間は、仁愛を以て受けたまへり、けだし主の來るや、彼等は受けざるのみならず、剩へ大なる凌辱に付して、終に十字架に死刑に付せり、而して此の大なる凌辱と非常の犯罪とを以て大に増加せし、彼等が罪惡は貫盈するに至れり、故に聖神が彼等を離れて、殿幕の裂くるに至るや、彼等は終に棄てられたり、ゆゑに彼等の殿も異邦人にわたされ、破壊荒廢して主の定めし如く、一石も石上に遺らずして皆圮され、マテウイ廿四の二、かくて彼等は、斷然異邦人に付され、當時彼等を捕虜としたる諸王の爲に、聖地に散らされて、最早己の國に復るべからざるを命せられたり。

二十一、我等各人に憐愍仁慈なる神は、今も如此その恒忍をあらはし給ふ、されば各人より幾回か凌辱をうくるにも拘らず、人の時を経て覺醒するあらざるか、自

ら變化して、最早復び神を辱めざるやうになるわらざらんかとこれを待ちて沈黙し、而して罪より改心する者を大なる愛と喜とを以てうくるなりけだし言ふあり、「一の悔改むる罪人の爲に喜びあり」ルカ十五の十、又いふあり「此の小子の一の亡ぶるは我が父の旨にわらず」マテフイ十八の十四、さりながらもし誰か神の彼に對する大なる憐憫と恒忍との中にありて、おのゝ隠れ顯れたる有罪なる墜落の爲に、神が彼を罰に付せずして、これを見るも沈黙して悔改を待つ如くなるや、彼は自ら大にこれを藐忽して、罪に罪を添へ、不注意に不注意を加へ、一の犯罪に他の犯罪を作りて、罪の量を満てんとするならば、終に出づる能はざる罪に陥りて破砕せられ、悪者に付されて全く亡びん。

二十二、ソドム人はかくの如くなりき。多く罪をおこなひしも改心せず、終に天使に對し悪謀を以て彼等と男色を行はんと、望を起し、悔改の爲に最早餘地あらざる程罪におちいりて、全く棄てられたりけだし、罪の量をみちみて、其極に達したれば、なやゆゑに神の審判により、火を以てやかれたり。ノアの時にもかくの如くなりき。しばしば罪に陥りしも、悔改の果を結ばず、罪惡蔓莖して終に全地を腐敗せしむるに至りぬ。埃及人等もかくの如くなりき。彼等は多く神を辱めて、神の民に對し

罪をおこなひしも、神は更に憐憫にして、彼等を終に殄滅する程の罰をば彼等に加へず、ただ瞭解して反省と悔改に至らしめんがために、輕き打撃をかうむらしめ、その恒忍をあらはして、彼等の悔改を待てり。しかれども、彼等は神の民に對し、多く罪を犯して、或は改心せしも復たそれを悔恨し、惡なる任意の昔日の不信に固まりて、神の民を奴隸虐使し、終に神がモイセイを以て多くの奇跡により、民を埃及よりみちびき出したる時、神の民を追跡窘逐して、大なる罪を遂げたり。ゆゑに神聖なる審判は終に彼等を殄滅し、現在の生命に堪へざるものと認めて、彼等を水に溺らしたりき。

二十三、これと同様イマヲイリ人も前文に述べし如く、神が彼等の悔改を待ち沈黙して恒忍したまひし間に、神の預言者を殺し、又他の悪行を多く行ひしは、一に墜して罪を犯し、終に打碎かれて、最早起つ能はざる程墜せり。何となれば、主宰の尊威に手を挙げたればなり。ゆゑに神に棄てられたる彼等は、全く擯斥せられ、彼等より預言と神品の職と奉神禮とを奪ひ、このすべてを以て篤く信じたる異邦人にわたへられしことは、主のいひ給ふ如し、曰く「神の國は爾等より奪はれて、其果を結ぶ民に與へられん」マテフイ二十一の四十三、此時に至るまで、神は彼等を忍耐して

其の恒忍を絶たず、彼等に憐れを垂れて休せざりき。さりながら主宰の尊威に手を擧げて、罪の量を充て、剩へこれを搖撼して、満たしめたるにより、全く神に棄てられたり。

二十四、至愛者よ、我等聖書より汲み來れる意義により、此事を敷衍せしは、出來る丈我等は速に改心して、主に急がざるべからざると、主は我等がもろくの悪行と悪なる偏見とより全く遠ざかるを待ちて、改心したる者を大なる喜びを以て受け給ふを認定せんが爲なり、我言ふ、此事を敷衍したるは我等輕慢の心を日々に長せしめず、罪に陥ることの我等に増加せずして、これにより神の怒りを己に引かざらん爲なり。ゆゑに誠實の心を以て反省して、神に就くことを努めん、失望は兇惡と詭計とにより徐々と沁入したるものなるにより、先に犯したる諸罪を想起するによりて、救に失望せざることを努めん、けだし人を失望と不精と怠慢と不注意とに至らしむるは、人をして改心して主に就き、人間に對する主の大なる憐れによりて、救を受くるを得しめざらんが爲なればなり。

二十五、しかれども我等を預め、占領したる罪の多きにより、改心することの我等に實行し易からざる如く、且は能はざる如く見ゆるならば、かくの如きの思は我等すでにいひし如く、兇惡を以て徐々と沁入したるものにして、我が救の爲に妨となるなり。主の如何なるを己の記憶に呼び起して、深く注意するなくんばあるべからず、けだし主は其仁慈により、我等に來りて、對者には見るを賜ひ、癡癡者を愈し、もろくの病を療し、最早腐爛しかゝれる死者を復活し、聾者の耳を開き、或者よりは魔鬼の全軍を逐出して、如是の魔鬼に苦めらるゝに至りし者に健全の智識を回復せしめたるによる。況や又改心して主に歸し、其憐れを尋ねて、其助を要求する所の靈魂を主は顧みて、無慾の貞潔と諸の徳行の建設と、心の作新とにみちびき、これに理解の健全と透明と思ひ、平安とを賜ひ、無知不信及び無忌憚の替なると、聾なると、死人の如くなることより、擧げて徳行の貞潔と心の清淨に昇すに於てをや、けだし身體を造りし者は、靈魂をもつくりたまへり。されば、彼は其の仁慈により、地上に居り、善なる一つの醫として、凡そ來りて、彼に助けと愈しとを求むる者には、其宏慈により、必要なものをあたへたまひし如く、靈神上の事に於ても、彼は宏慈たるなり。

二十六、それ主は敗壞して死せざるべからざる身體にさへかくの如く、憐れを垂れて、凡そ求むる所の者には、準備と仁慈とを以て、此を爲し給ひしならば、矧や死せず、壞れず、腐らざる靈魂に於てをや、即無知惡習不信無忌憚及び其他有罪なる情態の

病に陥りしも、主に來りて其助を求め其憐みを仰ぎ望みて、もろくの悪習ともろくの情慾とより救はれて自由を得んが爲に神の恩寵を彼より受けんを懇願する。靈魂には全く速に且準備して治療の助を與へたまふこと、次に言ふ如くならん。曰く、矧や天にいます父は「日夜彼に顯ふ所の者に援けざらんや」。又これに加へていへり「爾等に語ぐ、速に彼等を援けん」。ルカ十八の七八。主はまた他の所に於ても我等に勸諭していへり「求めよ、然らば爾等に與へられん、尋ねよ、然らば遇はん、門を叩けよ、然らば爾等の爲に啓かれん」。マテウイ七の七八。又更に加へていへり「泥んや天に在ます父はこれに求むる者に聖神をあたへざらんや」。ルカ十一の十三。誠に爾等に語ぐ、もし彼は友なるが故に起さて彼に與へざるも、其切迫に依り起さて其需むる如く彼に與へん」。同上八。

二十七。此のすべての言を以て、主は我等に退かず連續として倦まず、恩寵の代保を願ふべきを説勸したまへり、何となれば主は罪人の彼に歸して彼を信する者等を愈さんが爲に來りたまへばなり。我等はたゞ我が力に能くする程は悪なる偏見を棄て、醜き所業と世の誘惑とを憎み、惡なる無益の思を棄て己の力に準じて常に彼に附かん、彼は其助を我等にあらはさんことを準備し給ふ、何となれば彼は最憐

憫なるにより、生活を施し、愈すべからざる情慾を醫し、彼を呼び、彼に向ふて自己の自由により強ひずして世のもろくの愛より力に準じて遠ざかり、智を地より引出して其願と求めとを彼に向はしむる者に救を施したまへばなり。さればすべてを賛物と爲し世に何も慰藉するものあらずして、安心の爲にはたゞ一を待つ、即彼の仁慈を以て安んせしめられ、且喜ばしめらるゝを待つ所の靈魂は、彼の助に適當するものとならん、ゆゑに靈魂は如此の信仰の爲に天の賜を受けん、即恩寵により、確に其渴望を安んせしめて、適當相應なる態度を以て聖神につかへ、日々善に進歩し、正義の途を離れずして、終に至るまで悪習に傾かず、これと親まらずして、止まり、何を以ても恩寵を辱しめずんば、世に居りて、效法したる諸聖人の同伴又は同行者として、彼等と共に永遠の救をうけん、アミン。

第五 講話

「ハリストス、テア、ニン」と此世の人々との間の差異は大なり。
一は世の神を己れに有し、心に於ても、智に於ても、地上

の械繫に縛らるれど、^一は天父の愛を希ひ、獨り彼を以て其悉くの願望の所歸と爲す。

一、「ハリスティアニ」には自己の世界と自己の生活の状態とあり、才智も言語も己に属するものあり、されど此世の人々は生活の状態も才智も言語も活動も異なり、「一」は「ハリスティアニ」にして、「一」は世に偏する者なり、彼と此との間の懸隔は大なり、けだし地の住者此世の諸子は此の地の箇中に撒入れられたる麥に似たるあり、されば浮世の事と欲望と大に紛紜錯雜なる物質的概念の絶えず激動するに方り、此世の轉變不定なる思の中にありて、簸はるゝなり。サマナは靈魂を震撼し、箇を以て即浮世の事を以てすべて罪ある人間を簸はんとす。アマムが墮落して滅命を破り、彼に對して權を取りたる惡王に屬せし以來、サマナは絶えず誘惑擾亂せる思を以て此世の諸子を簸ふて、地の箇中に衝突せしめんとす。

二、麥は箇中にありて、簸ふ者のために打たれ、絶えず打上げられて、振盪せん、かくの如く奸惡の王は浮世の事を以てあらゆる人類を占領して、これを動搖擾亂狼狽せしめ、すべて有罪なるアマムの族を絶えず虜にし、これを擾し、これを捉へて、無益

の思と嫌はしき慾望と、地上世間の關係との爲に戦はしめん、ゆゑに主は將來使徒等に對し惡者の蜂起すべきを預言していへり、曰く「サマナは汝等を麥の如く簸はんことを求めたり、然れども我わが父に爾等の信の盡きざらんことを願れり」(ルカ廿二の三十一、三十二) けだし造成者は明にカインにつけて「地にさまよふ流離子となるべし」(創世記四の十二)といはれしが、此の言と決定とは、隱然としてあらゆる罪人の状態又は像似となれり、何となればアマムの族は滅命を破り罪人となりて、此像似を隱然己れに受けられたばなり。人類は畏懼と戰慄とすべての擾亂の轉變不定なる思の爲又欲望と種々多様なる快樂の爲に動搖せられん、此世の君は神より生れざるもろくの靈魂に波を起して、絶えず箇中に旋轉せらるゝ、麥の如くし、人間の思を種々様々に騒がし、すべてを動搖せしめ、世の誘惑と肉身の快樂と畏懼と擾亂とを以て捉へんとするなり。

三、されば主は惡者の誘惑とその欲する所とに従ふ者がカインの姦惡に肖たるものを己れに有するを證し、彼等を責めていへり「汝等はなんぢらの父の慾を行はんと欲す、彼は始より殺人者にして眞實に立たざりき」(イオアン八の四十四) ゆゑにすべて有罪なるアマムの族はアマムの定罪を隱然己れに有し、呻吟戰慄して、汝等

を獲ふサマナの爲に地の篩中に動亂せん。一のアダムよりして全人間は地上に蔓
 延せり、かくの如く一の或情慾の腐敗はすべて有罪なる人間に透徹して、兇惡の王
 は獨り轉變不定なる物質的なる虚妄なる擾亂なる思を以て、あらゆる人類を獲ふ
 を得たり。たとへば一の風があらゆる草木と種子とを搖撼する如く、また一の夜の
 闇黒が全地にひろがる如し、かくの如く誑の王は罪と死との或る心中の闇黒とな
 りて、或る晦蒙慘烈なる風を以て、地上すべての人間を動搖旋轉せしめん。轉變不定
 なる思と世の欲望とを以て人心を捉へ、すべて上より生れずして「我等が居處は天
 にあり、」(フィリッピ三の二十)といへるごとく思を以ても智を以ても他の世に移らざ
 る靈魂に無知旨味遺忘の間をみちみたしめんとす。

四、眞實なるハリストアエインの一切人間に卓越するは、此點にこそあるなれ、され
 ば我等已に前文にいひし如く、ハリストアエインと他の人々との懸隔は大なり。けだ
 し、ハリストアエインの才智と理解とは天上の事を深く考ふるを以て常に占められ、
 聖神の親與とこれを享くるとにしたがひ、永遠の福を直視するにより、彼等は上よ
 り神によりて生るゝにより、又其實際と能力に於ては神の子となるを賜はり、多く
 の長久なる苦行と勤勞とを以て、恒久堅固平穩安息に達するを得て、不定無益なる

思の爲に散亂せず、又波を起さざるにより、これを以て彼等は世より上にありて、世
 に勝越するなり。何となれば彼等が才智と心中の深き考とはハリストスの平安と
 神の愛とに在ればなり、主もかくの如き者等に論及していひ給ひし如し、曰く彼等
 は「死より生命に移れり」とイオアン五の二十四。故にハリストアエインの卓越するは
 外貌にあるにあらず、表面の狀態にあるにあらず、多くの人はすべての差異を此點
 にありとなし、ハリストアエインは外部の容貌と狀態とを以て其間に卓越すと思ふ
 もの、如し然れども視よ、彼等は才智を以ても理解を以ても世に似同し、彼等にあ
 るものは他の悉くの人類にも同じくこれあり、思の疑惑も紛亂も同じくこれあり、
 不信擾動擾亂畏懼も同じくこれあるなり。外貌と意見と、亦或る外部の功勞を以て
 も彼等世に卓越すといへども、心と智とは浮世の械業に縛られ、神よりの慰安と天
 上靈界の平和とを其心に有せず、何となればこれを尋ねずして、これを神より賜は
 るを信せざればなり。

五、新しき造物たるハリストアエインの世に於て悉くの人類に卓越するは、智を革
 新すると、思を平安にすると、愛と主に對する天上の服従とにあるべし。主の來り給
 ひしも實に主を信じたる者に此等の靈界の幸福を賜はらんがためなり。ハリストア

アミンに光榮と美麗と得もいはれざる天の富は屬せん、これ勢と汗と試誘と多くの苦行とを以て求め得らるゝなり、然れども他にあらず神の恩寵に由りてなり、それ地上の王の顔を視るはすべての人の懇願する所ならん、誰か帝都に來るゝらば、或は衣服の粧飾、或は白班紅石の美麗、異様な真珠の善美と、冕旒の殊飾と、王の記號の貴重なるに於て、たゞ其美麗を一見するのみなりともすべての人の願ふ所なるべし、たゞ神的に生活する者は此等を高く估價せざるなり、何となれば他の天に屬して肉身に關せざる光榮を實地に試み、他の得もいはれざる美の感に刺され、他の富に分前を有し、内部の人により生活し、他の神を受くればなり、しかれども世の神を己れに有する此世の人々の爲には、地上の王を見、特に其の全き殊飾と全き光榮とを見るは、最願ふ所ならん、けだし王の圖の赫々たる高貴が他のもろくの人の圖より大に超越する程は、唯彼を見るのみなりともすべての人の榮として懇願する所なり、さればすべての人は自から心には「ア、誰か此榮と此美麗と此壯飾とを我にも與ふるゝらば如何ぞや」とかくの如く人は彼の己れと同じく地に屬する同情の者にして、死すべき者なるも、一時の壯麗と一時の光榮とを以て人の願望を起さしむる所の者を讚美せんとす。

六、しかれども地上の王の光榮は肉に屬する人々の爲にかくの如く大に願はしからんには彼の神聖なる生命の神の露が滴りて、天の王ハリストスに於ける神聖なる愛を以て心を感刺せられたる人々は彼の眞實信誠なる永遠の王ハリストスの美と得もいはれざる光榮と、不朽なる壯麗と、人智の測るゝたはざる富とを更に愈愛慕せん、彼等はハリストスに全く向ひつゝ、大なる願望と愛の爲に、神に心にて直視する得もいはれざる幸福を捉へんを希ふ、ゆゑにこれを以て地上の如何なる美にも、光榮にも、壯麗にも、尊敬にも、王公の富にも、易へざるなり、何となれば彼等は神妙なる美の感に刺されて、天上不死の生命は其靈に滴ればなり、ゆゑに彼等は天の王の獨一の愛を願ひ、大なる希望を以て彼獨りを目前に有して、彼の爲には世のもろくの愛より脱し、もろく地上の械繫より遠ざかるなり、たゞ此の一の願望を心に有するを得て、他の何物をもこれに混せしめざらんが爲なり。

七、しかれども善き終を善き始と合せしめ、蹉跌せずして目的に到り達し、獨一の神に於ける獨一の愛を有して、すべてを解脱したる者は、甚僅少なり、多くの者は中心の悔悟を生じ、多くの者は天の恩寵に與かるものとなり、天の愛に感刺せらるれども、途上遇ふ所の種々なる戦と苦行と、勞と悪者の試とに得堪へざるなり、けだし

人にはおのゝく此世に於て何物をか愛して其愛より全く離れざらんとの望あり、されば殊異多様な浮世の欲望に立返りて劣弱と不活動により或は自己の意志の懦弱なるにより或は地に属する何物をか愛するにより世に止まりて其深淵に沈めり然れども終に至るまで善生活を送らんと實に志す所の者は他の如何なる愛をも執着をも甘んじて己れに受けざるべく又その累す所とならざるべしこれを以て靈界の事に妨げを置かざらんが爲又後に逡巡して終に生命をうばわれざらんが爲なり神の約束の大にして得も言はれず且説明する能はざる程はわれらの爲に信と望と勞と大なる苦行と長久の試みとを要するなり天國を希ふ人が受けんを願ふ所の幸福は輕少なるにあらざる彼はハリストスと共に無窮の世に王たらんを願ふ然るに此の生命の短き時日の間に於て死に至る迄戦と勞と試とを忍耐せんことを熱心と共に自から決せざるか主は呼んでいへり「人もし我に従はん」と欲せば己を捨て其十字架を負ひて我に従へ」マテウイ十六の廿四またいへり「人もし其父母妻子兄弟姊妹又己の生命をも惜まずば我が門徒となるを得ず」ルカ十四の廿六さりながら人々の中に天國をうけんを志し永生を嗣がんと願ふといへども自己の欲するまゝに生活して此の欲する所に従ふ者甚多し確言すれば虚

榮を撒く所の者に従ふを辭せざる者甚多し然らば彼等己を捨てずして永生を嗣がんと欲するはこれ能はざるなり。

八、主の言は眞實なり主の誠命にしたがひて己を全く捨て、およそ世の欲望と束縛と娛樂と満足及び醜散を脱んじ獨一の主を眼前に有して、その命を行はんことを大に希ふ所の者は蹉跌せずして進行せんゆゑにもし人は實に天國をうけ己を捨てんと望を起さずして彼を愛するともに更に何物をか愛し此世の或る満足又は或る欲望を樂み自由なる意志と思欲の爲に能し得るだけ主に全幅の愛を有せずんば、おのゝく自己の自由によりて路を失はん汝は左の一例によりて此のすべてを理會すべし、すべて人はそのなさんと欲する所の事の何とも不適合なるを時として理會力により察し知ることあらんしかれどもこれに愛着して其愛を捨てざるが爲に自から勝を譲るなり先づ其人の心の内部に争と戦とありて或は神を愛し或は世を愛するの平均と偏重と過量とを生せんされば其時人は兄弟と争論すべきや否やを思ひ始めて自から心に言はん「我彼に言はん否言はざらん彼と口を開かん否開かざらん」と彼は神を記憶すれども己の名譽をも固く守りて己を捨てざるなりしかれどももし世に對する愛と嗜好が心の秤量に於て少しく秤

り勝つならば直に悪なる思は口をも動かさしめん。次で智は内部より舌を以て近者を射ること、たとへば引満つる矢を以てする如くし己の名譽を守らんが爲に最早意旨には何等の強制も加へずして、不適當なる言の矢を放たん、其後罪が肢體に繼らざらん間は、不適當なる言を以て近者を刺すをついけん、されば時として悪なる強求是互に口を以て争論する此の肢體をして打撃負傷に至らしむべく、時としては引て兇行にも至らしめ、死を速にせん。視よ、事は何を以て始まりて、世の名譽を愛するは、人の自己の望みにしたるがひ、心の秤量に於て秤り勝ちて、如何なる終を遂ぐるかを、けだし人は己を捨てずして、世に或物を愛するにより、それよりして此の悉くの不適合は生じ來らん。

九、同じく又各般の罪事と悪なる始計とを想ふべし、悪習は世の欲望と誘惑と肉體の樂みとを以て智の望に詣ひ、これに傾かしめん、かくて諸の邪惡なる行爲、盜淫、偷盜、貪獲、醜態、好貨、虛榮、嫉妬、貪權、及び如何なる惡しき計畫なりとも預備せらるゝなり。或は一見したる所は美なる始計の如くなれど、名譽と人々の賞讃との爲に實行せらるゝことあり、しかれどもこは神の前には不義、偷盜、及び其他の諸罪とひとしかるべし。けだし「へり」神は佞人の骨を散さん、聖詠五十二の七、又一見したる所

は善なる行爲の如くなれど、これに於て惡者は己の勤勞をあらはさんとす、彼は殊異多様にして、世の諸の欲望を以て人を瞞着するなり、人が自己の望にしたがひ己を繋ぐ所の地上肉體の或愛によりて罪は人を捕ふ、されば彼は人の爲に械繫となり、鐵鎖となり、重轆となりて、人を惡世におぼらし、且壓して、人に其力を養ふて神に歸するを得しめざるなり、人が世に於て最愛する所のものは、人の智を苦しめ、これを占領して、これに其力をやしなふをゆるさざるなり、惡習の平均も偏重も過量もこれにかゝり、これによりてすべての人間は試みられ、凡そ城中に居り、或は山に、或は修道院に、或は田間に、或は曠野の地に居る所の「ハリステアモン」は試みらるゝなり、何となれば自己の望みの爲に捕へらるゝ人は、何なりとも愛し始むるや、其愛は其物に結び付られて、最早神に全く向はざればなり、例へば或者は財産を愛し、又或者は金と銀とを愛し、或者は人間の名譽の爲に治博なる世の智慧を愛し、或者は權勢を愛し、或者は名譽と人爵とを愛し、或者は怒と憤激とを愛せり、然れどもこれ速に情に殉ふによりて愛するなり、或者は時ならざる集會を愛すれど、或者は妬忌を愛し、或者は排擠と娛樂とに全日を送り、或者は無益なる思慮の爲に誘はれ、或者は人間の名譽の爲に、教法師の如きものとならんを愛し、或者は無爲と懶惰とを樂み、

他者は衣服の爲又は襁褓の爲に心を繫がれ、或者は此世の慮に耽り、或者は睡眠戲言或は猥褻の談を愛す。人は世に繋がる、程は大小に拘はらず、それは人を造りて其力を養はしめざるなり。人は如何なる嗜好とも勇氣を以て戦はずんば、それを受して其は人を占領し、人を苦しめ、人のために械繫となり、其心を神に向けて神の意を悦ばすを妨げ、獨り神につかへて、天國の爲に大に要用のものとなり、永生を捉ふるに妨げん。

十、然れども實に主に向ふ所の靈魂はその凡ての愛を全く彼に及ぼし力ある丈自己の自由なる任意を以て彼獨りに結び着けらるゝなり、さればこれにより恩寵の助を求め得て、自から己を捨て、其の智の欲する所にしたたがはざるべし。何となれば我等と離れずしてわれらをいざなふ惡の爲に智は詭りて周旋すればなり。これに反して靈魂は己を主の言に全く従はしめ、意旨のために能くするだけ、もろく有形なる械繫より脱して、主に全く従はんとなす。さればかゝる場合に於ては彼は戦と勞と患難とを耐忍するを得ん。けだし靈魂は愛する所の其物に於て己の爲に助けをも又苦めをも見ん。もし世に於て愛する所あれば、其物は人の爲に下に曳去る所の重輓又は械繫となりて、上に神に登るをゆるさざらん。しかれどももし主と主との誠命とを愛するならば、これに於て己の爲に扶助をも輕減をも見ん。されば主に對する己の愛を全く守るによりて、主のすべての誠命は彼の爲に容易なるものとならん。これ人を善に導くは、確言すれば、これは人を輕うして悉くの戦と悉くの患難とを人の爲に堪へ難からざるものと爲すなり。人は神の力を以て世と惡習の力とを眩せん。これ種々様々なる欲望の長き網を以て靈魂を世に網してこれを世の深潭に圍まんとするものなり。かくの如くなれば、もし靈魂は主を愛するならば、直ちに自己の信仰と大なる勉勵とを以て彼の網より奪ひ取らるべく、并て上よりの助を以て永遠の國を賜はらん。されば自己の自由にしたがひ、主の助によりて實にこれを愛して、永遠の生命は最早らばはれざるべし。

十一、さりながら多くの者が自己の自由によりて亡び、或は海に溺れ、或は捕虜として奪ひ去らるゝ。所以を我等の爲に實事を以て明白に證せんとせば、まづ家の燒けんとするを想ふべし。一者は己を救はんと欲して、火事と知るや、直ちに奔りて外に出で、一切を捨て、たゞ己の生命を慮るを決心したるにより救はれたり。然るに他者は自身と共に或る家具又は他の何物をか取らんと欲して、これを取集めんが爲に家に入りしが、その取集むる間に火勢急熾になり、彼を家中に押籠めて焼けり。此

人の火に亡びたるは自己の自由に循ひ愛による即自身の外に或物を暫時愛したるによる所以を見るか次にこれと同様人あり海に浮んで波浪の起るに際會するあらんに一者は衣を脱ぎて裸體になりたゞ自身を救はんとの意を以て水に投せん視よ波に追はるゝ彼は己が生命を慮るの外何を以ても繋がれざれば波上に浮んで慘憺たる海より免るゝを得たりしかれども他者はその或衣服を助けんと欲して心に思ふやうもし自身と共にこれを取らばこれと共に浮んで海より免るゝを得んとされどその取りし衣服は彼を苦しめて海の深處に溺らせり視よ彼は小なる欲心の爲に己の生命を慮らずして亡びたり自己の自由により死の犠牲となりしを認むるかまた異種人來襲の風説傳播せりと想ふべし一者はこれを聞かや直ちに逃奔して少しも躊躇せず取る物も取り敢へずして途に出發せり然るに他者は敵の來るを信せず或は自身と共に或る物品を取らんと欲し此事に決意して逃るゝを延引せりされば視よ敵來りて彼を捉へ捕虜として異族人の地に曳き行きかしてに於て強て奴隸にせられたりこれ亦自己の自由にしたがひ犠牲の故により且は勇氣に乏しきにより又或物品を愛したるにより捕虜にせられたるを見るか

十二、主の誠命にしたがはず自から己を捨てず獨一の主を至愛せずして永遠の火の來らんと甘んじて浮世の械繫を以て己を縛る者もこれと同じかるべし彼等は捕虜となりし者の如く確言すれば善行の爲の罪人となりし者の如く世に於るの愛に沈溺し慘澹たる姦惡の海におぼれ異種人の捕虜となり即凶惡なる諸神の爲に捕へられて亡びんしかれども主に對する完全の愛の正しきを神の啓示に成れる聖書によりて知らんと欲せばイオフを見よ彼はたとへば凡て己れに有したる子女財産家畜諸僕及び其他の所有物を脱したること如何なるかまた彼はすべてを脱し奔りて己れを救ひ且その長下衣をさへ棄ててサマナに投げ與へ主の前に言を以ても誹謗を發せず心を以ても口を以ても不平を鳴さず却て主を讃揚していへり曰く主はわたへ主は取りたまふこと主の欲する如くなるべし主の名は讃揚らるべし「イオフの廿二人は彼を以て利を貪りし者と思ひきしかれども主の彼を試みるに及びイオフは獨一の主の外何も貪りしものゝあらざりしことあらはれたりアララムもこれに同じ主が彼に國を出で親族に別れ汝の家のを離れよ」創世記十二のこと命するや彼はたとへば生國土地親族父母をすべて直に脱して主の言にしたがへり其後彼は遭遇したる多くの試練と誘惑の中にあり

て或は妻をうばはれし時もあり或は他邦に侮辱を被ひりしときもありたれど此のすべての場合に於て獨一の神を殊に勝れて愛するを證せり終に多くの年所を経たる後曾て大に望みたる獨生の子を許約の如く最早己れに有したるに神は彼に要求するに此子を献祭するの備をなさんことを以てするやアウラアムは脱然としてこれを棄て實に自から己れをも棄てたりけだし獨生の子の此献祭を以て神の外他の何物をも愛さざりしを證せりされば彼はかくの如く準備して子を棄てしならば、まして其他の財産を棄て或はこれを一度に貧者に分たんことを命ぜらるゝも全くの準備と悉くの熱心とを以てこれを爲さん今は主に對して完全なる且は任意なる愛の正しきを見るか。

十三、かくの如くこれらの義人と同闘者たらんことを願ふ者は神の外何物をも愛すべからず試誘にかゝる時主に對する愛を完全に守る所の有用なる者且は熱練なる者としてあらはれんがためなりたゞ自己の自由にしたがひ獨一の神を常に愛して世のすべての愛より脱したる者は終に至るまで苦行を全うするを得ん。さりながら如此の愛を感得して世の悉くの快樂と欲望とより遠ざかり悪者の蜂起と試惑とを大量に忍耐する人のあらはるゝこと甚少なしこれ多くの者が河を

徒渉するとき水の爲に引去らるゝによるにあらすや即世のもろくの欲望と凶悪なる諸神の種々なる試誘とをみちみてる此の渾濁なる河を幸に越す者のあらざるによるに非ずや多くの大船の海に隠れて波に没するによるにあらすや即此の深潭を渡り波のまに／＼ゆきゆきて平安の港に達する者のあるなきが爲にあらずやこれによるに大なる信仰と大量と奮闘と忍耐と苦勞とすべての善に飢ゑ且渴すると敏速と不退と細心と善智とは常に要用なり勞もなく苦行もなく汗を流すこともなくして天國をうけんと欲する者甚多ししかれどもこれあたはざるなり。

十四、世に人あり富人の許に至り收穫の時又は他の有事の際に彼の爲に働きて己が糊口の爲に須要なるものをうけんと欲す然るに其中怠惰なる遊を好む者あり他の人々の如くに勞せず又當然に働かざるなりしかれども彼は富者の家に入りて己を勞せず又疲らさざるもすべての事を己に仕終へたる者の如くして他の忍耐と敏速とを以て力を盡して勞したる者等と等しく報酬をうけんと欲す我等も之と同様なり聖書を讀んで或は義人の事に至ればその如何に神を喜ばしめ如何に神の友又は會談者となりしかを見るべく或はすべて列祖の事に至ればその如

何に神の友となり又は同嗣者となりしを見るべく又艱難を幾許忍耐し神のため
 に幾許の苦をうけ剛勇なる行と若行とを幾許成遂げたるを見るあらんに其時彼
 等を尊崇讃美して彼等と同等の賜と價値とをうけんと欲し彼等の勞と苦行と憂
 愁艱難とはこれを束閣し彼等の光榮なる賜を得んことを好んで願ひ又彼等が神
 より受けたる名譽と尊貴とを獲んことを熱心に願へども彼等の疲憊と勞苦と苦
 行とはこれを己れに任はざるなりさりながら爾に告げん凡の人は此のすべてを
 願ひ且懇願す、姦淫者も税吏も不義なる人々も勞と苦行となしにかく容易に天國
 を得んを欲するなりされば誘惑と多くの試みと艱難と戦闘と汗を流すことの前
 途に横たはるあるはこれが爲にしてすべて自由なる意旨により全力を以て死に
 至るまで獨一の主を實に愛して主に對するかくの如きの愛により己の爲に他に
 何等の希ふ所のものも最早あらざることの顯然としてあらはれん爲なり此によ
 り彼等は主の言ふ如く己を捨て己の呼吸よりも獨一の主に至愛して實に天國に
 入らんゆゑにその高尚なる愛のために天の高尚なる賜を以て賞せらるべし、
 十五、許約と光榮と天の幸福の設備は憂愁と艱難と忍耐と信仰の中に隠る、こ
 とたとへば結果が地に投せられたる麥粒の中にかくるゝ如くなるべく或は傷つ

けられ又は屈められて或る方法に依り接がれたる樹の中にかくるゝ如くなるべ
 し時に衣服の美麗と光榮と百倍の果とを有する者のあらはるゝこと使徒の言ふ
 如くなるべし曰く我等は多くの艱難を歴て天國に入るべし「行實十四の廿二」また
 主もいひ給ふ「忍耐を以て汝等の靈を救へ」カカ二十一の十九また「世にありて
 汝等患難をうけん」イオアン十六の三十三「けだし勞苦と勉勵と儆醒と大なる注意
 と敏速と主に求むるに倦まざるを要するは我等地上の或る欲望より救はれ世
 の快樂と暴風雨の網と長網と凶惡なる諸神の蜂起を避くるを得んが爲又諸聖人
 が猶此世に於て信と愛の如何なる儆醒と如何なる猛烈とを以て天の寶を獲たる
 を實に知るを得んが爲なり即彼等の靈魂に於て天國の聘質となりたる靈神上の
 力を獲たるを知るを得んがためなりけだし福なる使徒パウロは此の天の寶なる
 神の恩寵を論じ又艱難の非常なるをわらはし併て人各々此世に於て尋ねべきも
 のと求めざるべからざるものとを示して左の如くいへり曰く「蓋我等知る我等の
 地上の幕屋やぶるゝ時は我等に神より賜ふ所の居所あり手にて造られざる屋永
 遠にして天に在る者なり」コリンフ後五の一。
 十六、故に人おのゝ奮闘し悉くの徳行に大に上達して彼の幕屋を得んことを

盡力すべく、且彼の幕屋は此世に於ても得らるべきを確信すべし。けだしもし我等の形體の幕屋が破るゝならば、我等が靈魂の居るべき他の幕屋は我等にあらざればなり。いふあり「第願くは衣たる後にも仍裸ならざらんことを」(同上三)と、これ言意は信誠なる靈魂が獨り安んじ居るべき聖神との體合一致を奪はれざらんことを願ふとなり。ゆゑにすべて實際に於ても、能力に於ても、ハリステアオンたる者は、此の肉體より出で、彼の「手」にて造られしに非ざる幕屋を有するを堅く希望して喜ばん。此の幕屋は是即彼等に居る神の能力をいふなり。さればもし形體的幕屋の破るゝ、あらんも、彼等は恐れざるべし。何となれば彼等は天上靈界の幕屋と彼の不朽なる光榮即復活の日に於て形體の幕屋をも造りてこれを表揚せんとするもの、有すること、使徒のいふ如くなればなり。曰く「ハリステスを死より復活せしめし者は我等の中に居る所の其神を以て我等の死すべき身をも生かさん」(ロマ八の十二) また言ふ「イエスの生命もわれらの死すべき肉體に顯れんためなり」(コリント後四の十二)「死の者は生命に吞まれんためなり」(五の四)。

十七、ゆゑに猶此世に於ても、信仰と道德の生活を以て彼の衣服を己れに求め得ることを努めん。形體に衣被したる我等が裸體にしてあらはれざらん爲なり。もし

裸體なる時は彼の日に於て我等が肉體を表揚すべきものは一もあらざらん。けだしおのゝ信仰と勉勵とにより、聖神に與かる者となるを賜はるの量にしたがひ、彼の日に於て其體も表揚せらるればなり。今日靈魂が内部の寶庫に集めたるものは彼の時身體の外にあらはれ出づること、たとへば樹の冬を過ぎて太陽と風の見えざる力が彼をあたゝむるや、枝葉花實を内より外に發生開放して、衣服を衣る如くならん。又此の時に於てもろくの野花も地の内部の懷より發生して、地と草とこれを以て衣被せらるゝ如くならん。主のいひ給へる百合花の如くならん。曰く「ソロモンも其榮華の極に於て其衣猶此花の一に及ばざらん」(マトフイ六の二十九) けだしこれ皆ハリステアオンが復活の日に於るの比喩となるべく、象徴肖似となるべし。

十八、かくの如く凡そ神を愛する靈魂の爲、即眞實なるハリステアオンの爲には第一の月たる「クサンフィク」あり、これ今の所謂四月にして、即復活の日なり。是の日に於て、義の太陽の力により、諸聖者の體に衣被せしむべき聖神の光榮は内部より引出されん。これ彼等が靈中に秘藏したる光榮なり。けだし今日靈魂が己れに有するものは、其時身體にあらはれん。我言ふ、此月は、即年の月の首にして、出埃及記十二の

二三彼は萬物に歡喜を齎すべく、彼は地を啓きて裸體なる樹に衣被せしむべく、彼はもろくの動物に歡喜をもたらしすべく、彼は衆人の間に和樂を播くべくして、彼は「ハリスチアア」の爲に第一の月たる「クサンフィク」なり、是即復活の時にして、彼の體は今日猶彼等の爲に秘密なる得もいはれざる光を以て、即神の能力を以て表揚せらるべくして、神は其時彼等の衣服飲食となり、喜樂平安となり、聖服となり、永遠の生命とならん、けだし今日彼等が己れに受くるを賜はりし神性の神は、其時彼等の爲に天の光明と、美麗の全飾とならんとす。

十九、ゆゑに我等各人は信じ且戦ひ、すべての關係に於て善良なる生活を爲すを盡力し、今も猶その靈魂の内部に天より能力を受けて、聖神の光榮を賜はらんことを希望と大なる忍耐とを以て待つは幾ばく肝要なるか、彼の時形體の破れし後、我等に衣せて我等を甦生せしむるものを有せんが爲なり、録して言ふ如し、「第一回は衣たる後にも仍裸ならざらんことを」また言ふ「我等の中に居る所の其神を以てわれらの死すべき體を生かさん」福なるモイセイは彼の面を蔽ふて一人も彼を見る能はざる神の光榮を以てわれらに象を示せり、これ即義人の復活に於て聖者の體の表揚せらるゝは、聖にして信なる者の靈魂が猶此世に於ても其内部に、即内部

の人に有するを賜はる所の光榮を以て表揚せらるべき所以を示せるなり、けだし言へり、「我等みな露はれたる面を以て、即内部の人を以て、主の光榮を觀て、其像に變せられ、光榮より光榮に進む」コリント後三の十八また録していへる如く、モイセイは「四十日四十夜餅をも食はず、水をも飲まざりき」出埃及記三十四の廿八しかれども、もし他の靈食をうけざりしならば、餅なくして、此次の時間存命することは身體の性の爲に、あたはざるべくして、聖者の靈魂は此の靈食を今猶見えずして、神よりうくるなり。

二十、ゆゑに福なるモイセイは眞實なる「ハリスチアア」が復活に於て神の如何なる光榮と如何なる心神の樂とを有せんとするを二の象を以て我等に示せり、此等の光榮と樂とは、今も猶秘密に賜はれども、彼の時には其體にもあらはれん、けだし先に既にいひし如く、諸聖人が今も猶靈魂に有する所の光榮を以て、その裸體は衣被せられて、天に取られん、さらば其時は最早體を以ても靈を以ても主と共に永く天國に安息せん、神はアダムを造りて、彼の爲に身體の羽翼を造ること鳥の如くし給はざりき、しかれども彼の爲に聖神の羽翼を備へ給へり、是即復活に於て神の欲する所に、彼を擧げ、彼を取らんが爲に、彼に與へんとする羽翼なり、此の羽翼は今

猶諸聖人の靈魂にこれを有するを賜はりて彼等は天の智慧に智を以て飛揚せんとす。けだし、ハリステアミンには他の世界と他の食と他の衣と他の樂と他の親與と他の思想の有様とあり、ゆゑに彼等は悉くの人類より勝れり。此のすべての能力を彼等は今も聖神によりてその靈魂の内部に受くるを賜はる。故に復活に於ては彼等の身體も彼の永遠なる靈界の幸福を賜はりて、その靈魂が今猶實驗を以て試みたる所の光榮にみちみたされん。

二十一、是故に我等各人は奮闘し、勉勵して、あらゆる徳行を懇に練習し、信じてこれを主に求めざるべからず、内部の人が今も猶彼の光榮に與かる者となりて、靈魂は彼の神の聖徳に親與するを得ん爲なり、又惡習の汚穢より潔まるを得て、復活したる我等の裸體が着て其醜さを蔽ひ、これを蘇生せしめて、永遠天國に安んせしむるものを我等復活に於て有せん爲なり、何となれば聖書に據るにハリステスは天より來りて、凡そ此世を去りたるアダムの諸族を復活せしめ、これを二部に分ちて、その自己の記號即神の印記を有する者を自己に屬する者となし、呼でこれを己の右に立たしめんとすればなり。けだし、我が羊はわが聲をきかん、イオアン十の二十七「我に屬する者を識り、我に屬する者も亦我を知る」同上十四「其時に彼等が體

は善行の爲に神聖なる光榮を衣被せられて、彼等自からも今猶心中に有する靈界の光榮にみちみたされん。かくの如く神聖なる光を以て頌揚せられて、天に取去られたる者は、録していへる如く「主を空中に迎へ、常に主と偕に居り」ラサロニカ前四の十七「彼と共に無限無疆の世に王たらん。アミン」。

第六 講話

神に悦ばれんと欲する者は、平安、沈黙、溫柔、及び睿智を以て祈禱を行ふべし、高聲に祈禱して衆人の誘惑とならざらん爲なり。此の講話には二問題を籠む、即寶座と榮冠は物質的製造なるか、イブライリの十二位とは如何なるものなるかとの二問題是なり。

一、主に就く者は沈黙と平和と大なる安靜とを以て祈禱をおこなひて、不適當なる且は錯亂したる高聲を發せず、心を碎くと、慳々たる思を以て主に注目せんとを要するなり。病に苦しむらんに、或者は腐蝕法又は他の手術を施さるゝや、大

に勇氣を勵まして起る所の痛みを耐へ、擾亂狼狽せずして己を制せん。しかれども他者は同じ痛みを受くるも、腐蝕法及び手術を施さるゝにあたり、不適當たる叫聲を發す。それ痛みは兩者の爲に一樣なるも、一は叫び一は叫ばず、一は擾亂するも、一は擾亂せず。かくの如く或者は憂心と痛苦の感とを有するも、その心意を制し、擾亂せずして、大量にこれを忍耐す。されど他者はおなじ憂心を有するも、忍耐し得ず、擾亂狼狽して祈禱をおこなひ、これによりて聞く者等誘はるゝなり。然るにまた他者は何等の痛苦をも感せずして、人に展示せんが爲め、又は氣儘により、不相應なる高聲を發し、これを以て神を悦ばすを得んと思ふ。

二、神の僕は如此の擾亂不整に居らずして、全くの温良と智慧とに居らんを要すること、預言者のいひし如し、曰く「我誰を顧みんや、唯謙遜靜默にして我が言に恐れをのゝくものを顧みるなり」イサイヤ六十六の二、またモイセイの時及びイリヤの時、神の現はるゝや、大衆は角と軍勢とを以て主宰の尊前に奉事せり、しかれども主の來るはこれと異にして、前文にかぞへしものを以て、即平和と沈黙と安靜とを以てあらはれ給ひしは、我等の知る所なり、けだしいふあり「視よ、靜なる細微なる聲ありて主はかしこに居り給ふ」列王記上十九の十二と、主の安息する所は平安と泰

整とにあることはこれを以て知らるべし。さりながら人は基を置き始を爲す所のものに終りに至る迄止まらん。もし高聲に擾亂を以て祈禱を行ふを始むるならば、終に至る迄此習慣を留めん、けだし主は人を愛するものなるが故、或る場合にはかかる人にも助をわらはすことあり。ゆゑに此の如き人々は恩寵の作用に屬せられ、終に至るまでその習慣に止まらん。しかれども知るべし、これは無智の行なるを、何となれば他人をも誘ひ、自分も擾亂に於て祈禱をおこなへばなり。

三、祈禱の眞實なる基は左の如し、即思に深く注意して大なる沈黙と和平とにより祈禱を行ふこと、是なり。傍に居る者等の誘はれざらんためなり。此の如き人は、もし神の恩寵と完全とを受くるならば、終に至る迄沈黙を以て祈禱をおこなふを得べくして、多くの人の徳を建つるに更に益するあらん、けだし神は亂の神に非ず、平安の神なり。コリント前十四の三十三、高聲を以て祈禱する者は舟子を御する者に似たるあり、彼等は聖堂にも、村里にも、何處にも祈禱する能はずして、たゞ彼等の爲に全く自由なる曠野に於てのみ祈禱するを得ん。しかれども沈黙を以て祈禱する者は何れの處に於ても、他の徳を建つるを得んこと、疑なし。人はその全力を擧げて、思に向はしむべく、惡念の爲に食物となるべきものはこれを截断して、意思を神に

注ぎ思の欲する所はこれを遂げしめず廻轉する所の思を處々方々より集中して一たらしめ天然の思を惡なる思より區別せんこと肝要なり罪下にある靈魂はこれを山上にある大なる林に譬ふべく或は河中にある蘆葦或は荆棘と雜木の叢生せる鬱林に譬ふべしゆゑに此場所を通過せんと欲する者は手を前に伸ばし盡力と勢とを以て其目前にある所の枝葉を押分けざるべからず反對の力を以て徐々と勤め入るゝ思の全林の靈魂を圍むもかくの如しゆゑに大なる勉勵と心の注意とは肝要なり反對の力を以て勤め入るゝ他の思を人の辨別せん爲なり。

四、人あり己の力に依頼し其目前にある所の山を自分にて切開かん欲すしかれども他者は安靜にして思慮を以て己の才智を御すゆゑに勢せずして其事を成就すること前者より速なりかくの如く祈禱に於ても或者は身の強健に任して思の奮ひ去らるゝを察せず自己の力を以て完全に事を成就せんと欲するものゝ如く不適當なる高聲に依頼す然れども他者は思に注意するありてすべての苦行を内部に於て行ふかくの如き者等は理解に於ても思慮に於ても大に上進し紛起する所の思を拒ぎて主の旨にしたがひ進行するを得ん使徒が他の徳を建つる者を大なる者と名づけしは我等の知る所なり曰く方言を言ふ者は己の徳を建て預言

する者は教會の徳を建つ預言する者は方言を言ふ者より勝るなり「コリント前十四の四五ゆゑにおのゝ他徳を建つるを重んずべし」さらば彼は天國を賜はらん。

五、問人あり説を爲していふ寶座と榮冠とは物質的製造にして靈神的本質には非ずといふ如何にこれを了解すべきか。

答、神性の寶座は即我等の智なりされど裡返してこれを言へば智の寶座は即神性と神なりしかれどもこれと同じく暗の力たり又君たるサタナも誠命を犯せし以來アダムは心の智と體とに坐すること自己の寶座に坐するが如しそれゆゑ終に主は來りて己の爲に體を處女より受け玉へり何となればもし彼は覆はざる神性を以て來らんと欲するならば誰かこれに堪ふるを得んこれに反して彼は此の器械を以て即體を以て間接に人と語りたまへり而して終に主は體中に坐する凶惡の諸神を位より黜け即彼等が統御する所の概念と思とより黜け良心を清めて智と思と體とを自己の爲に寶座となし給へり。

六、問、「十二の位に坐してイスラエルの十二支派を審判せん」イコリント十九の二十八といふ主の言は如何なる義か。

答、此言が主の天に昇り給ひし後、地上に應驗したることは我等の見る所なり、何となれば主は撫恤者たる神と聖なる能力を十二使徒に下し遣はし、其能力が降りて彼等を庇ひ、彼等の靈智の位に坐したればなり。されば前に立つ者等呼んで「彼等は甜き酒に酔ひなれり」「行實二の十五」といふや、其時ペトルはイエスの事に言及ぼして、已に彼等を審判するを始めたり、曰く「言と休徴とを以て有能なる人を汝等は木に懸けて釘せり、視よ彼は此處に奇跡をおこなひ、墓石を引離して死者を復活せしむ、けだし録していへり」末の日に於て我はわが神を以て凡の肉體に注ぎ、爾等の子女は預言せん「云々」行實二の十七、かくの如くして多くの者はペトルの爲に心を啓かれて悔改に進み、これにより神に選ばれたる新世界は始まりぬ。

七、審判の始の顯はれたるを見るべし。かしこには新世界現れたり、けだし坐して此世を審判する權をこゝに彼等にわたへられたり。主が來りて死者の復活する時、彼等は坐して審判を行ふこと無論なりといへども、こは此處にも行はるゝなり、何となれば聖神は彼等の靈智の位に坐するによる。然して「ハリステアモン」が彼の世に於て受くるところの榮冠も物體的製造にはあらざるなり。此説を主張する者は非なり。これに反して、變容する神は己を此に於てあらはさん、使徒パウロが天のイ

エルサリムに論及して「我等衆人の母なり」「ガラタイヤ四の二十六」といひしものは我等も承認す。また「ハリステアモン」が己れに衣んとする衣服に至ては父と子と聖神の名により神が自から彼等に世々に着せしむるものなること明なり。アミン。

第七 講話

ハリストス人に寛容なる事。此講話にも若干の問答を
含む。

一、想へよ、誰か王宮に入るあらば、かしこに書かれたる歴史及壯飾を見るべく、他處には陳列せられたる寶物を見ん。然して又他の處には他の物ありて、王と共に食卓に坐せんに、尤も美なる食と飲とは其前に陳ねられて、彼は觀る所を以ても飾る所を以ても充分に樂しまん。しかれども此の後彼を其處より強て曳去るあらば、彼は惡臭の滿つる所に導かれん。或は又想へよ、處女あり、美と賢と富とを以て衆人に抽んづるも、まづしくいやしうして、襪被を衣たる美ならざる人を己の夫に選定し、彼よりその不潔の衣を脱して、王の衣服を衣せ、彼に榮冠を加へて、その配偶となる。

あらば終に貧者は驚て言はん「不幸にしてまづしくいやしき辱しめられたる我は如何して如此の配偶をあたへられしや」と神も不幸にして辱しめられたる人と此の如く行爲し給へり。彼に他の世と他の最美なる食物を味ふをゆるし給へり。彼に光榮と王の言盡されざる天上の美とを示し給へり。されば人は彼の靈界の幸福を此世の幸福と既に比較したりければ其後王と有權者と智者とを見るありとも天の寶に注目して全くこれを棄てん何となれば神は愛にして人はハリストスの天に屬する神聖なる火を受け樂み且喜んでこれを慕へばなり。

二、問、サツナは空中に居るか或は人々に居りて神と共にするか、
答、それ此太陽は受造物にして汚穢の處を照すもそれが爲に害を受けずんば、ま

して神性はサツナの居る處に在らんも染まざるべく汚されざるべし。彼は人々の練習の爲に惡に存在をゆるしたまへり。しかれども惡は暗うして盲目なりゆゑに神性の清潔と精微とを見るあたはざるべし。さればもし誰か某所はサツナに屬し、某所は神に屬すといはば、これ神は惡者の居る場所を以て限らるゝと思ふなり。されど我等はいふ善なる者は限られず、圍まれず、萬物は彼により存在して善なる者は惡なる者のために汚されずと、何ぞや、これ天も太陽も山々も神により存在して神

の爲に成立つにより、彼等は自ら神によりて位せりとの義にあらすや、造物は自己の位に居らるれて萬有と共に居る所の造成者は是則神なり。

三、問、罪は光明なる天使に變化して殆んど恩寵に類するならば如何して人は惡魔の姦計を曉りこれを區別して恩寵よりする所のものをうるを得るか。

答、恩寵よりするものには喜あり、平安あり、愛あり、眞實あり、而して其眞實は自ら人を獎勵して眞實を尋ねしむるなり。しかれども罪の種類はすべて騷擾にみたられて神に對する愛と喜とあるなし。かくの如く蒲公英は蒿草に似たれども、一は苦く一は甘し。且恩寵には眞實に似たるものと眞實の本素とあり、例へば太陽の光線と太陽の圓體とある如し、光線は別にあらはれ、その圓體に含有する光は亦別にあらはるゝなり。又燈あり、家にかいやかんに、これより四方を照す所の光線は別に於て、その燈に於て更に燦爛として、かゝやく明亮なる光は亦別なり。かくの如くもし人は或る異象の如きものを遠く認めて、此異象により自から喜ぶときは、これ恩寵よりするものなり。しかれども神の能力が人に入りてその肢體とその心を圍み、その智を神の愛に捕ふるは亦別事なり。ペトルを執へて獄に投ずるや、其時幽閉せられたる彼に天使來り、其械繫を解きて、彼を獄より曳出せしに、ペトル喜びに堪へ

ざるもの、如く「異象を見るときは如何して陥るか。」

四、問、神の恩寵の感發興起せしめたる者は如何して陥るか。

答、天性最清潔なる思も失脚して陥ることあり。人はやうやく高慢するを始め、他を議して「汝は罪人なり」といひ、自から己を認めて義人と爲さん。パウルの言ふ所を知らざるか、曰く「我が肉體に一の刺は與へられたり、即サタナの使なり、我を撃たんため、我が高ぶらざらんためなり。」コリント後十二の七。清潔なる天性にも高慢の生ずべき理由あるなり。

五、問、人は光の助により己が靈魂を見るを得べきか、けだし或者は天啓を斥けて、現象は知識と感應の結果によりてこれありといへばなり。

答、感應あり、現象あり、又照明あり、而して照明を有する者は感應を有する者の上により、彼に於て智は照明せられたり、これ即彼は感應を有する者に對して或る特典を受けたるなり。けだし彼は現象の疑ふべからざるを己れに認識したればなり。しかれども大事と神の奧秘とを靈魂に啓示せらるゝは、これ他の天啓なり。

六、問、人は天啓と神の光の助によりて靈魂を見るべきか。

答、形體の目の太陽を見る如く、神の光に照されたる者も靈魂の状態を見んしか

れどもこれを見るに到達するは少數の「ハリステニン」なり。

七、問、靈魂は形像を有するか。

答、天使に似たる状態と形像とを有す。けだし天使は状態と形像とを有する如く、また外部の人は状態を有する如く、内部の人も天使に似たる状態と外部の人に似たる形像とを有するなり。

八、問、智は別物にして、靈魂はまた別物なるか。

答、身の肢は多くして、すべて一の人と名けらるゝ如く、靈魂にも多くの肢あり、即ち智と良心と、意旨と、或は賤め或は義とする思慮とあり、しかれども此のすべては一の思に結合せらるべく、此のすべてはたゞ靈魂の肢にして、靈魂は一なり、これ内部の人なり。さりながら外部の目が荆棘懸崖又は深淵を遠方より見る如く、智もその視力の敏捷により、反對の力の姦計と讒言とを預見し、且たとへば靈魂の目の如くにして、靈魂を豫防するなり。ゆゑに我等は光榮を父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第八 講話

「ハリステアニンは祈禱を行ふ時如何なるべきか完全の程度即ハリステアニンは完全なる程度に達し得べきか。」

一、人あり入りて膝を屈めん、其心は神聖なる勢能にみちみたされて、靈魂は主と偕にたのしむと、新郎の新婦と共にする如くなることあり、預言者イサイヤいへり、曰く「新郎の新婦を喜ぶ如く、主は汝をよるこびたまはん」イサイヤ六十二の五。また或時には終日何事をか爲し居りし者が一時己を祈禱に捧げんに、その内部の人は祈禱の狀態に於て大なる悦びと共に彼世の無限なる深きに奪ひ去らるゝことあり、けだし燃えて大悦する心は全くかしこに取去らるればなり、此の時に於ては地上の智慧を思忘るゝことあらん、何故なれば思は神聖なる天なる無限なる悟るべからざる、人間の口にていひ得ざる奇異なるものを以て飽かしめらるればなり、此時人は祈りていはん「ア、我が靈魂は祈禱と共に終るならば如何に幸なるか」と。

二、問、常に人は此狀態に入るを得べきか。

答、無論なり、恩寵は少年の時より不斷人と共に居り、根を張りて作用すること、醉の如くならん、されば此人と共に居る所のものは天性なる分つあたはざるもの、如くなるべく、人と同一體の如くなるべし、しかれども恩寵は其欲する如く人に於るの作用を種々に變化して、人の益をなすなり、或時には更に弱く更に靜になる如くなることあり、或時には此光は點火せられて、いよゝゝ光れども、或時には滅じて暗くなることあり、また此燈は常に燃え且照せ共、或時には更に燦然として明に神の愛に酔はしめらるゝにより更にいよゝゝ燃ゆることあり、されども又他時には其光耀を制限して發し、人と共に居る所の光が更に弱くなることありなり。

三、然のみならず十字架の現象は、或者には光の中にあらはれて、内部の人に釘せらるゝことあり、又或時には人は祈禱の時に當り、大悦の中にある如くなることあり、されば彼は聖堂に祭壇の前に立たんに、橄欖油と共に發酵したる如くなることあり、其前にそなへられて、これを味ふ程は其餅がいよゝゝ生長して脹起る如く思はるゝことあり、或時には亦或る光を發する衣服の如くにして、地上此世にあるなく、人手を以てそなふる能はざるもの、現はるゝことあり、けだし主がイオアンベト

川と共に山に登り、其容を變じて電光の如くならしめたる如く、此の衣服も亦其の如くならん。さればこれを衣せられたる人は驚きて何の故たるを解せざるなり。然れども、他時に於てはこの光は心中に現はれて、最内部なる最深奥秘密なる光を發せん。故に此の甘美と此の直覺とに全く呑まれたる人は最早己を主治せずして、その大に富める愛と甘美とにより、及び思議すべからざる奥秘によりて、此世の爲には愚者の如く、野蕃人の如くならん。けだし人は是の時自由を受けて、完全の程度に達し、純潔になりて罪より免るゝものとなるなり。さりながら此後恩寵は減少して、反對なる力の覆は下らん。されば恩寵は一分わらはるゝ如くして、完全の或る下級にあらんとす。

四、人はたとへば十二の階段を歴て、其後完全に達するを要するものゝ如し。或時は人實に此程度に達して、完全に到らん。其後恩寵は更に弱く作用するを始む。されば人は一段降りて、已に第十一の階段にあらん。しかれども他の恩寵に富める者は自由なる且は純潔なる者となりて、常に恩寵に捉へられ、又高められて常に日夜最高尚なる程度にあらん。されば今彼の奇跡をあらはされて、實地にこれを試みたる人は、もし彼と常にかくの如くならんには、傳道の職務の事も、他の如何なる責任も、

最早己れに負ふこと能はざるべく、自己の事及び明朝の事を平常の如く聽くことも慮ること肯せざるべく、たゞ一隅に坐して大悦すること恰も酩酊の中にある者の如くならん。ゆゑに防禦の柵の最早破壊せられて、死の大に勝たるゝに至らざる間は、兄弟を慮ると傳道の勤を慮るに専なるを得しめんが爲に、完全の程度は人に與へられざるなり。

五、されば實に左の如くなるべし。たとへば濃密なる空氣の如く、或暗黒なる力の掛りて容易く人をおほふ如くならん。燈は不斷に燃え且照らせども覆の掛りて、光をかくす如くなるべし。ゆゑに人は猶不完全にして、罪より全く自由を得たるにはあらざるを自認せん。ゆゑに防禦の柵は最早破られ、且毀たれしも、尙他の或物に於ては全く破られたるにあらす。又永遠に破られたるに非ずと謂ふべし。けだし恩寵が盛んに燃えて、人を慰め且安んせしむるの時あり、されどまた減少し暗くなりて、人を益せんが爲に恩寵が自から制限する如くなるの時あり。されば誰か暫時たりとも完全の程度に到達し、彼世を味へて實地にこれを試みたるものありや。今に至るまで余は完全なる或は自由なる、ハリスミアアコンを一人も未だ知らざるなり。反つてもし誰か恩寵に安んじ、奧義と啓示と大なる恩寵の甘美を覺ゆるまでに到り

達すといへども、罪も其者の内部に猶共に存するあり。かくの如き人々は恩寵と光とに大に富めるにより、己を以て自由なる者且は完全なる者と思ふ、しかれども無經驗の故に彼等に作用する恩寵其物の爲に自から欺かれて、此罪を犯すなり。されば余は今に至るまで一の自由なる人をも見ず、却て他時人が自から彼の程度に一分到達したるにより、完全なる人の無き所以を實驗して知るなり。

六、問 我等に告げよ、汝は如何なる階段を示さんとするか。

答、今や十字架の現象の後、恩寵作用して、悉くの肢體と心とを和げ、靈魂は大なる喜びにより無悪なる嬰兒の如くなるに至らん。故に人はエマリニ人をもイウヂヤ人をも罪人をも俗人をも最早議せずして、内部の人は清き眼を以て衆人を見るべく、全世界の爲によるこびて、エマリニ人をもイウヂヤ人をも敬ひ、且愛することを出来るだけ願はん。他時に於て彼即王の子は神の子に堅く依頼すること、父に依頼する如くならん。彼の前に門は開かれて、彼は多くの第宅の内に入るべく、其入るにしがひて彼の前に門は平均の數を以て新に開かるゝこと、譬へば百の第宅より他の百の第宅に入る如くして、彼は富まさるゝなり、而して其富まさるゝにしたがひ彼の爲に新なる奇跡はあらはるゝなり。子たり世嗣たる彼には人間の性を以て

言ひ得ざるもの、或は口舌を以て言顯すことの能はざるものを任されん、神に光榮は歸す。アミン。

第九 講話

神の約束と預言とは種々の試練と誘惑のときに應驗する事、及び獨一の神に服従する者は悪者の誘惑より救はるゝ事。

- 一、神の恩寵の靈魂における神的作用は人が大なる恒忍と智慧と智の神秘的看破とにより、多年の間大に忍耐して格闘するときに成らん。されば恩寵の行爲は人の自由なる意旨が多次の試練により、神に悦ばるゝものとなり、時を経ると共に實験と忍耐とをあらはす時に、最早人に於て完全なるものとみとめられん。此の秩序の明白なる鑑を我等は天啓の書によりてあらはさん。
- 二、我が認定せんとするものはイオシフの遭遇したるものと同じかるべし。彼に關する神意の決定は若干の時を歴幾多の年を過ぎし後に成就し、見たる所の夢は

應驗せり。然れども是より先イオシフは辛勞患難及び困乏によりて試みられしこと幾何なるか。然るに勇氣を以てすべてを忍耐し、すべてに練達して神に忠義なる僕と認められたる時に最早エキベトの王となりて、其親屬を養へり、されば見るあたはざるものに於ける預言も、またその久しき以前に大なる看破を以て預言したる神の旨も應驗して實となれり。

三、これに類したることはダワイドにもこれありき。神は預言者サムエルを以て彼に傳言して王となせり。しかれども彼が傳言せられし時はサウルの爲に窘逐せられ、逃走を以て死を免れざるべからざる時なりき。然らば神の傳言はいづくにありや。許約の速なる應驗は何處にありや。けだし傳言せらるゝや、直ちに曠野に避け、日用の食だもあらずして、彼に對するサウルの惡謀により逃走して異邦人等に救はれ、甚だしき艱難を嘗めたりき。されば神が傳言して王となしたる者は、如此の艱難に居れり。其後多年試みられ、且誘はれて、艱難をうけしも、大量にこれを忍耐し、斷然に信任し、自から己を保證して、神が預言者の傳言を以てわれに行ひて、是れ我に成らんといひしものは、必ず我に應驗すべし」といひしや、其時已に多くの恒忍の爲に神の旨は終に成り、多くの試練の後にダワイドは王となり、神の旨は其時顯然たる

ものとなりて、預言者の行ひし傳言は確實真正なるものとあらはれたりき。

四、又これに類したることはモイセイにもこれありき。神は彼を民の首長たると救者たるとに預知預定したりしにより、彼はファオンの女の子となり、王の宮と榮と華美の中に育成せられて、エキベトのあらゆる智慧を學ぶを得たり。しかれどもモイセイは壯年に及びて、信の大なるを致すや、使徒のいひし如く、暫時の罪惡の樂を享けんよりは、「エウレイ十一の二十七」專ハリストスの艱難と凌辱とを願て、すべて此を棄てたり。されば斯の如きの充足と王の榮華とに養はれたる此の王の子はエキベトより逃れて、幾多の年月を牧者の業に送れり。されど此後終に大なる恒忍の爲に、練達して神に忠義なるものとなり、多くの誘惑を忍耐したる彼は、イメライリの牧者となり、首長となり、王と爲りて、神より直ちにファオンの神と名づけられたり。出埃及記七の二に、けだし神は彼を以て埃及を膺ち、彼によりファオンに大なる奇跡を示して、終に埃及人を海に溺らせり。見るべし神の旨と神の企圖は幾多の年月を過ぎてあらはれ、幾多の試練と艱難との後に應驗したりしを。

五、これに類したることはアウラムにもこれありき。幾時か以前に神は彼に子を賜はんとすの許約を發したりしも、これを直ちに賜はらずして、これを賜ふに至る

迄はアウラアムに試練と誘惑の積さしこと幾年なるか、然るに彼はすべて遭遇したる所のものを大量に忍耐し、許約をあたへし者は、誰らずして其の言を履むべしとの意思により、信を以て己を固めたり、かくの如くなれば篤信なる者となりて許約を捉へたりき。

六、ノイもまた同様なりき、その生命の五百歳に至りし時、神は全世界の洪水を起さんことを告げて、方舟を作るを命じ、六百歳に於て洪水を起したりしが、其間に於て神は告げし所のものを爲し給ふべきか、或は爲さざらんかとの念慮の爲に少しも動かされず、神が告げしなれば、此事は必ず成らんと信を以て、断然己を固めて、大なる忍耐の中に百年を経過せり、さればかくの如く、誠命を最深く守りて、信と忍耐と、大量とにより、其の自由なる任意の練達なる者となりし時、彼は獨り其一家と共に救はれたり。

七、これらの諸例を聖書より引用するは、神の恩寵の作用の人には、わらはれて篤信なる靈魂に與へられんとする、聖神の賜を人のうくるは、たゞ長久なる戦闘の後にあるべく、大なる忍耐と大量とを試みる、實驗の後にあるべく、自由なる任意が種々なる患難を以てこゝろみらるゝ誘惑と試練との後にあるべきを、證せんが爲なり。

任意は何に於ても神を辱しめずして、恩寵により、誠命と全く融和するときは、情慾より免れて自由に達すべく、機密に於て言ひのべらるゝ、神の子となるの全きを受くるを賜はるべく、亦靈界の富と此世よりせずして一の眞實なる、ハリステアエンのみ領せんとする、通曉とを賜はらん、ゆゑにかくの如き人々は、凡そ世の神を己に有する善智なる博識なる、又は賢明なる人々に全く卓越するなり。

八、かくの如き者は、録して言ふ如く、コリント前二の十四、すべての人を度らん。彼は各人の事につきては、その何れの泉より言を取り、何處に止まり、如何なる階級にあるを知る、されど彼自身の事につきては、世の神を己れに有する人々の中、誰も知る能はず、又度る能はざるべし。たゞ彼と同じく、天に属する神の神を己れに有する者は、己れに同じき者を知るなり、使徒の言ふ如し、曰く、神に属する言を以て、神に属する事に當つるなり、靈に属する人は、神の神の事をうけず、其彼の爲に愚たるが故なり、然れども神に属する人は、度らざる所なし、而して己は何人にも度られず、コリント前二の十三、十四、十五、かくの如き人は、凡て世の稱賛するもの、即富と華美と諸の歡樂又は知識に至ても、すべて此世にある所のものを厭ふべく、嫌はしきものと思ふなり。

九、それ炎熱の中に居り、または熱病にかさるゝ人は、最甘美なる食、或は最甘美なる飲をあたへらるゝも、これを厭ふて、なげすてん、何となれば、熱は彼を燒きて、病は彼に甚熾なればなり、かくの如く、天に屬する聖なる、尊正なる靈界の望の爲に燃え、神の愛の熱心を以て感刺せられし者も、これと同じかるべし、主が地に投せんために來り、速に燃えんことを欲し給へる(ルカ十二の四十九)神聖なる天の火が彼等に熾に燃えて、ハリストスに對する天の服従を以て彼等を燒くときは、前文に述べたる如く、凡そ此世に於て稱賛して高く價値せらるゝものを輕んじて、嫌ふべきものと爲すなり、何となればハリストスの愛の火は神に従ふと天に屬する愛の幸福とを以て彼等をかこみて、これを燒き、且これを燃して、凡そ天上地下及び幽冥界にある如何なるものも、彼等を此愛より離す、あたはざらんことは、使徒パウルの證明したる如くなればなり、曰く「誰か我等をハリストスの愛より離さん」云々(ローマの卅五)。

十、さりながら己の靈魂を救ひ、天に屬する靈界の愛を求め得ることとは、もし人は此世にあるすべてのものより遠ざかりて、ハリストスの愛を尋ねるに己をさへくゝるにあらざれば、能はざるべく、又その才智はすべて物質的なる此世の樂みの外に

立つにあらざれば、能はざるべし、これ人をしてすべての誠命にしたがひ、唯一の目的に進行して、これに達するに全く従事するを得しめん爲なり、すべて靈魂の處る所と求むる所と樂む所と練習する所とは、靈神的實體を研究するにあらん爲なり、即誠命に於て命せられたる善行と、天に屬する神の美麗と、ハリストスの清潔及び聖徳に親與するを以て、靈魂の飾らるべき所以を研究せん爲なり、又人一切を捨て、すべて物質的なる地に屬する妨を自から截斷し、肉身上の愛、或は父母親戚に對する偏愛を絶ち、其智は他の何物にも占領せられ、或は牽引せらるゝをゆるさず、たとへば、權勢榮譽、尊敬及び世の肉身上的の交親、或は其他地に屬するいかなる掛念の爲にも、占領牽引せられずして、その智はすべて靈魂の靈神的實體を尋ねんが爲に配慮と憂愁とを全く己れに感受し、全く忍耐を以て神の臨格を待ち、且望むに専らなること、主のいひ給ひし如くならん爲なり、曰く「忍耐を以て汝等の靈を得よ」(コリント一の十九)また「いへり」神の國を求めよ、然らば此等の者皆汝等に加はらん」(トコイ六の三十三)。

十一、願くは此あらん、人の此の如く奮闘して、或は祈禱に於て、或は從順に於て、或は神によりて行はるゝ如何なる事に於ても、不斷己れに注意して、凶惡なる魔鬼の

暗黒を避くるを得ん爲なり、けだし不斷己れに深く注意して、主を尋ねるの者は己の靈魂を得ん、たとへ靈魂が慾の滅亡の中にありとも、もし主に向ふの美屬と熱心との爲に常に捕へられて、彼獨りに附くならば、救はるゝを得べし、いふあり、凡の意思を捨にして、ハリストスに從はしむ」とコリンフ後十の五、これ智が如此の苦行と願望と尋求との結果により、主と一神となりて、ハリストスの賜と恩寵とを賜はり、すべての善行におのれを準備するを得て、自己の嗜好と此世の娛樂を以ても、或は榮譽と權勢の爲の慮を以ても、或は自分勝手の見解を以ても、或は肉身の快樂と惡なる人々に親交親與するを以ても、主の神を愛へしめざる心靈の器中に安んずるを得んが爲なり。

十二、もし靈魂は己を全く主にさへげ、獨り彼に附き、其誠命を忘れずして守り、靈魂を尋ねてこれを庇蔭するハリストスの神を當然に尊んで、ハリストスと一神となり、一に融和して、一となるを賜はること使徒の言ふ如くならば、これは大に愛すべきなり、曰く「主に附く者は主と一神となる」コリンフ前六の十七、されども、誰か或は世慮に、或は榮譽に、或は好名に耽り、或は人爵の爲に奔勢し強てこれを求めて、その靈魂は浮世の思に擾亂せられて暗くなり、此世の何物にか耽りて、これに占領せ

らるゝならば、如此の靈魂はたとへ凶惡なる力が把持する所の慾の暗黒を渡らんと欲し、或はこれを避けて、これを己より放逐せんを願ふといへども、遂ぐるべし、さればざるべし、何となれば暗黒の旨を愛し、且これを行ひて、邪惡なる企を憎むこと全からざればなり。

十三、ゆゑに我等は全くの任意により、全くの志望を以て主に從ひて、ハリストスの徒となるに準備せん、ハリストスの旨を成さんが爲及びハリストスの悉くの誠命を記憶して、これを守らんが爲なり、世に對するの愛より全く遠ざかりて、其靈魂を獨一のハリストスに委ねん、彼獨りに注目し、彼獨りの爲に慮り、彼れ獨りを尋ねるの心を有せん、されども、我等は身體の故に、誠命を行ふと神に從ふとに當然の注意を用ひざるありとも、少くも我等が心は主に對するの愛より遠ざからざるべし、即彼を尋ねて、彼に向ふより遠ざからざるべし、さて斯の如きの智を以て奮闘し、思を正しくして、義の途を進行し、常に己れに注意して、ハリストスの神の許約を捉ふべく、又恩寵により、靈魂を占領する慾の暗中に亡ぶるより救はるべし、これにより我等は永遠の國に當るべきものとなり、父と子と聖神を永遠に讃揚して、世々ハリストスと共に福を受くるを賜はらん、アミン。

第十 講話

神の恩寵の賜は謙遜と熱心とを以て守られて増殖すべく、高慢と怠惰とにより失はるべし。

一、大なる望と信とを以てハリストスを全く衣んことを懇願する義を愛し神を愛する靈魂は餘事を想出すの必要は起るあらざるべくして、主に對する天の願と愛とに如何なる減退も己れに感せざるべし、かへつてハリストスの十字架に己を全く釘して、靈神界の新郎を愛慕する靈神上大なる進歩の感の日々に自覺せん、されば天の願の刺す所となりて道徳の義に渴し、靈神上の照明を強く且飽かずして懇願せんしかれども、其の信仰の爲に神聖なる奧義を識るの認識を賜はり、或は天の恩寵の樂みに與かる者とならん時も、何を以てか己を尊んで自から己に依頼せざるべし、かへつて靈神上の才能を賜はる程は、天の願の飽くなきにより、益努力してこれを尋ねべく、靈神上の大なる進歩を己れに感ずる程は、恩寵をうけてこれを増殖するにいよく、飢ゑ且渴きて、靈神上のいよく、富む程は、天の新郎に向ふ

靈神上の願の飽かざるにより、己の存意に於て殊に乏しきを感ずること聖書にいふ如くなるべし、曰く「わが食はしむる者は更に飢ゑわが飲ましむる者は更に渴かんとす」シララ二十四の廿三

二、主に對して燃ゆるがごとくなる飽かざる愛を己れに有する斯の如きの靈魂が永生をうくるは當然なるべし、ゆゑに彼等は慈より救はれて恩寵の充滿により、聖神の照明と親與と得もいはれざる奧妙なる體合とを完全に受けんしかれども、剛毅ならざる薄弱の靈魂は猶肉に居るが故に、此世において忍耐と大量とにより、心の一部成聖をうくるにはあらずして完全なる成聖をうけんことを盡力せず、また全くの感應と無疑とを以て撫恤者たる神と完全に體合せんことを希望せざるなり、されば彼等は有害なる慈より救はるゝを神よりうけずして、反つて神の恩寵を賜はりしも、惡のために誘はれて、或る不注意と不活動とに己を委ねたり。

三、けだし彼等は神の恩寵をうけ、安息と希望と靈神上の甘美とにより己の爲に恩寵の恩藉を見るも、これに依頼して、自から高慢し己の不注意に委して、心を苦しめず、思を遷らすして、無慾の完全なる域に達せず、すべての勉勵と信仰とにより、恩寵に全く充たされんが爲に、これを受けずして、それを以て自から満足し、安心して、

小なる恩寵の慰藉と共に止まるにより、如此の靈魂は謙遜に進歩せんよりも却て高慢に進歩して、たとへ或る賜を受けたりとも、その不注意なる怠慢の爲及びその自負心の徒らに高まるが爲にこれを奪はるゝなり。

四、眞に神を愛し、ハリストスを愛する靈魂は、義なる行を幾千成就したりとも、主に向ふ飽かざる志望により己を以て何も未だなさいるものゝ如く思ふべし、禁食と儆醒とを以て己の體を疲らしたりとも、徳行の爲に勞するを未だ始めざる如きの感情を以て存せん種々なる靈神上の才能或は啓示と天の奧義とに達するを賜はりたりとも、主に對する限りなき飽かざる愛により、自分に於ては何も未だ得ざる如く思ふべし、反つて日々に飢ゑ且渴き、信と愛とを以て常に祈禱に専らにして、恩寵の奧義とすべての徳行に己を建つるとに飽くあたはざるべし、彼は天の神の愛に感刺せられ、恩寵の助により天の新郎に向ふ燃ゆるが如くなる志望を不斷己に起すべく、彼と奧妙なる得もいはれざる親與を爲すを神の聖徳により全く賜はらんことを懇願すべく、靈魂の露はれたる面を以て、神妙なる得も言はれざる光により、天の新郎に對面して全く確實に彼と合一すべく、彼の死に擬すべく、大なる願望を以てハリストスの爲に不斷死を待つべく、罪と愆との暗黒より免るゝ完全なる

救を神によりて受けんことを疑なく信すべし、されば彼は神を以て清められ、靈に於ても體に於ても聖にせられて、天の聖音を己れに受くるが爲に清き器となり、天の眞實なる王ハリストスの第宅となるを賜はらん。さらば其時には彼は猶此世に於ても、聖神の清き住所となりて、天の生活をうくるに適當なるものとならん。

五、さりながら靈魂が如此の域に到り達するは、俄に試験なくして能くすべきにわらず、却て多くの勞と苦行とを以て、時の久しきに亘り、勉勵して試験と種々なる誘惑の後に於て、彼は神的成長と大なる進歩とをうけて、無愆の完全なる域に到り達するを得ん、其時は已に準備と勇氣とを以て罪よりするもろくの誘惑に堪ふるを得て、大なる尊敬と、靈神上の才能と、天の富とを賜はり、かくの如くして我等が主イエスマスハリストスにより天國を嗣ぐ者とならん、彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン。

第十一 講話

聖神の力は人心に於て火に似たる事、また心に生ずる

思念を區別するが爲に必要を有する者の事、モイセイが樹頭に釘してハリストスの象となせる死蛇の事。此講話には二の問答を含む、一はハリストスと悪なるサタナとの問答にして、一は罪人とサタナとの問答なり。

一、ハリステアニンが今も此世に於て己の心中内部に受くる所の天に属する神性の火は、彼等の心に働きつゝあるも、身體の破るゝときは、外部より働きて肢體を新に結合し、破れたる肢體の復活を成さしめん。イエルサリムに於て祭壇の勤を爲したる火は、捕虜時代には坑中に埋められたれど、平和成りて虜にせられし者等の復歸したるときは、その同き火は新にせられしものゝ如く、以前の如く勤をなせり、かくの如く今も天の火は、此の我等が近者の破れて泥に歸したる體を再造してこれを新にすべく、彼は腐敗したる體を復活せしめん。而して今日心中に居る内部の火は、彼の時は外部より働きて體の復活を成さしめん。

二、ナウホドノソルの時、爐中にありし火は神聖なるものにあらずして、物體の火なり。さりながら三人の童子は正義の爲に身は有形なる火中にありたれど、其心に

は天に属する神聖なる火を有したり、即思念に勤めて、彼等に作用したるものを有したりき。而して此火は童子等の外部にもあらはれたり、けだし彼等の中にありて、有形なる火が義人を燒きて、彼等を多少害せんとするを妨げたり。これに類したることはイズライリ人等にもありき、彼等の智と思が活神より遠ざかりて、偶像崇拜に歸せんとする意向を有するや、ア、ロンは已むを得ず、彼等に告げて、金器と裝飾とを持來らしめたりしに、其時火中に投せられたる金と器物とは偶像となりて、火は彼等の任意に倣ひしものゝ如くなりき。實に奇異なる事といふべし、けだし彼等は意向に於ても、又其思念に於ても、苟に偶像に事ふるに決心したるにより、火はまたこれに投せられたる器物を偶像に變じて、イズライリ人等は最早公然と偶像に拜しか、りぬゆゑに三人の童子が正義を念ひ、神の火を己れにうけて、眞實に主を拜したる如く、今も篤信なる靈魂は、猶此世に於ても、彼の神聖なる天の火を、苟に己れにうけん、さらば此の同じき火は人間に於て天の狀態を生せしめん。

三、火は金器に狀態をあたへて、金器は偶像となれり、かくの如く、主も篤信善良なる靈魂の任意に準じ、其望に従つて、今も猶靈魂に狀態を生せしめん、即復活に於て靈魂の外に現れて、その體を内外交々表揚せんとするものを生せしめん、さりながら

ら其體は現時において猶腐敗し死して易く敗壞する如く或者の思念もナノ爲に敗壞し生命の爲に死して泥土に葬ひらる何となればその靈魂は亡びたればなりゆゑにイヌライリ人が金器を火中に投じて其器は偶像となりし如く今も人は清潔にして至美しき思念を惡に委ねたれば其思念は罪の泥中に葬ひられて偶像となりぬされば今日人は如何してこれを搜索しこれを區別してこれを自己の火中より救出すべきかこゝに靈魂の爲に要用なるは神聖なる燈と此の暗まされたる家を大に整理する聖神なるべしまた心中に照りてこれを輝かす光明なる義の太陽も要用にして戰に於て勝を制する器械も要用なり。

四、彼處にルカ十五の八の金錢をうしなひたる寡婦は先づ燭を點し次で室の順序を立てたり而して室の順序立ちて燭の點されたる時塵埃と汚穢と土中に埋まりたる金錢は發見せられたり靈魂もかくの如く今は自己の思念を自から搜索して互にこれを區別するあたはざるなりさりながら神聖なる燈が燃えて暗まされたる室に光の入り來らんとときは靈魂はその思念の罪なる汚穢と泥中に葬ひられたるを認めん太陽の光り始むるや其時靈魂は自己の亡びを發見して塵埃ともろろの汚穢とに混じたる自己の思念を拾集するを始めん何となれば靈魂は誠命を

犯してその形狀をうしなひたればなり。

五、王あり財寶を有して屬下たる従者等勤功を希ひたりしに敵あり王を擒にして曳去れりと想ふべしその囚はれて曳去らるゝや其従者と餅の製造者とは王に従はざるべからずかくの如くアダムも神に奉事するが爲に神を以て純潔なる者に造られアダムに勤めしめんが爲に此造物をあたへ給へりけだし彼は立てゝ悉くの造物の主人又王とせられたりさりながら惡者が近づきて彼と言を交ふるやアダムは最初外部の耳を以てうけたりしも其後言はアダムに心中に透りて彼の本體を全く包圍せりかくの如く彼が囚はれし後彼に勤めて彼に服従する造物も最早彼と共に囚はれたり何となれば彼によりて死は悉くの靈魂に王となりたればなりさればその叛逆によりアダムの形狀を全く抹殺し人々をして變じて惡魔を崇拜するに至らしめたりけだし視よ神によりて至美しく造られたる地上の諸果も惡魔にさへげられ彼等の祭臺には餅葡萄酒及び膏及び動物を供へしめ且其の子女をさへ惡魔に獻祭するに至らしめたり。

六、ゆゑに身體と靈魂を自から造りし者は今日自から來りて惡者の爲に製造せられたる悉くの騷擾とすべて思念の中に行はるゝ惡魔の行爲とを破り天の狀態

を革新改造して新なる靈魂を造るは、これアダムの再び死に王となりて造物の主人とならん爲なり。モイセイは法律の影に於て、イスラエルの救者と名づけられたり、何となれば民を埃及より出したればなり。かくの如く今も眞の救贖者ハリストスは靈魂の奥底に來りて、これを暗黒なる埃及より、その重轡と苦役とより引出さんとす。ゆゑに我等世を脱し、すべての有形なるものに貧しくなり、浮世の事の慮を有せず、晝夜門の側に立ちて、閉せる心を主が啓きて聖神の賜をそゝぎ給ふ時を待たんことを我等に命じ給ふなり。

七、ゆゑに主は金銀と親戚とを棄て、財産を賣りて貧者に分與し、此を寶庫に藏めて、これを天に求めんことを命じたまへり、曰く「けだし汝の財の在る所には爾の心もあらん」マトフェイ六の二十二主はサウナの此により思念に權を執りて、これを物質的なる地に屬するの慮に引き入れんとするを知れり。ゆゑに神が汝の靈魂を慮りて、すべてを棄つるを命じたまひしは、汝をして餘儀なく天の富をたづねて、其心を神に向はしめん爲なり。けだし汝は造物に歸らんと欲すとも、何等の有形物も有せざるを知る時は、欲すると欲せざるとに拘はらず、強て其心を天に向はしむべく、すべてを聚めて寶庫に納めたる所に向はしむべければなり」けだし汝の財のある

所には汝の心もあればなり」。

八、律法に神はモイセイに銅蛇を作り、これを樹頭に上せて、これに釘するを命じ給ひしに、凡そ蛇に螫されたる者は銅蛇を見て愈をうけたりき。特別なる神の照覽によりて、此事の成れるは浮世の慮りと偶像崇拜とサウナの快樂ともろくの不法とに打勝たる者、が此形像の爲に鼓舞せられて、少しなりとも其眼を上へ、汚下にあるものより覺醒して、高上なるものに注意せん爲なり。且これより更にいよく、高上なるものに向はんが爲にして、かくの如くならば、漸々に高きもの上なるものに向ふて、一切の造物より極めて高き者のあるを認識せん。かくの如く神は汝にも自から貧しくなり、一切を賣りて貧者に分つべきを命じたまひしは、たとへば汝は下に地に投せんと欲するも、最早汝の爲に能はざらん爲なり。故に汝は己の心を訊問して、己の思と議するを始めよ、曰く「地に於て己れに何も有せざれば、天に向はん彼處には我等の爲に賣あり、彼處に於て我等は貿易を爲さん」然らば汝の智は始めて其眼を高きに舉げ、上にあるものを尋ねて、これに大に進歩せん。

九、樹頭に釘せられし死蛇が蛇に螫されたる者をいやしたるは如何なる義か。死蛇は生蛇に克てり、何となれば主の體の形像となりたればなり。けだし主はマリヤ

よりうけたる己の體を十字架に擧げ樹頭に引伸ばして、これに釘したりしが、其死せる體は生活し、心中に匍匐する蛇に克ちて、これを殺せり。これ大なる奇跡なり。如何して死蛇は生蛇を殺したるか。且モイセイは生蛇の形を作りて、新事を爲したる如く、主もマリヤにより新なる體を造りて、イニレミヤ三十一の二十二、これを衣たり、されどこれ天より體を持來りしには、あらざるなり。彼はアマムに入りて、天の精神を作り、神性を以てこれを鎔解し、人間の肉體を母の胎内に於て形作りて、これを衣たり。ゆゑに主はモイセイに至る迄世に銅蛇のあるを命じ給はざりし如く、主の來る迄は新しき無罪の體は世に現はれざりき。何となれば初のアマムが滅命を犯せし後、死は其の悉くの子孫に王となりたればなり。ゆゑに死せる體は生くる蛇に克てり。

十、それ此の奇跡は「イウヂヤ人の爲には、礙にして、エルリン人の爲には、愚なり」しかれども、使徒はこれを何といひしや。我等は十字架に釘せられし「イイススハリス」トスをつたふ、これ「イウヂヤ人の爲には、礙にして、エルリン人の爲には、愚なり」されども、我等救はるゝ者の爲には「ハリス」トスは神の能及び神の智慧なり。「コリン」前一の二十三、二十四といへり、何となれば死せる體に生命あればなり。こゝには救あ

り、こゝには光あり、こゝに主は死に來りて、彼と談じ、靈魂を地獄と死とより逐ふて、主に返還すべきを命じ給ふ。視よ、これが爲に狼狽したる死は、其僕に來りて、諸の力を集め、惡王は券を持來りて告げていはん、「視よ、此等は我が言に服従せり、視よ、人々は我等に如何に叩拜したるか」。しかれども、義なる審判者たる神は、こゝにも其義をあらはし、彼に告げていはん、「アマムは汝に服従して、汝は其心を全く占領し、人間は汝に服従せり。しかれども、茲に我が體は如何なるか。彼は罪なし。第一のアマムの體は汝の爲に負債者たり。ゆゑに汝は權利に依て彼の券を押ゆ。しかれども、我が爲には衆皆私の罪を犯さざりしを證す。汝に何の負ふ所もあるなし。衆皆我が爲に證して、我は神の子なりといふ。聲は天の高きより地に來りて證せり。曰く、「此は私の至愛の子なり。彼に聴け」マトフェイ十七の五。イオアンは證して「視よ、神の羔羊の罪を任ぶ者なり」といへり。イオアン一の二十九、聖書も亦同じくいへり、「彼は罪をおこなはず、其口に詭譎なかりき」ペトル前二の二十三、又いへり、「此世の君は來る。彼は我の中に有つ所なし」イオアン十四の三十、されどサマナよ、汝も自から我が爲に證していへり、「我爾の誰なるを知る、神の子なり」マルコ一の二十四、三の十一、又いへり、「ナザレトのイイススよ、我等と爾と何ぞ與らん、時未だ至らざる先に、爾我を苦めんために」

此に來りしか「マトフイ」の二十九と。我には三の證者あり一は天の高きより降遣せられたる聲なり、次は地上に存在する者なり、三は汝自からなり、ゆゑに我は第一のアダムが汝に賣りたる體を償ひ汝の券を廢毀す、我は釘せられて地獄に下りしを以てアダムの負を返還せり、ゆゑに地獄と暗と死よ、汝に命す、幽閉せるアダムの靈を放免せよ」とかくて惡なる力は戰慄して、終に幽閉せるアダムの十一、左りながら汝は彼の時主が靈魂を地獄と暗とより救ひ、地獄に降りて光榮なる事を成し給ひしを聞くや、此のすべてを以て汝の靈魂より遠きことと思ふなかれ、人は惡者を受けてこれを己に容るゝこと容易なり、何となれば死はアダムの靈魂を占領して、心の思は暗中に閉さるればなり、また墓の事を聞かんときたり有形の墓をのみ思ひに浮べざるべし、何となれば汝の爲に墓と墓穴は汝の心なればなり、かしこには惡王と其使と巢を作り、かしこには逕路の通ずるありて、サタナの力がこれに由りて汝の智と汝の思とを通り過ぐるときは、汝は地獄に非ずや、墓にあらすや、墓穴にあらすや、神の前に死者にあらすや、サタナはかしこに在りて未だ鍛鍊せられざる銀に己の印を押せり、此の苦き種子を靈魂に下して、彼處には舊き酵の發酵するあり、かしこには泥の泉の流るゝあり、ゆゑに主は彼の主を尋ぬる所

の靈魂に心の地獄の深きに來り、かしこに死に命じていはん「我を尋ぬれど汝が強てといめて幽閉せる靈魂を放免せよ」と而して彼は靈魂に横たはる所の重き石を毀ち、墓を開き、眞實の死者を甦し、幽閉せられたる靈魂を暗獄より曳出さん。

十二、人あり、械繫を以て手足を縛られんに、誰か來りて其鎖を解くならば、彼をして公然たる場所を自由に往來せしめん、かくの如く死の械繫に縛られたる靈魂をも主は其鎖を解きて、これを放ち、智を自由にし、神聖なる空氣の中を易しく且安んとして往來せしめん、又人あり、河水の滿々たるに際し、河の中心に於て水に溺れて窒息し、死者の如くなりて恐るべき猛獸の間に横はり居れりと想ふべし、されど游泳に未熟なる人は、水に陥りし者を救はん、と欲して、自分も窒息して亡びん、故にこゝに要用なるは、鍛鍊して游泳に巧なる者なるべし、彼は水の中心に深く入り、かしこに沈みて、猛獸の間に横はれる者を其處より携出さん、其時水は游泳を能くする鍛鍊なる人を見るや、自からも彼に助力して、彼を水面に出來らしむべし、かくの如く、靈魂も、暗黒の淵と死の深き處に沈みて呼吸をうばへ、恐るべき猛獸の間にありて神の爲に死者となりて居るなり、しかれども身體を造れる意匠者、其者の外誰か能く此の潜伏所と地獄と死の深き處とに下るを得るか、彼は二つの範圍に來ら

ん、即地獄の深きに来るべく、又靈魂が思と共に死の爲に占領せらるゝ心の深き懐に來りて、死者の如くなれるアマムを暗黒なる深き淵より引出さん。されば死も自から人に教へてこれに助くること、水の游泳者を助くる如くならん。

十三。死に降り、又心の深き懐に降りて、死者の如くなれるアマムを彼處より呼び出すは、神の爲に何の難きこと、これあらん。それ此の有形なる世には、人間の居るべき住所と家とあり、又野獸と獅子、或は蛇及び其他の有毒なる生物の住むべき住所あり。此によりて觀るに、もし彼の受造物たる太陽さへも窓により、或は戸によりて何處にも入るべく、獅子の窟にも入り、又爬蟲類の穴にも入りて、かしてより出て來らん。これが爲に害を受けずんば、まして萬物の主宰たる神は、死の居る處の巢窟、又は住所に入り、靈魂に入りて、アマムを其處より自由にするも、死の爲に辱をうけざるべし。雨も天より降りて、地下なる地層に透り、彼處に乾燥したる根を濕し、且新にして、かしてに新しき種類を生せん。

十四。人あり、サマナよりする戦争と患難とに於て彼と戦を交へんに、此戦に於てその靈魂が挫折せらるれば、彼は憂慮し、泣て涙を流さん。かくの如き者は己れに於て二の人格をあらはすものゝ如し。何ぞや、もし此の如きの戦闘に於て堅く立つならば、主は彼と與に戦に臨みて、彼を守らん。何となれば、彼は熱心に主を尋ね、門を叩きて、己の爲に主の開き給ふ時を待てばなり。しかれども亦兄弟あり、此戦闘に於て剛勇なる者としてあらはるゝならば、これ彼は恩寵を以て固めらるゝなり。これに反して誰か基を置かず、かくの如くなる敬神の心を有せずして、其心は悲嘆せず、戦兢々たらず、その心とその諸肢とを警固せずして、ほしいまゝに去來せしむるならば、彼の靈魂は猶此において亡ぼされたるなり。何となれば、いまだ格闘せざりしによる。故に、或者は戦争と患難の中に居れども、或者は戦の如何なるをさへ知らず。けだし種子も地に投せらるゝときは、霜と冬と嚴寒の爲に苦しまん。しかれども緊要の時に至りて芽を發するなり。

十五。されどもサマナは汝と心中に於て談判を開きて言はん。視よ、汝は幾ばく惡事をなし、か、視よ、汝の靈魂は如何なる狂暴にみちみたるゝか。汝は最早救はる能はざる程罪の軛を負はされたり」と。しかれどもかく言ふは、汝を絶望に陥れん爲なり。何となれば、汝の悔改は彼の悦ばざる所なればなり。けだし破滅によりて罪の入りしや、サマナは靈魂と日々談話すること、人の人と談話するが如し。ゆゑに汝も彼に答へて左の如くいふべし。我は聖書に於て主の明證を有す、いへらく罪人の

死を欲せず悔改して悪者の途より轉じて生きんことを欲すとイエセキリ三十三の十一にけだし彼は罪人を救ひ死者を復活し殺されし者を甦生し暗に居る者を光り輝すがために來りたればなり」とさればもし我等は其の始に善良なる終を與へ、貧しき旅行と患難とに居り不退にして門を叩き神に願ふを休めざらんには、主は實に來りて我等を子たる位置に聖なる平安の都に永く死せざる生命に不朽なる光榮に呼び給はん體の靈に近き如く主も我等に近しされば來りて閉されたる心の門を啓き我等に天の富を賜はんと欲す。彼は善にして人を愛する者なりゆゑに忍耐して終に至る迄彼を尋ねるならば彼の約束は誠らざるなり。光榮は父と子と聖神の宏恩に世々に歸すアミン。

第十二 講話

アダムが神誠を犯し以前之の情况及び其後彼は自己の形像をも天に屬する形像をもうしなひし事。此講話には最も有益なる問答若干を含有す。

一、アダムは誠命を犯して二様に亡びたりけだし第一彼は神の像と肖とによりて造られたる清く美はしき己の性の固有を失へり然して第二は許約によりて天の相續のすべてが成立つ眞の形像をうしなへり。たとへば王の肖像をしるしたる貨幣あらんにもし其縁を削るならば金も消亡すべく肖像も其貨幣に價を付せざらんかくの如くこれと同様の大事はアダムにも起れり。それ大なる富と大なる相續とは彼にそなへられたりきたとへば大なる村ありて許多の收入を有すと想ふべし。かしこには盛なる葡萄園あり、かしこには果實の豊饒なる田あり、かしこには群あり、かしこには金と銀とあらん。かくの如くアダムの此器も悖逆以前には高價なる村なりき。さりながらアダムがあしき意念と思想とを有するや、彼は神のためにはほろびたり。

二、人はすべてをうしなひ廢滅して死せりとはいはざらん。人は神の爲に死したれども、自己の天性にて活くるなり。けだし視よ全世界は運轉して地に在てはおの己の事に従事す。然れども神の眼は才智と思慮とに臨み、これを視るも認めざる如く、これと親與をなさざるべし。何となればかれらは神に喜ばるゝことを一も思考せざればなり。たとへば放蕩淫事の行はるゝ場所たる客舎又は淫家を想ふべ

し、敬虔なる者は、勿々に通り過ぎて汚さるゝを免るべく、彼等は見て見ず、此の場所は彼等の爲に死せるものゝ如くなるべし。かくのごとく神もその言と誠命とに背き離れたる者等を見るといへども、認めざるものゝ如く、かしこにありて親與をなさずして、主は彼等の思に止まらざらん。

三、問、人が變化し大に進歩して、先に有たざる知識と通曉とに到り達したるを特に己れに感ずる時は如何して神の貧しきものとなり得べきか。

答、人のこれを得ずして大に進歩せざる間は、人は未だ神の貧しきものとならずして、己を高く思はん。しかれども此の通曉と大なる進歩とに到達するときは、恩寵はみづから彼ををしへて、神のまづしきものとならしめん。さればたとへば義人たりとも、神の選者たりとも、何事の爲にも己を尊視せずして、己の靈魂を低價なるものとなし、いやしきものとなし、知り又は有するありといへども、何も知らず有せざるものと思ふべし。而してかくのごとき思想は、人智に賦與せられて根を張りしものゝ如くならん。我等が元祖アウラムを見ずや、神の選者となりしも、己を土及び灰と名づけたり。創世記十八の廿七、また傳言を受けて王とせられたるメソウドも神を其前に有して、何といひしや、唯我は蟲にして人にあらず、人の辱しむるところ、民の藐する所なり。聖詠廿一の七といへり。

四、ゆゑに彼等と同嗣者となり、天の都に於て同市民となり、彼等と同じく表揚せられんを願ふ者は、彼等と同じく謙遜を有し、己を以て何か價値あるものゝ如く思はずして、傷める心を有せざるべからざるなり。恩寵は各ハリストス・アモンに種々なる作用をなして、かれらを種々なる部員と爲すといへども、彼等は皆一の都に屬し、みな一心一舌にして、互に相了解するなり。たとへば身に肢は多くあれど、これを動作せしむる靈魂は衆人に於て一なり、かくの如く一の神は衆人に種々なる作用をなすといへども、皆一の都に屬し、一の途によりてゆかん。けだし悉くの義人は、窄く小なる路を進行し、患難を受け、窘透せられ辱められ、皮を衣て、巖穴と地窟に居りたりき。エウレイ十一の三十七、使徒等も同様己の事をいへり、曰く、今に至るまで我等は飢ゑ渴き、裸程になり、辱を忍び、定め居る處なし。コリント前四の十二、彼等の一は斬首せられ、次は十字架に釘せられ、其他は種々の患難をうけたりき。而して預言者及び使徒等の主宰も、自から神聖なる光榮を忘れたるものゝ如く、如何なる途を進行し給ひしか、彼はわれらの爲に標準となりて、罵詈雑言の中に刑冠を首に戴き、唾と耳を批つと十字架とを受けたまへり。

五、神は地に於て斯の如きの途を進行せしならば、汝も彼に倣ふものとならんこと肝要なり。使徒等も預言者等もかくの如く進行したりき、われらも主と使徒等の基上に建設せらるゝものとならんと欲せば、かれらに倣ふ者とならざるべからず。けだし使徒は聖神を以ていへり、「我に倣ひて我のハリストスにおける如くせよ」(コリント前四の十六)しかれども、もし汝は人間の榮を愛し、人々の汝に叩拜せんことを欲し、おのれの爲に安きを求むるならば、汝は途より離れたるなり。汝は釘せられし者と同じく釘せられ、苦を受けし者と共に苦を受け、然して後榮に入りし者と共に榮に入らんことを要す(ローマの十七)。けだし新婦は新郎と共に苦をうけ、これによりてハリストスの同伴となり、同嗣者とならんこと緊要なり。されば苦難もなく、又平坦ならずして窄く小なる途にも由らずして諸聖人の都に入り、安んじて王と共に限りなき世に王とならんことは何人にもゆるされざるなり。

六、問、けだしアダムは自己の形像も天の形像もうしなひしが、もし彼は天の形像に與かる者となりしならば、己れに聖神を有すること此より生すべきか。

答、アダムに神の言と誠命の存したる間は、彼は萬物を有したりき。けだし言はみづから彼の爲に相續となれり、言はかれの衣服となり、彼をおほふ榮となり、言は教

訓となりき。アダムは萬物に如何に命名すべきを暗示せられたり「或物を天と稱すべく、或物を日、或物を月、或物を地、或物を鳥、或物を獸、或物を樹と稱すべき」と暗示せられ、而して訓示せられし如く名を命じたりき。

七、問、アダムは神の感應と親與とを有したるか。

答、彼に居るところの言は自から彼のため、萬事となれり、知識ともなり、感應ともなり、相續ともなり、教訓ともなれり。さればイオアンは言に論及して、如何にいひしや「太初に言わり」イオアンの一といへり。見るべし言は萬事となれり、しかれども榮はアダムに外部にも存したりしも、これがために誘はれざるべし、けだし言ふあり「裸程にして」創世記二の廿五互に相知らざりきと、たゞ誠命を犯したる後に彼等は裸程なるを認めて愧ぢたり。

八、問、これによるに人は犯誠に至る迄は被覆に代へて神の榮を衣たるか。

答、神が預言者に感徹して彼等を教へ、その内部にありて、外部より彼等にあらはれし如く、アダムにも神は欲するときは彼と共に居りて、彼ををしへ、且暗に示して「是の如くいふべく又名づくべし」といひたりき。けだし言は彼の爲に萬事となれり。しかれども聖神にみてられし者等もおのれに天然の思慮を有して、これに同意す

るの自由を有するならば、アダムがかくの如きの場合にありて、誠命を犯したるは、何の怪しきことか。これあらん。かくの如くアダムは神と共に樂園に居りて自己の自由により、誠命を犯して悪者にしたがへり。さりながら、犯誠の後も彼は認識を有したりき。

九、問、しかれども彼はいかなる認識を有したるか。

答、強賊を裁判所にとらへて、裁判し始むるや、君主は彼を訊問して、「汝悪を爲すとき捕縛せられて死に付さるべきを知らざりしや」といはんに、強賊は知らざりきと言ふを敢てせざらん、何故なればこれ彼の明に知るところにして、刑に服する者はすべてを記憶し且認識すればなり。また姦淫者も悪を爲すを豈知らざらんや。盜賊も罪を犯すを豈知らざらんや。かくの如く人々は聖書なくしても、天然の常識に依り神あることを豈知らざらんや。彼の日に於て「神あることを我等知らざりき」と彼等はいふ。あたはざるべし。けだし天より大聲に電を以て彼等に報じて、「萬物を統治する神あることを汝は知らざるか」といへばなり。ゆゑに魔鬼等は如何に呼びたるか。「汝は神の子なり」とマルコ三の十二「時いまだ至らざるに先だち爾我等を苦しめんが爲に此に來りしか」とマテウイ八の廿九といへり。今も致命者の堂に於て彼等はい

は「燒く汝は我を燒く」と此によるに人類は善惡を認識するの樹のみは知らざりしをアダムの犯罪は彼等に此の認識をおたへたり。

十、すべての人は問はん、アダムは如何なる情況に居りて何をなしたるか。アダムは自から善と惡とを識るの認識を有せり。且彼は眞正と清潔とに居りしも、誠命を破りて地堂より逐はれ神の怒を己れに蒙りしことは我等聖書によりて知るなり。然のみならず彼は善なるものをも自から研究し又惡なるものをも研究して、更に罪ををかさいらんが爲及び死の審判におちいらざらんが爲に自から警戒す。されども神の一切の造物は神の照看の下にあることも我等は知るなり。神は天地生物、爬虫、野獸を造りて、我等はこれを見るときいへども、其數を知らず。けだし萬物の中に居り、且生物の胎兒の中にさへ居る所の獨一の神の外、此事は誰に知らるゝか。地の下又は天より上にあるものを知るは彼獨りにあらずや。

十一、ゆゑに我等は一切をすて、天の嗣業と我等が靈魂に益あるものを獲んことを力むること善良なる商賈の如くして、彼等よりも尙善くつとめん。我等に永く止まるべき所得を有することをまなばん。もし人は神の睿智を考究するを始めて「我は發見せり、或事を理會せり」といはん、これ人智を以て神の睿智より秀づる如く

思ふものにして迷の甚しきなり認識を以ていよく考究洞察せんと欲する程は、いよく深きに降り、一も理會する所わらざるべし且や汝に日々生出する出来事の爲めに汝に起る所の思想に關しても是れ亦汝は言ひ得ざるべく曉り得ざるべくして、たゞ此のすべてを感謝と信とを以てうくるのみならんけだし汝の生る日より今に至るまで汝は己の靈魂を認識するを得たるか實に朝より夕に至る迄汝に起るところの思慮を我に傳へよ三日の間に生ずる所の念頭をわれに告げよしかれども汝はこれを爲すを能くせざるべしそれ汝は己が靈魂の思念をさへ知了する能はずんばいかにして神の思慮と神の智とを悟るを得ん

十三、さりながら汝は獲るに循ひて餅を食ふべく、全地を棄つべく、河濱をゆくべく、要用なる程飲みて他に行くべし、河の何處より來り、或はいかに流るゝを搜索するなかれ、足と眼の病を療するを力めよ、太陽の光を見んためなり、太陽の幾ばく光を有し、或はいかなる表示を以て昇るを詮議するなかれ、使用の爲に汝にわたへらるゝものを取れ、何故山に行きてか、しこに野驢或は野獸のいくばく牧せらるゝを搜索するか、嬰兒は母の乳頭に近づくと、さば乳を嘗めてやしなはる、然れども乳が何處より斯程ゆたかに流れ來るか、その根原を考究する能はざるべし、彼は乳を吸

ふて、其所貯を全く盡さん、然れども時を経て乳頭は復びみちみたさるべし、乳が母の全體より出づるは最も著るることなりといへども、兒も其母もこれを知らざるなり、ゆゑにもし主を深きに尋ぬるならば、主はかしこに奇徴を行ひたまふを發見せん、もし主を坑にたづぬるならば、かしこにも主は義なるメニールを二獅子の間に保護したまふを發見せん、もし主を火中にたづぬるならば、かしこにも主はイリヤ及びモイセと共にするを見ん、主は處々方々何處にもあらざるなく、地下にも、天上にも、我等の中にも、到處にあらざるなし、かくの如く靈魂も汝に近し、彼は汝の内にもあり、また汝の外にもあり、いかなる遠き方位を望まむか、汝の智は彼處に在るべく、西を望まむか、東を望まむか、天を望まむか、彼はかしこに在らん

十三、されば主の記號と印象とをおのれに有することを力めん、何となれば審判の時にあたり神が區分を爲したまはんとするや、地の諸族は集められん、即全アブラハはあつめらるべくして、牧者が其群を呼ぶ時記號を己れに有する者は、皆己の牧者を認識すべく、牧者もその牧者に屬する印象を己れに有する者を認識して、かれらを盡くの民中より集めん、されば彼に屬する者は彼の聲をききて、其跡にしたが

はん世界は二部に分たるゝなり、一部は永遠の火におもひく暗黒の群にして、他は天の國に登せらるゝ光をみちみてる牧群なるべし、今日我等が靈魂に得たるところのものは、其時に光り始め、顯露して身體は榮をかうむらん。

十四、「クサンフィク」の月には土におははれたる根は、背芽を發し、花咲き且飾られて、實をむすばん、其時に善なる諸根は顯露し來るべくして、荆棘に屬するものも、顯露としてあらはるゝなり、かくの如く彼の日に於ても、すべての人は、自己の身體の助によりて爲したる善なるものをも、惡なるものをも示しあらはさん、けだし、かしこに一般の審判と報酬はおこなはるればなり、有形なる食の外に他の食あり、さればモイセイは山に登りしとき、四十日禁食せり、彼は人として登りたれど、神をおのれに有して降りぬ、それ身體は食物を以てかためられずば、數日の間に解體せんこと、は我等の知る所なり、さりながらモイセイは四十日禁食して、すべての人より更に有力なるものとして降り、何となれば、神にやしなはれて、其體は他の天の食を給せられたればなり、彼の爲に神の言は食物となりて、彼は面に光榮をあらはせり、さりながらモイセイにありし所のものは、只象のみなり、けだし彼の光榮は、今日は内部に「ハリスタアミン」の心に輝くなり、されば復活したる體は復活によりて他の神

聖なる衣服におははれて、天の食物を以てやしなはれん。

十五、問、女子が首を露はして祈禱するは如何なる義か(コリント前十一の五) 答、けだし使徒等の時にあたり、女子は帕に代へて髪を生したるにより、主も使徒等も人間に來りて、女子を清潔にするなり、さりながら女子はこゝに教會の象としてあらはさるゝなり、されば彼の時に於て女子は帕の代りに長生せる髪を有して、民にあらはれし如く、教會も其子に神聖なる表揚せられたる衣を服せしむるなり、且往古にも「イズライ」の教會には一の行堂ありて、神に覆はれたり、ゆゑに「イズラ」イリ人等はたとへ神にみちびかれずといへども、神を衣て光榮に昇へたり、此によるに教會といふ言は多くの靈魂のことをも、又一の靈魂のことをも言ふべし、けだし靈魂はみづからあらゆる思慮を一に集めて、神の前に教會を成す、何となれば、靈魂は天の新郎と親與するが爲に、彼と配合し、天に屬するものを以て融解せらるればなり、しかれども、これは多くの靈魂につきても、一の靈魂につきても、言ふを得ること、無論なるべし、けだし預言者も「イエルサリム」に論及して、我は汝を棄てられたるもの裸體にせられたるものと思ふ云々と、一の女子の事を論ずるものゝ如くいへばなり、「イエセキ」十六の八十三。

十六、問、マルファがマリヤのことを主につけて我は多く勞すれども彼は汝の側に坐すといひしは、いかなる義か。

答、マリヤがマルファに答ふべきところの者を主は先んじてマルファに答へり、即ちマリヤが一切を棄て主の足下に坐して、終日神を讚揚すといへるものは是なり。足下に坐する愛の最勝れたるを見るか。さりながら神の言のいよ／＼明亮に光りかゝやかんが爲に更にさくべし。誰か當然にイエスを愛して、勉めて彼に聴き且たに勉めて聴くのみならず、愛にとゞまるならば、神も此愛の爲に其靈魂に何をか報いんことを既に欲するなり。たとへ人が何をうけ、或は神がいかなる量で以て靈魂に賜ふを人は知らずといへども、けだし主を愛して其の足下に坐したるマリヤにも主はたゞに賞をあたへしのみならず己の實體より或る知るべからざる能力をあたへ賜へり。神が安和にしてマリヤに語りたる言は神なり、又或る能力なり。これら之言は心に入りて靈中の靈となり、神中の神となりて神聖なる能力は彼の心にもちみたり。何となればその能力は何處に止まるも、必然其處にとゞまりて、棄ふべからざる所得の如くなるべければなり。ゆゑに主も彼に何をたまひしを知りていへり。マリヤは善き分を擇べり。ルカ十の四十二「さりながらマルファが熱心により

て勤事したる所のものも漸々彼に歸して同じく亦彼の賜となれり。何となれば彼も其靈魂に神聖なる能力をうけたればなり。

十七、されば主に來りて親炙する所の者等か具體的に能力をうけたるも、何の怪しきことのこれあらん。或時には使徒等語りて聖神は信者等に降りたりき。行實十の四十四。コルコリイはさくところの言により能力をうけたり。殊に主がマリヤ或はザクヘイ或は髪を解きて主の足を拭ひたる淫婦。或はマリヤの婦人。或は盜賊と語りしときは、能力あらはれて、聖神は彼等の靈と合一になれり。今も主を愛し一切をすて、常に祈禱に止まる者は、知らざる所のものを、窃に學び得ん。眞實は自ら彼等の任意にしたがひ、彼等にあらはれて、かれらををしへん。曰く「我は眞實なり」イオアン十四の六。使徒等は自から十字架以前には主と共に居りて、瀕者のさよめられ、死者の復活したる如き大なる休徴を見たりしも、神聖なる能力の如何に心に止まりて作用を爲す所以を知らざりき。彼等自から神聖に更生し、天の靈と合一して新なる人間となる所以を知らざりき。彼等は主のおこなひ給ひし休徴のために主を愛せり。終に主は彼等につけていへり「何ぞ休徴に驚くか。我は汝等に全世界が有せざる大なる嗣業をあたへん」と。

第十三 講話

一五六

十八、主が死より復活せずして我等の爲に體を天にあげざりし間は、主の言は彼等のために猶奇怪なりしが、其時熱心者たる神はかれらに降りて、其靈魂と合一したりき。眞實は自から己を信者の靈魂にあらはして天の人は人なる汝に來りて、その間に合一の親與は成らん。ゆゑに信により神を愛するよりして勤を専にしずべてを熱心に行ふときは、これは漸々其者を導きて眞實其ものを認識せしめん。何となれば主は彼等の靈魂にあらはれて、聖神と共に居るに彼等を導けばなり。光榮と叩拜とは父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第十三 講話

神は「ハリステアニン」よりいかなる結果を要求するか。

神はすべての有形物を造り、これを人々にあたへて安んじ且樂しませしめたり。然れども亦義の法をもあたへたまへり。されば神は「ハリステア」の來りし時より他の結果と他の義と心の清潔と善なる良心と有益なる言論と眞正善良なる思慮及びすべて諸聖人が大に進歩する所のものを要求するなり。けだし主はいへり「若し汝等

の義は學士及び「フアリセイ」等の義に勝らずば爾等天國に入るを得ず」(マトワイ五の二十)律法に録していへり。淫を行ふなかれと、然れども我は汝等につぐ願ふなかれ、怒るなかれと。けだし神の友とならんと志す者は己を罪惡の汚れと我等が中に融くる所の永遠の火とより守らんことを要す。こは我等を天國をうくるに堪ふる者と爲すなり。光榮は彼の善心と父と子と聖神の最完備せる慈恵とに歸す。アミン。

第十四 講話

思と智とを神にさしぐる者は心の目を照されんと、望と神が此の如き者等を聖徳と大なる清潔とにより機密に進ましめて、これに其恩寵を分與し給はんことの望みにより此を爲す事、又或る天の幸福をうけんを願ふ所の我等は何を爲さん要する事、終に使徒及び預言者等は窓に入る太陽の光線に似たる事、且此講話

第十四 講話

一五七

はサタナの地と天使の地の如何なるものなるかを教ふ、即二者は觸るゝ能はざるもの、又見るべからざるものなることを教ふるなり。

一、凡そ世に於て見ゆる所の事は勞により益をうけんと望みによりて成る。さればもし誰か勞を以て樂を得るを全く確信するあらずんば、勞も彼の爲に無益なるべし、農夫も果を收めんと望みによりて耕し、これを期して勞を忍耐せん言ふあり、耕す者は望ありて耕すべし、コリンツ前九の十二、妻を娶る者も子を有たんと望みによりて娶る商賈も海上に出發し、死生の測る可らざるに己を委するは、利益の爲なり、天國に於てもかくの如し、人は心の目を照されんと望みにより、自ら己を委して浮世の事に遠ざかり、祈禱と願求とに時を送り、主の來りて己を彼にあらはし、その在る所の罪より清めんとする時を待つなり。

二、さりながら望むところのものをうけず、主も來らずして、その悉くの感觸と行爲とに神の在さ、いらん間は己の勞と生活とに依頼せざるべし、然れども彼は主の恩寵を味ひ、靈火を以て樂み、暗黒の被の取外されてハリストスの光が照らし始め、得もいはれざる喜びを感じる時は、自ら主を有して、大なる愛により保證せられんたとへば、かしこに利益を得たる商賈の如し、彼は自から喜ばん、然れどもこれと共に盜賊と悪神とよりする禍を憂ひ、且懼れん、天國と上なるイエルサリムに入るを賜はらざる間に弱りて、或る勞を減さ、いらんが爲なり。

三、ゆゑに我等も神に祈り、舊人を我等より脱して、今も猶我等に天のハリストスを衣せしむることを願はん、かくの如くして、主にみちびかるゝ者は喜で、大なる安靜に居らん、けだし主は我等が天國を充分に味へんことを欲していへり、爾等我なくしては何事をも行ふあたはず、イオアン十五の五、しかれども主は使徒等に由りても多くの者を教化したまへり、使徒等はみづから神の造物たるも、己と同様なる僕を教育しておの、ハリストスの兄弟となり、子となるを得しめ、他の人々の前に或る卓越なる事を成したり、即其心と其智とを聖にして、思を神に向はしめたり、さればかくの如く、神は奥密に生活と助力とを心にあたへて、これに自己をも委かし給ふなり、けだし人が其神秘なるもの、即智と思とを神に托して、他の何物にも占せられず、又引誘せられずして、全力を以て己を保つ時は、主は彼に聖徳と多くの清潔とにより、機密に就くを賜ひ、自己をも彼に與へて、天の食物となさしめ、及び神

的飲料となさしめんとす。

四、大なる財産を有する人あり、僕と子供とあらんに、僕には他の食物をあたへて、わが種子より生れたる己の子供には他の食物をあたふ、何故なれば小供は父を相續して、父と同様なれば、父と共に食するなり、かくの如くハリストス、眞實の主宰もみづから萬物をつくりて、悪者と恩を知らざる者等をもやしなふ、しかれども己の種子より生み己の恩寵を分ち與へて、主の自から形つくりたまひし子供は、これを他の人々に對して特に自己の安息と自己の食物と自己の飲料とを以てやしなひ、父と親與せんとする彼等に自己をも與ふること、主のいひ給ふ如し曰く「我が體を食ひ我が血を飲む者は我に居り、我も彼に居る」イオアン六の五十六、ゆゑに彼等は死を見ざらん、何となれば子として眞の相續權を有する者は、天の父より生れて、その父の家に居ること、主のいひ給ふごとくなればなり、奴隸は永く家に居らず、子は永く居るなり、イオアン八の三十五。

五、ゆゑにわれらも天の父より生るゝ者とならんと欲せば、特に他の人々に對して勉勵と盡力と熱心と愛と善なる行とをあらはし、信と畏れとに居らんを要すること、如此の幸福を得て神の相續者とならんを願ふ者の如くすべし、けだし「主は我

が副業と我が爵との分なり、聖詠十五の五、さればかくの如き場合に於て主は善なる任意と忍耐とを見、天の言を以て我等を清めて、死したる敗壞したる思を使徒の美なる生活と教とを以て甦し、且これを起して、其憐れを施したまはん。一の造物は他の造物をやしなひ、且これを甦すこと、たとへば麥又は大麥の苗の如し、彼等は命せらるゝや同じ造物なる雲雨及び太陽を以てやしなはれて甦生するなり、さりながら窓によりて入る光もあれども、太陽は全世界に光線をみなぎらす、かくの如く預言者はたゞ自己の家の爲、即イズライの爲のためにのみ光となりたれど、使徒等は世界全部に於てあらゆるものを照す所の太陽となれり。

六、四足動物の居る所の地あり、又鳥の來往し且居る所の地あり、空中にあり而してもし彼等は起たんと欲し、或は此地を來往せんと欲するときは、これを捕獲する所の獵師あり、又魚の爲にも地あり、海水是なり、而して各動物は或は地に、或は空氣に、何の處に生るゝも、其處に止まりて、食と安息とを有するなり、かくの如くサマナの地と國もこれありて、かしこには暗黒の力と惡なる諸神の居るありて、來往し且は休止す、又光を發する神性の地ありて、かしこには天使と聖なる諸神の隊は來往し且安息するなり、さて暗黒なる地は此の身體の目を以て見るを得ず、或は觸るゝ

あなたはさる如く光を發する神性の地も、肉眼を以て觸るゝことも見ることも能はざるなり、されども神的人々の爲にはサタナの暗黒の地も光を發する神性の地も其心中の目に見ゆるなり。

七、さりながら世の博識の傳ふる所によれば、火山あり、其中に火燃えて、かしこには羊に似たる動物の居るあり、然るにこれを捕獲せんが爲には鐵匠を作り、釣針を投じて火中に放下するなり、けだし此の動物の爲に食と飲と安息と成長と生命とを送りて一切に換ふるものは火なるにより、もしこれを他の空氣に引出すならば、彼等はほろびん、而して彼等が衣の汚さるゝときは、水に於てせず、火にて洗ふて、更に清く更に白くなるを致すといふ。かくの如く、ハリストスも己の爲に彼の天の火を以て食と爲す、火は彼等の爲に安息なり、火は洗ひ、且淨めて彼等の心を聖にし、火は彼等を成長せしめ、火は彼等の爲に空氣なり、又生命なり。もし彼處より出づるならば、彼等は惡なる諸神によりてほろびん、さればかしこの動物は火より出で、死する如く、又水より引出されたる魚の亡ぶる如く、海に投せられたる四足獸の窒息する如く、羽族の地にしたかひ來往して、捕者の手に獲らるゝ如く、かくの如く彼の地に止まらざる靈魂も絶息して亡びん、さればもし彼の神聖なる火を以て食

と飲と衣と心の清きと靈魂の成聖とに換へずんば、惡神の爲に捕へられて害されん。さればわれらも果して彼の見えざる地に種かれたるや、或は天の葡萄園に植ゑられたるや、否やを仔細に詮議せん。光榮は神の宏恩に歸す。アミン。

第十五 講話

此の講話にはいかんせば靈魂が成聖と無玷と清潔とを以て其新郎の前に、即ハリストスハリストスの前に居るべきかといふに關する詳細なる教旨を包含す、また或る最教訓となるべき若干の問題を含有す、例へば復活に於て盡くの肢體は起るかといふに關する問題、及び他の多くの問題、即惡の事、恩寵の事、自由なる任意の事、及び人間の價値に關する問題是なり。

一、富んで最高名なる王あり、不幸なる處女の身外一物もあらざるものに恩恵を

注ぎてその愛人となり納れて彼を新婦となし同居者となさんことを欲すさればもし彼は終に夫に對して親切をあらはすならば不幸にして一物も己に有せざる此のまづしき處女は夫が有する一切財産の女主人とならんされどもし本分と義務とに戻り行を爲し夫の家にて醜き舉動を爲すならば其時彼は不面目と汚辱とを以て逐はれ兩手を頭上に加へて出て行かんこと夫に順はざる不埒の妻をモイセイの法律にいへる如くなるべし復傳律令廿四の二其時最早彼は自己の無分別のために汚辱をかうひりていかなる富をうしなひいかなる名譽をうばれしかを思ひ苦しんで痛く泣かん。

二、天の新郎たるハリストスが奥妙神聖なる親與をなさしめんが爲に聘して新婦となして天の富を玩味せしむる靈魂もかくの如くなるべし彼は大に勉勵して其聘せられたるハリストスの意を眞實に悦ばし己れにまかせられたる神的勤務を適當當然に行ひてすべてに神意を悦ばし何を以ても神を辱かしめずしてハリストスに對する完全なる貞潔と愛とを緊要に守り天の王の家にて己を善く導きて賜はりたる恩寵に忠順ならんことを要するなり視よ如此の靈魂は立て、主の悉くの幸福の主人とせられてその身體もハリストスの神性より頌揚をうけん。

さりながらもし彼は何に於てか罪をおこなひその勤務に於ても本分に戻りて行爲しハリストスに悦ばるゝことをなさずしてその旨に従はず己れに存する所の恩寵の助成者とならずんば汚辱と共に耻づべき不名譽をかうひり生命より絶たれて天の王と親與を爲すに不似合なる且は無用なる者となるべしされば此の靈魂の爲には凡そ聖にして聰明なる諸神に於て最早悲哀と憂愁と哭泣の生ずるべく諸天使諸天軍使徒預言者致命者等は彼の爲に慨嘆せん。

三、主の言ふ所に據るに「天には一の悔改むる罪人の爲に喜あらん」ルカ十五の七といへりかくの如く永遠の生命より落ちたる一の靈魂の爲にも天に於ては大なる哀みと哭とあらんたとへば此世に富める人あり死するときは其兄弟親戚朋友知己は歌と涙と嘆息とを以て彼を此生涯より送らんかくの如く彼の靈魂の爲にも凡の聖者は涙と歌とを以て哭泣をなさんけだし聖書は他篇に於ても此事を了解せしむるなりいへらく「松樹と號べ柏香樹は踏れたりサハリヤ十一の二」イメライリは一見したる所主宰を喜ばしたる如くなるときは彼は決して當然に喜ばしたるにはあらずといへども彼をおほふ雲柱と彼を照す火柱とを有して其前に海の分るゝと清き水の石より流れ出づることを認めたりされどもイメライリ人の智

とその任意とが神より離れ背きしや、蛇と其敵に付され、重き虜として曳去られ、苦役を以て責められたり、かくの如く我等が靈魂も殆どこれに同じきものあるなり。神は預言者イエセキリによりてかくの如きの靈魂を奥密に示し、イエルサリムに論及して左の如くいへり、曰く、「我れ汝の野に於て赤體なるを見て、汝の不潔を水にて洗ひて衣服を汝に着せ、腕環を汝の手にはめ、汝の鼻には鼻環、汝の耳には耳環をほどこせり。されば汝は我が爲に諸國に高名になれり、麥粉と蜜と油とを食へり。然るに其後汝は我が恩を忘れ、汝の愛する者にしたがりて、姦淫をおこなへり。」(イセキリ十六の八十五)

四、恩寵によりて神を認識したる靈魂をも神はかくの如く勸諭せん。けだし靈魂は以前の罪より潔まるを得て、聖神の器を以てかざられ、神聖なる天の食物をうけたりしも、多くの認識に由り當然に己をみちびかず、天の新郎たるハリストスに對し當然なる深切と愛とを適當にまもらずして、棄てらるゝ者となり、曾てうけたる生命をうばはるればなり。何となればサタナはかくの如き恩寵の量を有する者に對しても傲然として自負すべく、又恩寵と能力とにより神を認識したる者に向つて兇惡は更に自負して彼等を蹴くるに盡力するによる。これにより我等は奮闘し

てあらゆる智慧を用ひ、謹んで己をみちびかさるべからず、録する所の如し、曰く「恐懼戰慄をもて己の救を成せ。」(フリッピ二の十二)ゆゑに凡てハリストスの神をうけたる汝等は、小なる事に於ても、大なる事に於ても、何に於ても、輕忽に舉動するなかれ、神の恩寵をはづかしむるなかれ、すでにうけたる生命を奪はれざらん爲なり。

五、また他の人物に於ても同じくこれを顯はさん、たとへば僕あり、王の室に入り、囑托せられたるものを進めて王に事ふるならば、これを王の家貨の中より取るべく、自らは何も携へずして入り、王の器物を以て王につとめん。さりながらこゝには最早分別と思慮とを多く要するあり、勤務の時に方りて、不適當の事を爲さざらん爲、又甲の食を乙に代へて王の卓上に出さず、すべての食物を始より終に至るまで順序によりて陳設せん爲なり。さればもし無智により、又は無分別によりて、王に事ふべき如くに事へずんば、危きと死とに服せん。かくの如く靈魂も恩寵により、又神によりて神に事へんには、大なる思慮と認識とを要するなり、神の器に關し、即神的勤務に關して、おのれの任意を恩寵と合致せしめ、何に於ても罪を犯さざらん爲なり。けだし靈魂は内部の人と自己の器とにより、即内部の人の神によりて、密に行はるゝ、神的勤務を以て主につかふるを得ん、然れども主の器なく、即恩寵なくしては、

誰も神につかふる能はざるべし即すべてに神の旨を行ひて神を悦ばすこと能はざるべし。

六、されば靈魂が恩寵をうくるときは彼の爲に多くの思慮と分別とは要用なり。神が自から此のすべてを願ふ所の靈魂にわたふるは受くる所の神を以て慈愍に神につかへて何に於ても惡に勝たれざるを得しめん爲なり又無智と無忌憚と怠慢とにより路を失ひ職分に對しても主宰の旨に戻りて罪を犯すを免るを得しめん爲なりけだしかくの如き靈魂の爲には罰として死と哀みとあらんこれが爲に聖なる使徒もいへり曰く「他人を教へて自から棄てらるゝ者とならざらん爲なり」
「コリント前九の廿七、神の使徒となりしも如何なる畏懼を有したりしを見るか故に神に祈禱せん、神の恩寵をうけたる我等皆特に神の旨にしたがひて、靈界の勤を奉じ、衆人を輕侮する思に慣染せざらんためなり、かくの如くなれば神の前に慈愍に目を消し、その旨にしたがひ神の勤務を以て神に仕へて、永生を嗣がん。
七、病に胃さるゝ者に於ても或る肢體は健全なり、例へば視る器械たる目或は他の或る肢體は健全なるが如し、しかれども外の肢體は傷はるゝなり、靈神上の事に關してもこれと同じさあり、或者には三の神的肢體は健全なるを有するを得べし、

然れどもこれによりて人はいまだ完全なるにわらず、靈神上の階級と程度は若干ありて各別なるを見るべし、然して惡は俄に深められて微々となるにわらざるなり、主の照管と攝理とはすべてにこれあり、太陽の昇りてわらゆる造物の造成せらるゝは彼選者等の嗣がんとする國の爲なり、平和にして同心一意なる國の組織せられん爲なり。

八、ゆるぎにハリステアモンはみづからすべての勉勵を用ひて何人をも全く穢せず、顯然たる淫婦をも、罪人をも、或は放肆なる人々をも、穢せずして、衆人を視るに純乎として偽らざる任意と清き目とを以てせんことを要するなり、人に接すること或る天然にして變らざるものに接する如くせん爲なり、即誰をもいやしめず、非難せず、誰をも嫌はずして、人々の間に差別を立てざらん爲なり、一眼の者を見るか己の心に彼を議するなかれ、彼を見ること健全なる者を見る如くせよ、枯れたる手を有する者を見ること枯れざる手を有する者を見る如くせよ、跛者を見ること正しく行く者を見る如くし、癱瘓者を見ること健全なるものを見る如くせよ、けだし心の清きは罪人或は劣弱者を見て、これに同情を表し、憐憫なる者となるにあり、されば主の諸聖人も世の觀場に坐して、世の誘惑物を見ることあり、さりながら外部の

人に於ては世に生ずる所のものの眼に映するに拘はらず、内部の人に於ては彼等は神と談話す。

九、世の人々は他の詭譎の鬼の勢力に屬して、地上の事を慮る、然れども、ハリステアアーンには他の自由なる任意と他の才智のあるあり、彼等は他の世と他の都會の人なり、けだし神の神止まりて、彼等の靈魂と親與す、されば彼等は敵を蹂躙するなり、けだし録していへるあり、最後にはろぼさるゝ敵は死なり、コリンフ前十五の廿六、されば敬虔なる者はあらゆる物に君たる如く、信の弱き者と罪人とはまつたく僕にして、火も彼等を焼くべく、石と劔もかれらを殺して、終に魔鬼は彼等に主人たらん。

十、問 復活に於ては悉くの肢體復活するか。

答 神にはすべて難きものあるなし、神の約束もかくの如し、たゞ人間の劣弱と人間の理性の爲に、此事はわたはざる如く見ゆるなり、神は塵と土とを取りて、或る他の性の如きものを造りたまへり、即土と相似ざる身體の性をつくり、又その性の多くの種類を造りたまへり、たとへば毛髮皮骨脈絡の類の如し、それ火に投せられたる針は如何様に變色し、化して火の如くになれども、鐵の性はほろぼされずして、同

しく存せん、かくの如く復活に於ても悉くの肢體は復活して、録する所の如く「首髮の一もほろびざらん」ルカ廿一の十八、而してすべては光の如きものとなるべく、すべては光と火の中に没して變化せん、然れども或者が主張する如く、從前の性の最早存在せざる程には解體せず、又火とならざるなり、けだしペトルはペトルパウエルはパウエル、フリップはフリップとして存し、おのゝ神にみちみてられて自己の性と實體とを以て存在するなり、然れども性の解體するを主張するならば、ペトル或はパウエルは既にあるなくして、すべてに何處にもあるものは神ならば、地獄に去る者も罰を感せざるべく、天國に行く者も恩恵を覺えざるべし。

十一、苑あり種々の豊盛なる樹を植ゑられ、かしこには梨子、林檎、及び葡萄は果實、枝葉と共にこれあらん、然るに苑もすべての樹も枝葉も變化して他の性質となり、すべて以前のもものは光の如くになれりと想ふべし、かくの如く人々も復活に於て變化して、其肢體は聖なるもの、光の如きものとならん、ゆゑに神の人々は己を戰と苦行とに準備せんこと肝要なり、勇氣なる青年は格闘を得支へて打たるゝ、打撃に酬ゆるに打撃を以てせん、かくの如く、ハリステアアーンも患難と外部と内部の戰を忍耐せんことを要す、おのれに打撃をうけて、忍耐を以て勝たん爲なり、ハリステス

教の行路はかくのごとし。聖神の居る所には窘逐と戦とあらんこと影の形にしたがふ如し。預言者等の如何なりしかを見よ。神は彼等に作用せりいとへども、彼等は常に同種族の爲に窘逐せられたり。路たり眞實たる主の如何なりしかを見よ。他民の爲に窘逐せられしに非ずして、己れに屬する民の爲に窘逐せられたり。己れに屬する族即イマヨイリ民は彼を窘逐して、十字架に釘せり。またこれと同様なることは使徒等にもこれありき。けだし十字架の時以來、憐愍者なる神の來りて、ハリスタアニンに居りたるにより、イウヂヤ人の中誰も窘逐せられざれど、一のハリスタアニンは致命者となりぬ。ゆゑに此事に驚くべからず。窘逐せらるゝものとなるは眞理の爲に必ず免れざるものとす。

十二、問 人ありいふ、惡は外より來ると。然らば人は欲するときは、これを己れにうけずして、逐去ることを得るか。

答 エツと語りし蛇は、エツが聽從したるにより、エツの靈に入りぬ、かくの如く、今も人の聽從するによりて、人の外部にある罪は人の内部に入らん。何となれば罪は心に入るの權と自由とを有するによる。けだし惡念は人の外部にあるにあらず、内部にありて、心より出づればなり。我望む男は怒なく、惡しき念なくして祈禱せんことを「テモフニ前二の八」けだし福音經によるに惡念は心より出づ（マトフニ十五の

十五）ゆゑに祈禱に着手せよ。己の心と智とに注意せよ。深き祈禱を神に捧げんことを願ふべし。特に汝は此時に於て祈禱に妨ぐるものあらざるか。祈禱は深きか。汝の智は主の爲に占領せらるゝこと。農夫が農事の爲夫が妻の爲商賈が貿易の爲に占領せらるゝ如くなるや否やを檢せよ。而して祈禱に己の膝を屈むるときは、他者あり汝の思をうばひさらざるや否やを檢せよ。

十三、さりながら汝はいはん、主は來りて十字架にて罪を罰したれば、人の内部には最早罪あらじと。然れどもこれと相反して、たとへば兵士は誰が家にか其車を置くあらば欲するにしたがひて此家に入り、又これより出づるの權を有する如く、罪も心中に於て語談する權を有するなり。けだし録していへり、サタナはイウヂヤの心に入れりとルカ廿二の三。然れどもハリスタスの來りしにより、罪は罰せられ、洗禮によりて惡は心中に於て語談する運命を最早己れに有せずといふといへども、主の來りしより今に至る迄、多くの者は洗禮をうけしも、或時には惡事を思ふを知らざるか。且彼等の中、或者は虚榮に、或者は淫行に、或者は娯樂に迷ひ入りしにあらずや。然して教會に居る所の俗人も盡く間然すべからざる清潔の心を有するか。或は

洗禮の後に多くの罪生じて、多くの者が罪をかすを見ざるか。此故に洗禮の後に
 も賊は入りて欲する所のことを爲し得る力を有するなり。録していへるあり。汝の
 心を盡してなんぢの主神を愛せよ。復傳律令六の五と。然るに汝はいはん。我は聖神
 を愛し且これを有すと。しかれども主を念ふの記憶と主に對する愛と熱心とは確
 に汝にこれあるか。汝は晝夜主を慕ふか。もしかくの如きの愛を有するならば汝は
 潔し。されどもしこれを有せずんば地に屬する憂慮と汚されたる悪しき念慮の生
 じ來らん時詮議せよ。實に汝はこれに傾かざるか。汝の靈魂は常に神の愛に引かれ
 て神に服従するかと。けだし世の思念は地に屬する敗壞せるものを以て心を浮か
 れしめて神を愛し或は主を記憶するをゆるさざればなり。無智なる人も祈禱に若
 手し膝を屈めて、その智は安息に入ること稀なりとせず。而して彼に反抗する所の
 悪の城壁を根本より覆して、その下底に深く入る程は、城壁はいよくやぶられて、
 人は現象と智慧とに到達せん。これ強者或は智者或は辨士等の到達し得ざるもの
 にて、此人の智の精微なるを彼等は曉り或は認識するあたはざるべし。けだし此人
 は神聖なる奥義に占有せらるゝなり。眞珠の品位を見分くるに不鍛錬なる者はそ
 の不鍛錬の故にこれを估價することも能はざるべし。ゆゑに「ハリスマノン」は地

上に於て光榮なりとするものを嫌ひ、これを以て彼等に作用する所の高尚なるも
 のに比して醜なりと爲すなり。

十四 問 人は恩寵の賜を有するも陥ることあるべきか。

答 もし漸く怠慢せばおちいらん。何となれば敵は決して無爲にして居らず。怠
 ずして作戦を講ずればなり。神の前に尋ぬることを汝はいよく厭すべからず。け
 だし汝は怠慢にふけるならば一見したる所恩寵の奥義を試みたるもの、如くな
 りといへども汝の爲に害多からん。

十五 問 人のおちいりし後恩寵は猶人に存するか。

答 人を新に生命にみちびきいるゝは神の欲する所にして神は人に新に泣いて悔
 い改めむことを勸ふるなり。ゆゑにもし人はこれを續行するならば神は以前の罪
 惡を悔ゆる者を勸誘し新に泣いて悔改の果を結ばしめん。

十六 問 完全なる者にも憂愁或は戦はるべきか。

答 敵が攻撃するを休めんとする人はあるなし。サナは殘忍にして人を憎む者
 故に如何なる人をも攻撃するに怠らざらん。しかれども一見したる所彼は衆人を
 襲ふに一樣の盡力を以てせざるもの、如し。それ耶國の長官或は理事は王に租稅

を貢せんしかれどもかくの如き人は己の富と金銀とに耽て依頼してさながら自己の有餘の中より年貢を納るもの、如くなるべくこれを以て己の爲に損毛と思はざること施與を出す者の少しもこれを以て損毛と思はざる如くなるべし。かくの如くサツナも此を以て餘事の如く思ふなり。或者は赤貧にして日用の糧をおのれに有せざるに、かれを鞭ち且苦しめん。租税を完済するあたはざるによる。又或者をば残酷に惱まし且苦めん。されど彼は死せざらん。又他者をば一言の下に斬首するを命じて、彼は亡びん。かくの如く、ハリステアエソンの間にも、或者は烈しき戦を受け、罪の爲に惱まざる。されども反對の力をかろんじ戦によりて強くなり且智慧を増さん。されば此の關係に於ては彼等の爲に危きことあらじ。何となれば勳播せられずして己の救に堅く信を置けばなり。けだし惡との戦により頻りに己を練習し、實驗を有せしにより、神は自から彼等と共にすればなり。彼等は神にみちびかれて安んせしめらるゝなり。

十七、しかれども或者はいまだ練習せずして、もしたゞ一の患難が落ち來り、彼に對して戦の起るあらば、直ちに不幸に陥りて亡びん。たとへば其の愛する所の者又は知る所の者を見んと欲して市を行く者あらんに、市場に於て多くの人々に遇ふ

といへども、彼等の爲に引留められず、何となれば朋友に面會せんとの意志を存するによる。而して外より門を叩きて其名を呼ぶや、愛する所の者は彼の爲に喜んで開かん。しかれどももし市場に足を止めて笑談し、或は遇ふ所の者に引留めらるゝならば、門は依然として閉ざれて、誰も彼の爲に開かざらん。かくの如く眞に愛する所の我等が主宰ハリストスに至らんことを急ぐ者も、餘事を全く輕んじ且いやしめんこと肝要なり。たとへば王宮に參内する郡國の理事、或は長官等は王に答をなすべきこと、答を誤りて譴と罰とに服せんことを恐れて、大に戦々兢兢たらん。しかれども未だ曾て君主を見たることなき田夫野人は、懸念せず己を行はん。かくの如く凡そ此の普天の下にある世界も王より貧者に至るまで、皆ハリストスの光榮を認識せず。浮世の事に營々として、審判の日の事を疾く想出す者あるなし。然れどもハリストスの寶坐のあるハリストスの審判所に思入て、常にハリストスの前に立つ所の者は、彼の聖なる誠命に對し、何に於てか罪を犯さざらんかと、不斷に恐懼戦慄するなり。

十八、世の金満家は、所産を其倉に多く積むときは、いよくこれを豊にして、乏しきを告げざらしめんが爲に、更にいよく毎日働くことを新に始めん。されども倉

に在る所の富を頼にして、緩慢し新なるものを加へずして、積む所のものを費すときは、速に不幸と赤貧とに陥らん。ゆゑに彼等は利益をわづめて倉に納むるも、乏しきに至らざらしめんが爲に、勞して新に聚めんこと肝要なり。ハリストス教に於ても、人は神の恩寵をかくの如く味ふを得べし。けだし「味へよ、主のいかに仁慈なるを見ん」聖詠三十三の九、しかれどもこれを玩味するは心中に勤を成さしむる神の有能の力なること疑なし。けだし光の子として、聖神により新約に勤むる者は、神に教へらるゝ者として、人々よりは何も教へられざるべし。恩寵は自から神の法を彼等の心に書さん。ゆゑに彼等は己の爲に保證を見るにたゞ墨汁を以てしるされたる聖書に於てすべきに非ずして、神の恩寵は神の法と天の奧義とを心の石版に書さん。何となれば心は全體の聯絡に於て主人たり。又王たればなり。されば恩寵が心の牧野を領するときは、すべての肢體と思慮とに王たらん。けだし智とすべての思慮と靈魂の希望とは、彼處にあればなり。ゆゑに恩寵は身の悉くの肢體に透徹するなり。

十九、これと相反して暗の子たる者に於ても此の如く、罪は心に王となりて悉くの部分に透徹するなり。曰く「惡念は心より出づ」マテウイ十五の十九、かくの如く、罪

は汨濫して人を暗まさん。然るに人と共に養はれて共に成長する惡は人にあるなし。と主張する者等は明日の事を慮らざるべく、又欲望を有せざるべし。或る時には惡は何の欲望をか徐々とするゝにより、彼等を驚かすことは息まん。故に人は誓を以て斷定して「かくの如きの情慾は最早我に起らず」といふ、しかれども數時間を過ぎて、彼は欲望に燃ゆるのみならず、且更に誓を破る者としてあらはれん。水の管中を流るゝ如く、罪も心と思念の中をながるゝなり。されば此説を主張する者等は、罪が彼等に捷ちて凱旋するとき、其罪の爲に證實せられ、且嘲けられん。何となれば惡は人の意思に潜まり匿るればなり。

二十、ゆゑにもし誰か神を愛するならば、神も彼に己の愛をわたへ給ふ。一たび神を確信したる者にはこれに天の信仰を添へん。されば人は二倍なる者となるなり。ゆゑに汝が己の肢體によりて禮物を彼にさゝぐる如く、彼もこれと同じく、自己の肢體によりて汝の靈魂に分ち與へ汝をしてすべてを潔く爲し、且愛し、且祈禱せしむるなり。けだし人の價値は高尚なり。視よ天と地と日と月は如何なるか、然るに主は彼等に安んじ止まらずして、たゞ人に安んじ止まり給ふ。故に人は悉くの造物より貴し、且我敢ていはん、たゞに見ゆる造物より貴さのみならず、見えざる造物より

即奉事の諸神よりも貴し。けだし神は首天使ミハイル及びガウリイルのことを「我等の像と肖によりて造れり」創世記一の廿六といはずして、聰明なる人間の本質即不死なる靈魂のこととかく言ひたまへばなり。録していへるあり、天使の隊は彼を畏るゝ者を環る聖詠三十三の八「然れども見ゆる萬物は或る不動不變なる性を以て縛らるゝなり」。

二十一、天と日と月と地は一たび構造せられて、主は彼等を憐みたまはざりき。反てかれらは其の造られたる状態より脱するあたはずして、自由を有せざるなり。然れども、汝は神の像と肖によりてつくられたり、何となれば神は自由なる者にして、欲するところを行ふ如くもし、彼は欲するならば己の權により、義人を地獄に罪人を天國につかはすこととをもなさん、されどもこれを擇び給はず、又これに同意せず、けだし神は義なるものなればなり、汝も自由なる者なり、ゆゑにもし亡びんことを欲するならば、汝の天性はたやすく變せられん、もし悪言を吐き、毒を制し、人を殺さんと欲するならば、誰も汝にさからはざるべく、又禁せざるべし、欲する者は神に従順し、義の途をゆきて、欲望を制せん、何となれば智は敵抗する者なり、ゆゑに堅き思念を以て邪惡なる意向と醜き欲望とに大に勝つを得ればなり。

廿二、大厦あり、かしこの壁と頂格とは金銀を以ておははれ、かしこには種々の衣服及び金銀あらんに、其居る所の諸僕諸婢は我等が天性は其存する所の罪により、凡てを渴望すといへども、其才智を制し、主人の前にありて人を畏るゝの畏れにより、慾の發するをとゝむるならば、矧んや神をおそるゝ畏のあるところに於ては、才智は人に存する所の惡に敵對抵抗せんことを要す、何となれば神は汝の爲に能ふべきものを汝に誠命したればなり、それ無言なる動物の天性は束縛せらるゝ例へば、蛇は天性惡にして有毒なり、ゆゑに悉くの蛇は此の如し、狼は掠奪を爲すに慣れて、悉くの狼は其性同じ、羊仔は質朴の故に掠奪せらるゝ、而して彼等は皆同性なり、鳩は狡猾ならずして無惡なり、悉くの鳩は其性同じ、しかれども人は然らざるなり、一は狡猾なる狼の如くなれども、他は奪取せらるゝこと、羊仔の如し、而して兩つながら同一の人間より出づるなり。

廿三、或者は自己の妻に満足せずして、放蕩に生活す、しかれども他者は其心に慾の萌すことをさへゆるさず、一は人の家財を掠奪すれども、他は敬虔によりて自己の所有をも分ち與ふ、同一の性の變化し易くして、或は惡なるものに傾き、或はこれに反して美なるものにかたむき、彼と此との結果によりて、欲する所の事に許諾す

る能力を有するを見ん。故に我等が天性は善の爲にも悪の爲にも神の恩寵の爲にも反對の力の爲にも、これをうくるに便なるものとす。さりながら天性は強らるゝこと能はざるなり。アダムは最初自から清潔に存在して、己の思念を主治したり、しかれども誠命をやぶるや、彼の智に荷ひ易からざる苦みは掛りて、これに混入し來れる邪惡なる思念は盡く彼の固有なるもの、如くなれり。さりながら一も彼の固有なるものにあらず、何となれば彼等は惡習の爲めに支持せらるゝものなるによる。

廿四、終に燈を捜し求めんことは、汝に肝要なり、これを以て清潔なる思念を見出さん。がためなり。何となれば彼の思念は汝に天然なるものにして、主はこれを清潔に造りたればなり。海濱に成長したる者は、游泳するを學ぶゆゑに暴風怒濤の起るときにも驚かざるなり、ハリストス・アーンもかくの如し。三歳の童子の智慧は成せぬ、詭辨者の思想を容れ、或は曉ること能はざらん。何となれば彼等が年齢は大に懸隔すればなり、かくの如く、ハリストス・アーンも哺乳の兒の如く、恩寵の量にしたがひて世を了解せん。彼等は此世の爲に遠ざかり、彼等には他の都と他の慰安とあり。ハリストス・アーンは神の恩寵と涙と哀みと嘆息をおのれに有して、其涙は彼等のため

に樂みを成す。彼等は喜び樂みと共に畏れをも有す、かくの如くなれば彼等はおのれの血を自分に保護する人に似たり、自から己を頼まず、己を以て何か價値あるものと思はず、悉くの人に賤しめ棄てられし者の如く、己を行ふなり。

廿五、王あり己の寶を以て或る貧者に托せんに、受けてこれを保護する者は此寶を己の所有と思はず、何處にも己の貧なるを認めて、他人の寶をつひやすを取てせざらん。何となれば彼はつねに自から思へり、「此寶はたわが有にあらざるのみならず、有力なる王を以て我に托せられたり、されば彼は欲するときはこれを我よりとらん」と。神の恩寵を有する者も己を彼と同じく思ひ謙遜なる者となりて己の貧しきを表認せざるべからず。もし貧者は王より托せられたる寶をうけて、此の他人の寶に依頼し、これを以て漸く高ぶること自己の富の如くして、其心に高慢をみちみてるならば、王は其寶を彼よりとりかへさん。然らば保護の爲にこれを有せしものは以前の如くなる貧者とならん。かくの如く恩寵を有する者も高慢して其心に自負するならば、主は恩寵を彼よりうばふて、彼は主より恩寵をうくる以前の如きものとならん。

廿六、さりながら恩寵が己に存するあるも、罪のために奪み去らるゝを知らざる

者多し。たとへば何の家にかうら若き男子と若き女子と居るあらんに、女子は男子にいざなはれ終に彼と同意して姦通せば賤しむべき者とならん。かくの如く恐るべき罪の蛇も靈魂と共に居りて、かれをいざなひ、且説勸めん。さればもし靈魂はこれに同意するならば、無形なる靈魂は神の無形なる惡と合す。即神は神と合すべくして、惡者の思をおのれにうけてこれに同意する者は、其心に於て姦通せん。故に汝の苦行の方法は意念に於て姦通せず、才智を以て抵抗して、内部に戦を交へ、邪惡とたゝかふてこれに従はず。思に於て彼と共に樂まざるにあり。さらば主は汝に此心懸あるを見るときは、後日汝を其國にうけん。

廿七、主は或者を攝理して、その神聖なる恩寵と其召命とが證明せられざるものとなりて存せしめざるを致す。しかれども或者をば放任的に攝理して、人を試験と練習とに引入れ、人の自由なる任意の顯然としてあらはるゝを爲す。けだし思難と試験とにかゝる者は、もしこれに堪ふるならば、天國を奪はれざらん。ゆゑに、ハリス・デア・インは艱難なる境遇に於ても悲まず、嘆かざるべし。もし不幸或は艱苦を以て試みらるゝときは、これに驚かず、却て貧を樂みて、これを以て富に易へ、禁食を樂みに易へ、譏謗と汚名とを榮譽に易へんことを要す。これに反して彼等は、もし此生活

に於て或る名譽と爲すものに遇ひ、及び肉體の安樂或は富或は榮譽或は奢侈に引誘するものに遇ふるときは、此のすべてを樂まずして、これを避くこと。火を避く如くせんことを要するなり。

廿八、有形世界に於て少數の民の蜂起して王と戦はんとするあらば、王は自から出軍するを難んせざるべきも、兵士と諸將をつかはして、彼等は戦を交へん、されど多數の民蜂起して、その國を荒さんとするときは、王は自から廷臣及び己の軍隊と共に出で、軍事を指揮するの已むを得ざるあらん。ゆゑに己の價値に意を留めよ、神は其軍隊と共に、即天使等及び聖なる諸神と共に動きて自ら來り、汝の爲に防護者となりて汝を死より救ひたまへり。されば汝は堅く立ちて汝の爲に照管の如何なるを想ふべし。我等は猶此生活に在る者として、浮世の事より譽を取らん。王あり、貧にして病める人を見て、彼を耻とせず、醫員を以て彼の疵を療せしめて、彼を己の宮に移し、王衣王冠をかうむらしめて、彼と晚餐を共にしたりとせん。天の王ハリス・トスもかくの如く病人に來り、彼をいやして、王たる晚餐を彼と同らし給へり。加之彼の意を強ふることをせず、たゞ勸諭を彼に施して、かれを如此の尊榮に昇せたまへり。

廿九、福音經に録していへり、王は欲する者等を召ばん爲に其僕をつかはし、これにつげていひけるは「視よわが筵はそなはれり」マトフイ廿二の四と然れども召はれたる者等は自からこれを辭し、一人はいへり「我牛五綱を買へり」他者はいへり「妻を娶れり」とルカ十四の十九、廿、召ひし者は支度したれど召はれたる者等はこれを拒みて、實にみづから有罪者となりしを見るか、ハリスタアコンの價値もかくの如きものあり、主はかれらの爲に國をそなへ、彼等を召びて入らしむれど、彼等の欲せざるを見んしかれども、ハリスタアコンが嗣がんとする賜につきては、左の如く言ふを當然とすべし、即各人はアメムの造られし以來世の終に至るまで、サマナと戰ふて患難を忍耐したりとせんも、これを以てその嗣ぐべき所の榮に比ぶれば、彼は何も大なる事をなしたるにあらざるべし、何となればハリスタスと與に無窮の世に王たらんとすればなり、光榮はかくの如く靈魂を至愛して、自己と其恩寵をこれに與へて之に信任し給ひし者に歸し、光榮は彼の大なるに歸す。

三十、視よ、こゝに坐する所の兄弟よ、外見によれば我等は皆一の形像と一のアメリの顔面とを有すしかれども、隠に其内部に於てはみな一の任意と一の心となるか、我等は皆一皆善にして、且敬虔なるか、或は我等の中或者のみ此の如くなる

か、何となればたとへ皆相共に坐し、一人の如き狀をあらはして、皆一のアメリの顔面を有すといへども、一はハリスタス及び其使等と親與して、他はサマナ及び魔鬼等と共にすればなり、聰明なる本質、即内部の人の外部の人と別物なるを見るか、けだし皆一人の如きの狀を自からあらすも、一はハリスタス及び天使等と共に居り、他はサマナ及び汚鬼等と共に居るなり、故に心には或る無限なる深處のあるあり、かしこには宴會の場所もあり、寢室もあり、門も、玄關も、多くの用部屋も、出口もあり、かしこには義と不義との行を働く室もあり、かしこには死もあり、かしこには生命もあり、かしこには善なる賣買と又これに反對なる賣買もあるなり。

三十一、廣やかなる室あらんに、瘴癘して種々なる惡臭と死體の多きをみちみたりと想ふべし、かくの如く心もハリスタスの室なり、しかれども彼は悉くの不潔と惡鬼の群とにみちみたる故にこれを新にし、且改造して、内部の客館と寢室とを備へんこと肝要なり、けだし王たるハリスタスは天使及び聖なる諸神と共に來りて、かしこに安んじ、かしこに居り、かしこに來往して、其國を基すべければなり、我々言はん、大なる船あらんに、全く裝鋼し了るときは、船長は船上にありて指揮統御し、一を隨責して、他には爲すべき所を指示さん、かくの如く心も舵師たる智と責む